

A Reproduction of Torao Tago's Diary of January-August 1945, with Bibliographical Notes

IZUMI Tsukasa

Abstract

This paper is comprised of the reproduction of a eight month period of Torao Tago's diary, which in total covers the six years from 1940 to 1945. Tago became famous after his play won second place in a creative writing contest sponsored by the magazine "KAIZO" in 1931.

This period is covered in the diary, from January to August 1945. Tago and his family lived in Hatanodai, Tokyo. At that time their life was very hard. Food was hard to get. What was particularly difficult was the U.S. air raid. On August 15, 1945, Japan lost the war. Tago seemed to believe in Japan's victory. Because of that, he was greatly shocked.

From this diary you can read about the changes in life and thinking of one novelist during the war.

(研究資料) 田郷虎雄日記：1945 年 1 月～8 月

——太平洋戦争末期から敗戦へ至る作家の日記

和 泉 司

1. はじめに

本資料「田郷虎雄日記」（1940～1945 年までの六年分）は、これまで 1940 年及び 1941 年の二年分の翻刻本文を『跨境 日本語文学研究』の第 7 号～第 10 号において公開してきた。今回は、本資料の執筆最終年にあたる 1945 年の 1 月から日本が太平洋戦争に敗北する 8 月までの期間の分を翻刻・公開している。

よって、本資料の解題・解説については、『跨境 日本語文学研究』の該当号に既に発表済みであるため、ここではそれを踏まえつつ、簡易な説明を行うことにする。当該誌は PDF によって電子公開されているので、より詳細な解説についてはそちらもご参照いただくようお願いしたい。

2. 田郷虎雄日記と田郷虎雄について

冒頭で述べたとおり、本資料は、戯曲作家・小説家の田郷虎雄（1901～1950）の遺した日記（以下、「田郷虎雄日記」と称す）の翻刻である。

「田郷虎雄日記」は、田郷虎雄の三女・阿部京子氏が長年保管されていたものを、阿部氏のご厚意により筆者がお預かりし、その内容をこれまで田郷虎雄及びそのテキスト研究のために参照させていただいてきた。阿部氏は 2000 年に田郷虎雄の著作権保護期限が切れるまで、そのテキストの著作権継承者であった。

阿部京子氏は 2018 年 8 月 4 日に永眠された。筆者の重ねての訪問、質問にいつも御丁寧にご対応くださったことが忘れられない。大変なご迷惑をおかけしたにもかかわらず、十分な研究成果をお伝えすることができなかったことを反省しつつ、研究を進めている次第である。

また、日記に登場する田郷の友人・親戚については、阿部氏のご息女である田知行公美子氏に度々ご教示いただいている。ここに深く感謝を表す。

「田郷虎雄日記」は 3 年分記載可能な「当用日記」(博文館発行) 二冊分、期間としては 1940 (昭和 15) 年から 1945 (昭和 20) 年までの 6 年間分の日記である。田郷虎雄の日記記述は非常に詳細で、面会した相手、届いた手紙、執筆原稿のタイトルと枚数、原稿料と収入までも記載している。また、国策的な文化・文学・演劇団体の運営に参加していた田郷の記述は、その実態を理解するためにも重要である。

田郷虎雄は長崎県の平戸出身で、長崎師範学校を卒業後、佐世保市で小学校教員をしていた。1927 (昭和 2) 年、家族を伴って上京し、先に上京していた兄 (田郷水門氏) の仲介により、東京で小学校教員をしながら戯曲や少女小説を発表していた。

田郷の転機は 1931 (昭和 6) 年、第四回『改造』懸賞創作に応募した戯曲「印度」が二等当選したことである。以降、田郷は著名雑誌に多くの執筆機会を得た。さらに満州事変が起ると、田郷は満洲開拓関連の戯曲を断続的に発表するようになり、1939 (昭和 14) 年に大陸開拓文芸懇話会が結成されるとそのメンバーに名を連ね、国民精神総動員本部、後には大政翼賛会文化部、日本移動演劇連盟等で活動した。戯曲家・少女少年小説家として活動していた田郷は、素人演劇、農村演劇、児童演劇作家として戦時下に重宝される存在となっていた。

しかし、戦後は作家としての活動の場の多くを失い、戦前に発表した少女小説等を単行本として出版することがわずかな活動であった。戦後の復興と共に活動の場を回復することができたかもしれないが、残念ながら田郷は戦後 5 年、1950 年に胃がんのためこの世を去った。

3. 田郷虎雄日記の内容

「田郷虎雄日記」には田郷家の私的な内容も多く書かれている。筆者は翻刻に当たり、それらの私的内容を削除するか伏せる必要があるかを阿部氏に確認したが、70 年以上昔のことであるので、気にせず公開してかまわないとのご許可をいただいた。そのご厚意に従い、原文をそのままの形で翻刻している。

田郷虎雄は現在の東京都品川区旗の台に家族と共に暮らしていた。日記には旗の台、荏原、中延、洗足といった周辺地名が頻出する。

日記に頻出する人物については、以下に簡潔に説明を付す。

登美子：田郷登美子氏。田郷の妻。1941 年まで、小学校教員をしていた。

洋子：田郷洋子氏 (当時)。田郷の長女。今回 (1945 年) の日記中では小学校教員。日記中、勤務先の学童疎開に参加し、富山県に移住している。

京子：田郷京子氏 (当時)。田郷の三女。本資料をお預けくださった阿部京子氏。今回 (1945 年) の日記中では、高等女学校を卒業し、海軍技術研究所に就職したところであった。

美知子：田郷美知子氏 (当時)。田郷の次女。田郷の兄である田郷水門^{みなと}氏の養子となり、同居はしていなかったが、同じ都内 (高輪近辺と思われる) に住んでいたため、きょうだいの行き来は頻繁であった。今回 (1945 年) の日記では、栃木県に疎開中であった。

宮下君：登美子氏の妹・萩子氏の夫と思われる（田知行公美子氏に確認）。1945年には長崎に転居しているが、日記中では何度か上京し、田郷を訪ねている。

永井君：永井麟太郎（1907～1985）。戦後は児童劇作家。1945年までは田郷と共に演劇活動をしていた。

千秋実：俳優（1919～1999）。戦後舞台俳優として活躍後映画・テレビの世界に進み人気を得た。

園池氏：園池公功（1896～1972）。園池子爵家の男子。評論家。大政翼賛会文化部や日本移動演劇連盟の有力メンバーで、田郷は園池に従う立場だったようである。

また、佐々木孝丸、久保田万太郎といった著名な作家、俳優の名前も散見される。福島知樹という人物も良く登場する。この人物も日本移動演劇連盟に参加していたが、詳細は今後調査したい。

「文報」「産報」と略されている団体名もよく登場する。これらは、当時の国策団体である「日本文学報国会」「大日本産業報国会」のことであり、日本文学報国会の総務部長であった北條秀司などの名前もよく出てくる。吉田千里、白濱といった人物は、田郷が日本移動文学連盟の幹部だったころの部下である。

しかし、1945年に園池に勧誘されて田郷が参加した「航空工業教育協会」については、まだ調査が及ばず、実態は不明である。この時田郷が結成した劇団「つばさ隊」は千秋実や佐々木孝丸といった戦後活躍する俳優が中心メンバーとして参加していて、日記中では日本移動演劇連盟の所属劇団となっているようだが、1945年に加入しているからか、「つばさ隊」という名前は日本移動演劇連盟の資料ではほとんど見かけられない。今後調査を進めたい。

その他、小原氏、岩田氏、田実氏といった家庭の人々の名前が出てくるが、これらの人々は近隣住人で、隣組、町会活動で頻繁に交流をしていた。また、戦争末期において家庭労働（防空壕作り、農園作りなど）や食料調達などで強く結びついていることもうかがわれる。特に食糧については、窮乏しているにも拘わらず、住人同士が入手した食糧を必ず近隣で分け合ったり交換している様子が描かれている。

本資料は1945年1月1日からのものである。新しい年を迎えたところだが、太平洋戦争末期であり、物資的にも窮乏し、年始から米軍の空襲に脅かされるという困難の年であった。

そして、田郷家にとっても、辛いことがあったばかりの新年であった。1944年12月、登美子氏は四女・蒔子さんを出産するが、産後間もなくこの子は息を引き取ってしまうのである。空襲が続く中、本資料冒頭の登美子氏が自宅内に留まり、警戒警報・空襲警報中も防空壕に行かず押入に居るのは、産後の静養のためであったと思われる。

今回の資料では、1945年の東京への空襲が以下に頻繁であり、住民生活を追い詰めていたかもし読み取ることができる。東京への空襲で最も有名なのは、1945年3月10日の東京大空襲であるが、田郷の住んでいた荏原区（現在の品川区）はこの時被災しなかった。空襲の緊迫感はあるものの、田郷の周辺では日常生活が続いており、田郷自身も、新聞が来ないので困る、といった記述をするなど、身近に感じきれていない部分もある。ただ、東京大空襲の後、政府の指示によ

り、田郷の住居は強制疎開（延焼をふせぐため、電車路線沿線を空き地にする政策）の範囲内とされ、取り壊されることになった。そのため、1945年3月下旬、10日程の間に、田郷家は引越を迫られ、最終的に近所に見つけた空き家に移ることになった。

田郷による空襲の記述がもっとも緊迫するのは、5月23～24日の品川周辺への大空襲である。このとき、田郷の住む町内が被災したからだ。この時は必死の防災活動を行った様子が書かれている。幸運なことに、この空襲でも田郷の家は焼け残り、そのまま住み続けることができた。

空襲が頻繁になると、田郷虎雄日記の前半（1940～42年頃）までは毎日のように行き来していた東京都心（銀座方面）へ移動するのも大変な困難があった。まず電車が時間通りに動かず、やってきたとしてもものすごい混雑である様子が何度も記述されている。このような状況下で、田郷は新たな劇団を組織し、1945年6月から本格的に活動を始めたようである。残念なことに、ここで組織した「つばさ隊」についての活動記録は別の記録帳に記載していたらしく、本日記では、6月下旬から8月上旬までの期間の記述が著しく少なくなっている。

4. 凡例について

本資料は今回、「田郷虎雄日記」全体のうち、1945（昭和20）年の1月1日から8月31日までの八ヶ月分を翻刻したものになる。『跨境 日本語文学研究』での公開は、半年分ずつ行っているが、今回は、戦争末期の追い詰められた生活の描写から、敗戦を迎えた田郷の状況を続けて把握することが適切だと考え、八ヶ月分とした次第である。残る分も、順次公開を続けていく予定である。

翻刻は、以下の例に従って行った。

凡例

- 1 原則として、漢字の旧字・俗字・異体字は通行のものに改め、旧仮名遣いは原文のままとした。但し、本文中、旧仮名遣いで表現すべき箇所が現代仮名遣いになっている箇所も多く、それらはそのままとした。

例1 「っ」は大文字の場合と小文字の場合が混在している。

例2 「～ようだ」は旧仮名遣いでは「～やうだ」となるが、本文で多くは「～ようだ」と表記されている。

また、人名については、旧字を用いている場合はそのままとした。

- 2 誤記・誤字・脱字が明白な箇所はその箇所の直後に（ ）を付してその括弧内に正確な表記を記入した。
- 3 句読点及び改行については、判別が難しい場合、翻刻者が適宜判断した。また、文末で句点がない箇所については、翻刻者の判断で適宜句点を追加した。
- 4 原文は縦書きであるが、本資料は横書きで表記するため、「くりかえし」を示す各種記号の中で、横書きに適さないものは翻刻者の判断でひらがな・カタカナに書き換えた。

- 5 人名、地名の羅列が行われている箇所では、適宜読点等を補った。
- 6 日記本文では、書籍名・雑誌名にカギ括弧がつかなかったり、省略表記をしていたり（例：「小学生の科学」→「小科」）、漢字をカタカナに開いて表記したりしているが（例（「少女倶楽部」→「少女クラブ」）、基本的に原文のままにした。
- 7 各月冒頭「諸事要録」欄に、月内に書いた原稿の数量と受け取った原稿料が記載されている。この欄については、その文学史上の資料的価値から、原文の形式より見やすさを優先することにして、各月の体裁を統一し、作品タイトルや掲載紙誌名、出版社等の記述を分かる範囲で正確なものに整えた。また、原文では漢数字が用いられているが、この項目についてはアラビア数字に置き換えた。
- 8 日付の前に「○」が付いている日記があるが、これは本文に記入されているものである。何を示しているのかは不明。今回の範囲では3回「㊦」となっている記述もあった。

5. 田郷虎雄日記：1945年1月～8月本文

一月諸事要録

執筆

随筆「場末の映画館で」『興行日本』 10枚

収入

辻小説「ニッポン フィリッピン」 10円

『黒龍江』薄謝（追加） 220円

税 26.40円 実収入 193.60円

合計 230円

1月1日（月） 晴

大晦日の夜より今日元旦の暁にかけて前後三回の敵機来襲あり。鉄兜に身を固めて外に出れば十七夜の月、白々に〇えてあり。

間もなく警報も解除になりたれば五時すぎ祝賀の準備にかゝる。

今年は物資昨年より更に一段と不足、●●●しかも完全に娘二人の手になる料理なれど、産後の登美子も押入●●を出て一家四人、明るく新春を祝ぐ。

今年とは^いそも用ひず、平尾氏より入手の赤きブドウ酒をもって、これに代ふ。

祝宴後、一睡。洋子は学校に行く。（当直）

数日分の新聞を整理し、京子としばらくチェッカーをして遊ぶ。

代々木以来の恒例たる兄一家も阿部一家も今年は東京になく完全に家族のみの新年なり。

（補遺欄につゞく）

（以下補遺欄）

一月一日

いよいよ重大化せる戦局よりみれば勿論のこと、且つは暮の我が家の不幸を考へるも当然予想し覚悟せることにはあれど、多少の寂しさなしとせず。

午後四時前後、安藤誓君来る。この男も、この数年わが家の新年の客の一人なりしが、今年はいよいよ近く東京生活を打切り帰京の由、おそらく年賀の客として彼を東京に迎へるはこれが最後なるべし。よって本人持参の日本酒五合にわが家のビールを加へて共に新年を祝ふ。

誓君を泊めて、早目に休む。元旦の夜は幸ひ空襲はなかりしも夜中に目ざめ暁に再び眠る。

1月2日(火) 晴

誓君と昨夜の飲み残しの酒一合足らずを飲み、配給による雑煮一杯づつを祝ふ。

当直より帰りし洋子を京子とともに誓君に同道させ、棒炭をもらひに行かしむ。

今日は正午より銭湯あり。三時頃出かける。久しぶりに寛ぎて入浴出来、ついでに頭髮を洗ふ。夕食には一家四人揃ひてスキヤキをなし晩酌をなす。酔ひてしばらく休み、起きて餅一個づつを食ふ。

二時頃、目ざむ。空襲は今夜もなけれど、行く末のことども考へて眠られざる思ひあり。

大日本興業協会より「黒竜江」への薄謝として二百円、小切手にて送り来る。

又、山形三郎入営の報告あり。

1月3日(水) 晴

洋子、当直で朝から出かける。

終日意気あがらず。

新聞を読み、京子の炊事の手つだひをし何といふこともなく一日を終る。

夕食に酒一本を飲みそのまゝ眠る。

九時頃、目ざめ床の中にて世界戯曲全集中のデユウンズの「うそつき連中」を読む。

◇

床の中に行末のことなど思ふ。心しづむものあり。されどこゝより奮起して大東亜文学にふさはしき創作に精進せざるべからず。

◇

名古屋地方(名古屋地方か?)(他に浜松、大阪)にB29九十機来襲せりといふも帝都には今日も来らず。

1月4日(木) 晴

朝寝。京子の炊事にて朝食。

縁の掃除など手伝ふ。

暮より待ちゐたるエナ会社やと今日とりに来る。申出の倍以上の参円を与ふ。

明後六日に入営するといふ山形三郎挨拶に来る。寸志五円を贈る。

早目に夕食。三人(洋子当直)で、ゆっくりラヂオを聞き、ぼつぼつ寝酒でも飲もうかとしてゐると、警戒警報…。

解除後、配給の焼酒を洋子京子が美枝夫人よりもらひ来て登美子にお年玉とせしサイダーにて割って飲む。うまし。すぐ眠る。途中で目ざめたが、暁方の警戒警報までまた眠る。

1月5日(金) 晴

暁五時、警戒警報発令、そのまゝ起きて解除後朝食をすまし、そのあと一眠りする。

庭に焚火をして湯をわかつて座敷の掃除をし、新聞を読む。

登美子も起き出で日ざし暖き縁端にて昼食…などと記せば、いと長閑げなるも、この日ごろ我底知れぬ悩みあり。この決戦下●に文人として如何に生きるべきかの問題について…。

悩み疲れて午後一睡す。

朝園池氏よりもらひたる見舞の葉書に対し嬰兒死去の報告をなす。

三時の報道を聞きたる後、銭湯に行く。

一旦早く床につきしも例により警戒警報に起きる。一これはもはや日課の如し。

1月6日(土) 晴

暁五時すぎ警戒警報発令、昨日と同じくそのまゝ起きて朝食をすまし、京子に手つだひて掃除をなす。

宵と明方と今日も二度の敵機来襲あり。

大詔奉戴日の今日より心機を一転せしめて机につかんとせしも寒さ甚だきびしく炭すでにな

寄るも二度の敵機来襲あり。

㊤ 1月10日(水) 晴

午前中、仕事をすべく昨日のうち消炭を作り置きしもタバコの配給なく午前中は登美子に野菜スープを作り与へたるのみにて空虚に過す。

正午すぎタバコ七十本(十日分)の配給あり。漸く人●ごころつき床屋に行き、二日分の新聞を読む。

午後三時、昨日の空襲に発する大本營の戦果発表あり。

庭に材木を燃して明日の仕事のために消炭をつくる。

当直の洋子、蒲田のニュー、トーキョーまで生ビールをとりに行き持ち帰る。

嫂と美知子、思ひがけなくも疎開先より帰り来る。

夜、永井君来る。明後日福生に行くことを約束する。

夜より明方にかけて三度、敵機来襲あり。警報解除の度に生ビールを飲み、一升の生ビールを一夜のうちに飲みつくす。

1月11日(木) 晴

美知子と嫂は用達しとて出かく。

風甚だ寒き日なり。

燃料いよいよなし。家中を探して木製の箱のうち不急のもの悉くをこわして薪をつくる。

◇

“朝食にシェクスピア全集を燃し、夕食にモリエールを焼く。”

◇

●●●

夜より暁にかけ三回の敵機来襲あり。三度目には起き出でずラヂオの情報を聞きつゝ眠る。

1月12日(金) 晴

洋子、京子の朝食の支度を手つだふ。

永井君誘ひに来る。旗ヶ岡駅に同君の細君を落合ひ、福生村に渡辺渡を訪ふ。登美子のために雞を得んとてなり。

目的を達せず渡辺君自らの手にて作りたる米による餅の御馳走にあづかりて午後、同家を辞す。

渡辺君は疎開の先駆者にして右の地において自ら農業に従事しつゝ、文筆にもたづさはれるもの。

羽村に到る。古賀家を訪ひ、同村の村長並木氏宅と寺とを訪ふ。並木氏にて牛乳の御馳走になりたれど、目的を達せず。永井夫婦を伴ひて古賀家に一休みし、野菜類を得て帰る。

五反田より旗ヶ岡までの電車の混み方言語に絶し、つひに永井君等と別々に帰る。

この夜、空襲もなし。

㊤ 1月13日(土) 快晴

美知子、今日疎開地へ帰伝す。

朝のそのゴタゴタにわざはひされて執筆ならず。庭に書を焼いて湯をわかし登美子の全身を拭いてやる。

午後、書くことは固より読む気も起らず。去脱せる人のごとく唯只空しく夕食を待つ。

入浴後、防火用水を補充し、夕食、酒一本を傾けて眠る。

当直の予定なりし洋子帰宅す。

嫂、帰らず—そのまゝ疎開先へ帰りしならん。

◇

敵米はつひにルソン島に上陸せりといふに、●こゝにかくの如く愚かなる男一疋、小さきその身をもてあまりてあり。

1月14日（日） 晴

大日本興行協会の原稿を書くべく机に向ふ。頭すっかり枯涸して全然ものにならず。残り数滴の酒を飲ませてみるも効なし。

仕方なく自ら●●書を燃してスープをあたゝむ。午後、吉田千里嬢の令弟幹夫君来訪。数時間とりとめもなき文学談をやる。

平戸の姉より小包来る。するめ、とびうを、にはし、餅…故郷のかをり高きものばかりで有難し。

◇

京子、海軍技術研究所に就職のこと動員署より学校に通知ありたる由にて新規就職理由書の提出を求めらる。洋子に代筆せしむ。

◇

早々の就寝。

この日も敵機の来襲、京浜地区にはなし。

B29 六十機、中部地区に來襲、伊勢外宮に投弾。

1月15日（月） 晴

原稿やうやく書けさうになる。

然るに去る六日白濱君より来れる手紙のことや吉田幹夫君の来訪などに絡みて登美子またまたヒステリーをおこし、原稿どころではなくなつて来る。

宮下君来り、佐世保の消息をもたらす。…佐世保の街にも商店は玉屋一軒になりたる由。

同君辞去後、登美子との争をくりかへす。

あゝあゝ、呪はれてあれ、この愚夫、愚婦や！

所在なければ京子の炊事の手つだひなどして早目に夕食。

洋子を●●集団疎開（学童）に参加せしむべきか留守部隊としてとゞまらしむるべきかについて、●本人を相手に色々と談ずる

この日もまた敵機の来襲。京浜地区にはなし。

臥床後、文報より二十日午後一泊の予定で来て

くれとの電報あり。

㊤1月16日（火） 快晴

嫂から分けてもらった残り少の炭にて、談をとり随想「場末の映画館で」を書く。いゝものになりさうだが、昨日の頓座で一気には書けさうにもない。千里嬢に電話して明日の午後とりに来てもらふことにする。文報にも電話してみたが、北條君も羽田君も不在。

十時頃、数日ぶりに警戒警報発令。が、まもなく解除となる。

登美子と和解し、スープやトロロ汁を作つて食べさせる。

午後、隣家から銘（鋸か鉋か？）借り、庭の檜三本を切倒して薪をこさへる。

武者小路実篤氏の「愛と死」中の「棘まで美し」を読む。面白い。

1月17日（水） 晴

原稿おもはしく書けぬ上に登美子との諍ひ又もぶり返し、すっかり絶望を感じる。

おまけに空箱を割って薪を拵へようとして左手の人差指に怪我をする。

午後、約により吉田千里嬢原稿をとりに来る。明後日新橋駅にて渡す約束をし、しばらく談笑する。父君のもとに酒をもらひに行く話なども出、旗ヶ岡駅まで送ってゆく。

1月18日（木） 晴

指の怪我も痛いし、数日来のもつれも未だとけず気分が重いので終日寝て暮す。

但、昼食頃、練炭の配給があり、自分でとりに行く。

1月19日(金) 晴

甚だ寒い。が、今日は昨日配給になった練炭があるので、せめてもの思ひで、せっせと原稿を書く。

「街の●映画館で」九枚を書き、そゝくさと家を出る。新橋駅で吉田千里嬢に手交し、演劇協会に行く。中野実、佐々木孝丸、秋月桂太その他の諸君も来合せをり、うちつれて交詢社における陸軍献納脚本に関する会合に出席。

会議の最中、警戒警報出づ。数編隊と聞き、家には京子も風邪で休んでゐるので、ちょっと気になる。が、間もなく名古屋地区(名古屋地区?)に侵入の旨わかる。

北條秀司君より、明日の千葉行につき電話かゝり来る。

閉会になるや早々と帰途につく。新橋駅にて解除になる。

家に帰り、吉田千里君と大島万世氏に手紙を書き自分で速達しに行く。

1月20日(土) 晴

九時近く家をでる。

文報一戯曲作法編纂小委員会。一出席者少きのため、大綱だけを打合せて散会。

この間、日赤病院に白濱君を見舞ふ。

北條秀司、関口次郎の両氏とともに両国駅に行く。佐々木峻君の迎を受け、同道で八街(千葉県印旛郡)に向ふ。昨秋、疎開は満洲へのテーマで

戯曲の委嘱を受けたに對する慰勞の宴である。

主宰者側は開拓課長以下大東亜省の官吏(ゝ)満洲移住協会の理事、千葉県庁の人。客側は関口、北條、●田郷、谷屋、八木保太郎。総勢二十五人。酒八升到ビールダース、なかなかの盛宴である。

食後、同勢ずらりと一列横隊に枕を並べて寝る。

㊤1月21日(日) 晴

八街の花家で夜中に目ざめ、そのまゝ眠れず。起きて気がつくと北條、八木、谷屋の三君は昨夜の中に帰ってゐる。

朝食をすまし九時五十分の汽車で帰途につく。相変ず満員で千葉までは貨物車に乗る。

一時すぎ帰宅。主宰者側からの●●●(大東亜)おみやげ一落花生一升余りは大いに家人を喜ばせる。

一千葉で聞いた話によると、落花生一升の暗値(闇値か?)は40円の由。

指の怪我のため数日入浴を止してゐたので、早々に湯に行く。

1月22日(月) 晴

寝そべって登美子ととりとめもないことなど語ってゐるうち、急に風邪気をおぼえて来る。

吉田千里嬢、原稿●とゞけに来てくれる。書直すためにこちらから頼んでゐたもの。

午後、床につく。

夜、警戒警報が三度も出たが、熱があるので起きず。

(洋子は当直)

1月23日(火) 晴

終日臥床。

谷口さん(助産婦)来る。タバコ●三十本と甘酒をもらふ。

家永夫人来る。ウキスキー少々とタマゴ三個をもらふ。

…タマゴもこの頃は一個一円でも容易に手に入らぬ。

夜、眠れずに困る。

1月24日（水） 晴

明方近くになりて、やっと少し眠る。

気分もまだよくないが、起きて興行協会の原稿を書く。こちらの都合で遅れたのだから届けに行くつもりだったが、気分わるく、とても行けさうにもないので千里君に電話をかける。通ぜず。

平戸の姉より手紙と小包来る。平戸の鰯である。同時に平戸の久家氏よりスルメも送り来る。夕刻近く永井麟太郎君来る。鶏肉とそれを煮るためにとて木炭とをもって来てくれる。大変うれしく思った。一で、家永夫人から昨日もらったウキスキー残りを出す。但、グラスに一杯しか残ってゐない。●●然し、永井君を（と？）喜んでそれを舐めるやうにして飲む。

近く中原明善氏の家や正善君の疎開先を訪ふ約束をする。

今夜も眠れず。

1月25日（木） 快晴

風邪気は依然としてよくないが、原稿をもって●●●●大日本興行協会を訪ふ。主任の大島氏にも逢ひ、千里君と父君に酒をもらひに行く相談などして帰る。

●銀座を歩いて新橋から電車に乗る。店らしい店もなく銀座もすっかりわびしくなったが、朝であり快晴であるためか、すがすがしい気がする。三昧堂で早稲田文学など買ふ。

午後、登美子ととりとめもない話をして過ごす。夕食後になって当直の筈であった洋子帰って来る。

◇

自分も京子も今日やっと手に入れた風邪薬を服用する。

今年の風邪は長びくといふ噂だが、どうもさうらしい。

1月26日（金） 晴

風邪なほ快からず。

午前中は机のわきで焚火をしながら手紙を書く。平戸の姉、「日章旗」の編集主任になったといふ泉本三樹君。姉には鰯その他の代金二十円を送る。

産後はじめてお礼に平尾さんのところに出かけた登美子、正午に帰る。縁端で昼食をしながらその報告を聞く。日本酒二升二百四十円、ビール五本四十円…。今日また日本酒五合持帰る。これの代金は八十円である。流石に考へこまざるを得ぬ。●いよいよ勝利の日まで禁酒しよう。夕方、風邪を押して糞便の始末をし、洋子は当直なので早目に夕食をすまし、七時頃酒を飲む。眠る。数日ぶりに警戒警報出づ。解除後、眠れぬまゝに又一本つけて床の中で飲む。これで今日一晩に四十円飲んでしまふわけだ。うらさびしい気持である。戦に勝つ日まで、あるひは我が事なるまで。

然し、もはや絶対に禁酒しなくてはならぬ。●●●●（再び眠る）。再び警戒警報出づ。身支度をとゝのへて飲みつゞけるうち、解除となる。眠る。三度目の警報は夢の中にて聞く。

◇

自分をみぢめなものに思つてはならぬ。—これは先日千葉から帰る車の中で考へた自戒の言葉である。

然り、自重せよ。

1月27日（土） 晴

やはり風邪の気が去らないので、午前中は新聞を^マ読^マただけで過す。

暖い縁端で登美子と二人きりで例のごとく昼食をとり、いつもよりは長く^マ食^マ後の無駄話をしてゐると警戒警報発令。（時半頃）

情報によると編隊らしいので待避壕その他の準備をする。間もなく空襲警報となり、一二度待避もする。

三時頃、解除。

夕食前に銭湯に行き、旗台役員時代の根本氏と一緒に、その人の知合の話によると今度は市街地が狙はれたらしい。

夕食に、一本つけ、十時頃まで眠る。警戒警報発令。

情報を聞き、最後の一本を飲む。一文字どほり、暗(闇か?)による酒は之をもって最後とする。

1月28日(日) 晴

目ざめてはゐたが、洋子に起されても登美子に起されても起きず、八時近くにやっと起きる。夜●が嫌ひで朝を喜び、朝寝を嫌った自分が…。あゝ希望の日よ、再び我にかへれ。一と叫ぶ前に、希望は己の力で掴むべきものであることを知るべきである。勿論それを知ってはゐるが…。

◇

風邪気味も漸く快方に向ったので庭に出て薪を割り、ついでに湯をわかす。

敵機二回にわたり来襲。紺碧の空に高射砲の弾幕を見る。

警報下に髪を洗ふ。

吉田幹夫君来らず。

○1月29日(月) 快晴

今朝も起きがけ愚図つく。然し自分で気を取り直して一旦は起きたが、食後また床にもぐりこむ。登美子になだめられて十時すぎやっと起きる。

美枝さん来る。

が、今日はボース・ラス・ビハリさんの告別式なので、国民服に着更へ、香典十円をもって会場たる芝の増上寺に行く。葬儀委員長たる広田

弘毅氏や養父相馬氏、数多の印度留学生等の姿が目につく。

故人の余栄を語る勲二等旭日重光章が痛ましく見ゆ。

もう十年生かしておきたかった…の声、参列者の口より洩る。

日比谷に出る。

一昨日の敵機都心爆撃の跡を見る。東西は日比谷から昭和通、南北は銀座三丁目より六丁目まで、その間をやられたらしく●縄張りがしてある。新橋より帰る。今晚また宮城に帰るといふ美枝さんと語る。

午後三時半、銭湯に行く。

●洋子も京子も割に早く帰って来たので早目に夕食。

七時の報道を聞き、希望なく早々に眠る。

○1月30日(火) 晴

朝食後、庭に焚火をして湯をわかし、ヒゲを剃り、消炭をつくる。机につくためには、まづ炭からして作らねばならぬ今日この頃である。

明日から宣誓劇にかゝるべく所得税の申告その他、事務的なものの整理にかゝる。

◇

木炭なき冬に唯一の恵は連日の快晴である。

が、わが心は依然として晴れず。

午後、仲原善徳氏編の「フィリッピン独立正史」など読み、夜を迎へ洋子は当直なれば早目に夕食をすまし、七時の報道の後には早くも床に入る。

余り早く宵のうち一睡したためなかなか眠れず。やはり書齋を守って創作をつゞくべきか…などと考へるうち、やうやく眠る。

1月31日（水） 晴

今日より宣誓劇にかゝる。まづ庭に焚火をして湯をわかし、目を洗ひ火を起して机につく。

雑誌「ニッポン フィリッピン」より自分の辻小説をタガログに翻訳したからとてその掲載誌と謝礼十円送り来る。

吉田幹夫君、友人の濱田青年●●を伴ひて遊びに来る。二人とも弁当持参なので、●昼食を共にする。一濱田君より寮でついたといふ餅をもらふ。

濱田君辞去後、幹夫君と関本行のことにつき話しあふ。

夜、就寝後、一旦熊本に帰ってゐた誓君来る。東京における残務整理のため上京の由。純白の餅、餅米によるおにぎり等をもらひ食べる。

この夜も敵機、東京には来らず。

二月諸事要録

記載なし。

2月1日（木） 晴（少々曇）

●午前中、新聞を読んだり、誓君と雑談をしたりして過す。

早目に昼食一白い純日本米である一をすまし、家を出る。

鉄カブト持参で出かける。有楽町駅（三十日より開通）に下車し、銀座の被害跡を見、大日本興行協会に吉田千里嬢を訪ふ。関本行の打合せをし、日比谷のB29 パノラマを一見して、文報に行く。劇文学部幹事会である。散会后、水木洋子女史と銀座に廻り、もう一度、空襲の被害跡を見て帰る。

前途に光明なく、若き日の覇氣再び還らず。憂愁のうち早々に床につく。

十時頃、誓君帰宅。

十二時頃、警戒警報発令さる。一數日ぶりである。が、間もなく解除となる。

2月2日（金） 晴（積雪）

本年最初の雪…。

誓君も今度は本格的に帰郷することだから無●下に抛っておくわけにも行かず、朝のひとつき雑談をしたり共に新聞を読んだりして過す。

ために原稿を書く気になれず、仲原善徳氏の「フィリッピン正史」を読んで暮す。

午後、吉田幹夫君来る。関本には姉さんと二人で出かけることになったからとて、瓶二本を借りて行く。ついでにリュツクサツクも貸して上げる。

自分としては青年との二人旅を寧ろ楽しみにしてゐたのだが、先方の真意がよくわからないので、向ふのいふとおりにすることにする。

夜、酒もなく話もなく希望もなく早々に寝る。

八時頃、敵機一機来襲。最近のコースと違ひ、わが家の真上を通過したので、ちょっとドキツとしたが、ことなく間もなく警報も解除となる。

2月3日（土） 晴

登美子にノリマキをこさへさせ、上野駅に行く。幹夫君姉弟に弁当を贈るつもりであったが、逢へず。八時十五分まで上野駅にゐて帰る。

一寸の旅行も実に変なことである。

帰って、明日のために消炭をつくり、ついでに頭髮を洗ふ。

今村忠助氏の「フィリッピンの性格」を読む。

登美子と幹夫君のことを中心にして話をする。

誓君、●出先より帰って来たので銭湯に行く。

下の湯が今日も休みなので水神湯に行く。大変な混み方でお湯に入ったやうな気がしない。

帰ってみると、洋子、学校で気分が悪くなって

小使いさんにつれられて帰ったとて寝てゐる。
近來わが家の喜ばしきことなし。

●あたかも節分なれば悪氣●を一掃すべく夕食後、大いに豆をまく。
夜、天野、山田の両青年それぞれ作品(戯曲)をもって来る。かなり長く話し、作品をあづかつて帰らせる。

2月4日(日) 晴

宣誓劇にとりかゝるべく机につく。やる気は動きかけたが、ペンを下すまでには到らず。止す。誓君も出先より帰って来たので、日射し暖い縁側で昼食。十日に一度の魚の配給は塩鰯一人一匹づつ…。但、その味は案外によい。
午後、明日の炭を用意すべく薪を割る。うつろごころに鉋を振ったために又々この前と同じ指を切る。沼田外科に行き治療を受く。
宮下君来る。いよいよ転勤も近いとのこと。ますますもって東京も淋しくなることだらう。
左の脛のできもの快からず。気持甚だ重し。
学校より帰っての京子の話によれば今日は^{ママ}0下七度の寒さだったといふ。
B29 百機、神戸に来襲。
比島の戦局も愈々われに不利。

2月5日(月) 快晴

朝、指の治療を受けるために沼田外科に行き、午後、眼の治療のために、中島眼科に行く。中島氏は女医にして、歌劇の男装の女の如き服装をしたる男の如き若き婦人なり。
今日はこの間わづかに今村忠助氏の「フィリッピンの性格」を読みたるのみ。
洋子の容態も一向に要領を得ず。
近來わが家に喜ばしきこと更になし。
誓君も午後より用達しに出かけ、帰り遅し。三

人のみにて夕食をなす。夕食には珍しくビフステキあり。平尾氏より入手せるなり。

◇

朝、翼賛会の桑原氏に依頼しおきし『梅の村』送り来る。

2月6日(火) 晴

眼や、快。庭に焚火をして湯をわかしヒゲを剃る。幾分気分も爽かしくなる。
沼田外科に行く。
どうせ書けさうにもないが、一応原稿紙をひろげてみる。
幹夫君来訪。関口行の土産として日本酒一升、けづり節一袋をもらふ。熊本の餅を焼いてお茶うけとし、平尾さんより入手の牛肉とネギをお土産に贈る。
文報に行く。大陸開拓文学委員会。文化動員の件につき農民文学委員会と合同で協議し、後また「大陸」のみで会議。
五反田廻りで帰って長原駅に●●降り中島眼科に行く。
夕食には久しぶりのスキヤキ。砂糖抜きであるが案外おいしい。
七時の報道後、誓君と酒をお銚子二本飲む。久しぶりの酒である。
米機つひにマニラ市の一角に侵入！

○2月7日(水) やゝ曇 寒し

昨夜の酒による眠り、十二時には覚めそれから明方の五時近くまで眠れず弱る。
●●八時十五分頃、警戒警報発令。この時刻に敵機来襲は●最初のことである。十時解除。直ちに沼田外科に行く。
気持も時間も半端になって原稿は書けさうにもなく、平戸の富美枝と千里さんにそれぞれ礼状

を書く。

午後、誓さんは千葉の友人の家に行く。

三時、中島眼科に行く。

夜、昨日もらった酒を一本つけて夕食。

夜は新聞の切抜や読書（フィリップスの性格）で過す。

早々と就寝。

神経衰弱第三期の夢をみて夜中に目ざむ。吉山唯士と死人の国を旅せる夢なり。唯士、後に石橋猪之吉に変わる。

2月8日（木） 晴 積雪

夜中に降ったのであらう、起きてみたら雪が積もってゐる。

九時、沼田外科に行く。雪は五六寸も積ってゐる。

帰って机につく。宣誓劇を書くつもりであったが、書けず。

今村忠助氏の「フィリップスの性格」を読む。

午後は中島眼科に行く。

誓君、千葉より帰らず。八時頃、日本酒一合を飲んで眠る。一眠りしたところに誓君帰って来る。持参の焼酒を床の中で飲み、そのまゝ眠る。

2月9日（金） 快晴 暖し。

五時半起床。

誓君、今朝の汽車で熊本に帰るので、朝食を共にし、同君持参の焼酒で別杯をなし、送った後、再び眠る。

十時に起きて自分で座敷の掃除をし机につく。しかし、宿酔のため書けず。

永井君を訪問しようと思って出かけようとしてゐると、警戒警報発令。

二時半、解除。

沼田外科、中島眼科の順で治療をしてもらひ、その足で永井君を訪ふ。中原善徳氏を十二日に

訪ふ約束をして帰る。

久しぶりに銭湯に行く。

2月10日（土） 晴

宣誓劇の稿、気分まともらず困ってゐるところに、午前中、二回にわたり B29 それぞれ一機づつ来襲…。

青木憲一君、思ひがけなくも●一等兵姿で来訪。二泊の帰京を許されて帰って来たとのこと。幹夫君からももらった酒のうち一本をつけ、平戸のするめを肴に気持だけの祝杯をあげ、昼食を共にする。

二時頃、警戒警報発令され、つづいて空襲警報も発令さる。

四時頃、解除。青木君帰る。

◇

B29 の来襲は五編隊約九十機にして群馬県太田町を中心に爆撃との発表あり。

◇

夜も三度、警報出づ。

○2月11日（日） 快晴

紀元の佳節にふさはしい好天気である。

前日のうち自分で作った消炭で暖をとりながら机に向ふ。だが、やはり書けぬ。自分の頭はどうかしてゐる。

この境地から自分の力で起ち上らぬかぎり渡しは自滅である。

夕食に幹夫君姉弟から贈られた酒の最後の一合を飲む。酒もこれをもって最後としよう。

所在なく親子四人しばらくチェッカーのリーグ戦をやる。京子優勝。

◇

2月12日(月) 晴

例により前日自分で燃して用意した古材木の消炭で暖をとりつゝ机に向ふ。但、原稿はまるで書けぬ。精神…どころか、生命の革新でも計らぬかぎり、もはや原稿など書けさうにない。

十時頃、敵機一機来襲。…これは夜の報道によれば見事撃墜したとのこと。昼間単機来襲の敵を撃迫(墜か?)したのはこれが最初のことなので甚だ愉快である。

◇

原稿が書けないので、シェルヴァンカの「白日の印度」を読む。

永井君を訪ね、同道中原善徳氏を訪ふ。不在。よって持参の焼酒とするめを永井君の家で二人で開く。

田代君も来る。

五時前辞去。

宵のうちに警戒警報出づ。

解除後、洋子の客来り。牛肉とネギをもらふ。

2月13日(火) 薄陽

今日も書けぬ。書かねばならぬといふ気持があるだけで、是非書かうといふ意力が無いのだ。わが生、無限の暗を行くが如く希望なく光明なし。しかも、わが生とか、はりなく戦局は進展してゆく。

読みかけの「白日の印度」を後回しにして、言論報国会の「大東亜共同宣言」を読んだり、明日のために消炭をこさへたりして過す。

夕、洋子も京子も割に早く帰り、昨夜洋子がもらった牛肉とネギでスキヤキをして夕食。砂糖ぬきのスキヤキだが結構おいしい。

夜、阿呆の如くラヂオを聞き、酒もなく床に入る。よくしたもので、かんたんに眠る。

◇

歌をつくりたいと思ふが、歌も出来ぬ。

2月14日(水) 晴

夜中の三時、警戒警報出づ。

三十分ばかりで解除となる。

朝、庭に焚火をして火をつくり湯をわかしてヒゲを剃り、さて机に向ふ。一書架より「満州事变前後」を取り出す。

十時頃、警戒警報発令。

それぞれ一機づつ二回にわたり B29 京浜地区を通過す。後の一機は、はっきりと見える。

午後は「満洲事变前後」を読む。

こゝのところ人々の好意によりタバコもやゝ豊富であったが、それもつひに尽きた。

夕食後、所在なきのあまり六時には床につき、そのまゝ寝てしまふ。

夜中に煙草を吸ガラを求めて家中を探しまはる。空しく眠る。

○2月15日(木) 曇

煙草もなく仕事する気もなく正午近くまで寝て暮す。

午後は近代日本史研究会の「満洲事变前後」を読む。好著である。読みつゝ感慨あり。

◇

敵約六十機、主力をもって名古屋に各一部をもって静岡及三重県下に来襲。

◇

夜、久しぶりに千秋実君来る。

映画界の話を聞き、その後の移動演劇のことなど語る。十時近く辞去。一北海道のするめをもらふ。

◇

完全に「その日暮し」の今日この頃である。早くこの境地を脱しなくてはならぬ。

2月16日（金） 晴

朝食中、警戒警報出づ。しかも情報によれば数十機の小型機である。つひに敵機動部隊は本土に近づいたものと見える。

箸を捨て直ちに防空体制をと、のへる。

この日、終日敵機（小型）波状来襲す。その合間を縫って「満洲事変前後」を読む。

・

◇敵有力機動部隊近海に現出。

◇大本営発表（十八時二十分）

一、有力なる敵機動部隊は、我近海に現出し其の艦載機を以て本二月十六日七時頃より十六時過迄の間、主として関東地方及び静岡県下の我飛行場に対し波状攻撃を実施せり。

我制空部隊は之を各地に邀撃し、相当の戦果を収めたり。

二、戦艦及航空母艦を含む三十数隻よりなる敵艦隊は本二月十六日早朝より硫黄島に対し艦砲射撃を実施中なり。（延千機以上の来襲）

◇

洋子、当直。

親子三人、茶の間に寝る。

幸ひ夜は敵機来襲なし。

然し、夜をこめて神経衰弱第三期の夢をみつゞける。例へば今は遠き竹馬の友—白石兼雄と旅をしてゐる夢など…。

さうかと思ふと年甲斐もなき若々しき夢など…。

○2月17日（土） 快晴

大本営発表

◇十五時三十分

一、敵艦載機は本二月十七日七時頃より昨十六日に引続き関東地方及静岡県下来襲せり。

二、本土来襲の敵機動部隊に対する昨十六日の

邀撃戦果中現在迄に確認せるもの次の如し。

飛行機 撃墜 百十七機

損害を与へたるもの五十機以上

艦船 大破炎上 大型艦一隻

我方自爆未帰還 六十一機

地上に於ける損害は僅少なり。

◇十八時三十分

一、敵は本二月十七日十時頃熾烈なる砲撃掩護の下に硫黄島に対し上陸を企図せるも我守備部隊は直ちに之を撃退せり。

二、昨二月十六日来我航空部隊及守備●部隊の同島周辺敵艦船に対し収めたる戦果中現在迄に確認せるもの次の如し。

轟沈 戦艦一隻

撃沈 巡洋艦二隻

艦種不詳 二隻

撃破 上陸用輸送船三隻

飛行機撃墜 十機

~~~~~

昨日にひきつゞき今日も朝七時から敵艦載機ひっきりなしに来襲…。

その合間を縫って「満洲事変前後」を読み、また庭に焚火をして消炭をつくる。

夜は夜で前後三回にわたり B29 の来襲だ。

いよいよ文字どほり本土も戦場となったのである。

## 2月18日（日） 晴

敵機動部隊も一応退散したらしく今朝は嵐のあとの静けさである。

うらゝかなる庭に焚火をして消炭を作りつゝ湯をわかし、ヒゲを剃って机に向ふ。但、午前中は四種の新聞を読むことに費してしまふ。

朝の郵便—ボース氏の遺子正秀君よりの礼状、白濱嬢の伯母さんの死を知らせる葉書、丸山義二君の脚本を送ったことに対する礼状など。

午後、昨日にひきつゞき鈴木安蔵氏の「満州事変前後」を読む。

夜、山田、天野二青年来る。預ってゐた脚本につき批判をして帰す。

山田君より餅をもらふ。

### ○2月19日(月) 晴

ここの所毎朝の日課の如くなってゐる焚火—消炭つくり—ヒゲ剃りをすまして机につく。四種の新聞で僅か八ページではあるが、こゝのところ読むべき記事多く、相当に時間がかかる。

登美子を安田銀行にやり六百円引出す。つひにこれにも手をつけねばならなくなった。この情勢下の経済生活を思ふと、それが空襲などよりは遥かに不安を感じる。

だが、近く肚を極めよう。

昼食後、家を出る。文報の幹事会である。が、それが二時からといふことになったので、白濱君のところにお悔みに行く。

丁度その伯父さんなる白濱中佐も来合せ、大型の編隊来襲の報ありとのことに、急ぎ帰途につく。古川橋で警報を聞く。都電二本榎停留場近くで待避の信号あり。路傍の待避壕に入る。

頭上をB29十機編隊が悠々通過する。が、そのうち一機は見る見る撃墜さる。

再び都電に乗り五反田で下車。そこで二回にわたり待避し、歩いて帰る。

空襲の不安もさることながら、敵愾心で胸をかきむしられるばかりの思ひがする。

◇

各新聞に米国の日本処理案なるもの発表さる。これを見て一億同胞ことごとくが、肚 (肚か?) を決したことであらう。

### 2月20日(火) 晴 風あり

朝食最中に警戒警報発令さる。今日あたり敵艦載機の来襲が予想されていたので、さてこそと緊張したが、間もなく解除となる。

朝の焚火例の如く、そのあと終日読書。「満州事変前後」を読み了り、清沢氏の「日本外交史」を下巻から読みはじめる。

◇

午後三時、米軍つひに硫黄島上陸開始(十九日朝より)の大本営発表あり。

あゝ、つひに硫黄島も…。

不安を感じる。

終局の勝利は絶対に信ずるものの、それは百年の苦難を越えて後のこととなるのではないか。だが、国民の一人としての為すべき仕事に今は唯々精進しよう。

◇

私も一産業戦士とならうか?

なまじひの文化事業などに参与するよりも、それが刻下の祖国に忠なる所以でもあるし、且つ、それが将来の文化のためにも有意義であるかも知れない。

◇

午後三時、米軍硫黄島上陸開始の発表とともに昨日のB29邀撃戦果(撃墜二十一機)の発表もあった。

◇

洋子、当直。

### 2月21日(水) 晴

終日「日本外交史」下巻(清沢)を読む。

午後二時頃、警戒警報発令。B29 数機の由。  
思ひがけなく、もと移動演劇連盟にゐた江口裕子君来訪。

戦時下のインテリ女性の不安を語る。

これに対して与へた激励の言葉は、むしろ自分自身への自戒となり、この一兩日來の不安憂愁の気いくらか薄らぐ。

同君四時過ぎ帰る。「標木」と「芙蓉」を貸しミカン四個を与ふ。

明日は在郷軍人会の査閲なので早々に床につく。が、例の如く眠れず今夜も亦、床の中で握飯を頬張る。

---

マニラの戦況や、活況を呈せるものの如し。

## 2月22日(木) 雪

在郷軍人会の査閲は雪のため延期の由。樋口さんが知らせに来てくれる。

雪ひゝとして降る。手製の消炭●●もはや残り少く、オーバーをかぶって「日本外交史」を読みつゞける。

午前十一時半、昼食を終る。丁度その時、警報出づ。問もなく解除。

自製の消炭も午後にはもはやなくなったので、古材木を切って火鉢に焚く。…もはや東京の生活も田舎のそれと変わらない。

夕食前、待避壕の蓋の雪かきをやる。近年まれな大雪である。ところによっては積雪尺余りに及ぶかもしれない。

◇

## ○2月23日(金) 晴

昨日ひねもす降った雪が積り積って場所によっては二尺に近いところもある。自分等にとっては経験したことのない大雪だ。

防空壕の周囲の雪かきをやる。

眼が又少し悪く、そのためか気分はよくないが、しかし雪は何かしらよいことの前兆のやうな気がして晴々しい気持だ。

「日本外交史」下巻を読み了へ午後は庭の柵を抜いて薪とし消炭をつくる。…三日分ぐらゐはありさうだ。

昨日から新聞が配達されないので物足りないことおびたゞしい。但、京子が気をきかして帰途に東京新聞を買って来たので、それを読む。

昨日雪のため学校に泊った洋子も帰って来る。数日ぶりに安眠する。

## 2月24日(土) 晴

又々旧友一杉原、石橋猪之吉等の夢をみる。

然し数日ぶりに安眠してゐるところを四時頃、警戒警報で起される。身支度をして床の中で待機してゐるうちに解除となる。

七時十五分前に家を出て延山国民学校に出かける。在郷軍人会の査閲である。ところが、会場に行ってきたと、最初の予定どおり二十二日に行はれたさうで、空しく帰る。

三河屋(班長)に右の旨伝へる。

三日ぶりに配達された新聞を読む。

自分もこのまゝではいけない。もはや腰をあげなくてはならぬ。

夜、B29の奴、三度もやって来る。

## 2月25日(日) 雪

朝、七時すぎ警戒警報。やがて空襲警報となる。艦載機である。敵機動部隊が又も近海に近づいたのである。

京子は既に登校後、洋子は空襲警報が一旦解除となつてから出勤する。反対に京子は正午少し前に帰って来る。



去る二十二日の雪は四十年振りの大雪ださうだが、今日も又々降り出し、どんどん積ってゆく。このふんぷん●たる雪の中に再び空襲警報発令さる。今度は小型編隊の外に B29 の大編隊で、数回にわたり防空壕に待避する。寒くて困る。

夕刻（四時前後）解除。

七時の報道を聞いて床に入る。

が、夜中まで間に三度 B29 の来襲で目をさまされる。

一補遺欄につゞく。

（以下、補遺欄）

二月二十五日

夜九時の報道で今日の空襲により宮内省や大宮御所の一部に被害がありたるを知り、心の底から憤りをおぼえる。

◇

だが、それにしても私のこの頃の生活の何と信念のなきことよ。

近くこの泥沼より立ちあがるつもりではあるが、省みて止めどもなき良心の苛責をおぼえる。重大戦局下に作家として安住することが出来なければ、進んで一工員となるべきだ。それを知りつゝ、実行をしる自分自身を深く叱りつゝ、焚火をしては時を空費する愚者か、私は…。

## ○2月26日（月） 晴

積った、積った。大変な大雪だ！

去る二十二日も四十年ぶりの大雪ださうだが、今度はそれ以上の大雪だ。膝●●まで雪に埋りながら防空壕や通路の雪かきをやる。

隣組員を大声で動員して（正彦ちゃんが病気で入院中）田中さんの前の雪かきもやる。

この大雪を眺めながら去る年の二・二六事件のことなどを思ひ出しつつ、何かよいことあれかしと祈る。

夜、三回にわたり敵機の来襲あり。

◇

平戸よりすゝめ送り来る。

江口裕子君より来信。

## 2月27日（火） 晴

午前中、警戒警報出づ。

午後、所在なく身をもてあまし、裏の垣根の材木を抜とり、それで薪をつくる。

夜は煙草も尽き果て早々に床に入る。

翌日、焚火をする薪があるといふだけの喜びを明日の楽しみとし生甲斐として生きる自分のこの頃の生活…。

われながら情けなく、あさましき限りである。

然し、この醜悪にして愚劣きはまる生活もこゝらが峠であ●らう。

俗語にいふ、身を棄ててこそ浮かぶ瀬もあれ…。

真実に私も死を覚悟して立たう。

## ○2月28日（水） 晴

昨夜来煙草なく朝も何時までも床の中に苦しみつゞける。

自分自身に対する嫌悪の情とともに妻に対しても娘等に対しても今は何の期待も持てないのがある。

庭に焚火をして炭をつくり、そこで●沸かした湯でヒゲを剃る。

弁当持参で被害地視察に出かけるつもりだったが、●登美子が高田さんの家に留守番を頼まれて、おそくなったので、それは又のことにし、少し早めに昼食をすまして、家を出る。

五反田から都電にしたが、乗換毎にイヤといふほど待たされる。

乗物も一この決戦下ゆえ仕方のないことではあるが一実に不便になった。

白濱さんを訪ふ。先日話の途中で帰ったので、その用件をすますためである。丁度前に手紙をもらって一度逢はうと思ってゐた吉田康子といふ人も来合せてゐて、一通り意見を述べ、すぐ文報に行く。途中、久保田万太郎氏と一緒にになり、先日の敵機の都市爆撃の折の体験談を聞く。劇文学部幹事会は来る三月十二日に開く総会についての下相談である。超重大戦局下劇団人は如何に生くべきかについて討議することを総会の中心協議事項にすることに決定。

あと雑談に入り、久保田氏など戦局につき、ひどく悲観的な意見を述べる。

なほ、自分は北條君から朝鮮行を●求められる応諾する。朝鮮における演劇コンクールの審査員として出かけるわけである。戦局と照し合せて多少の不安がないでもないが、家にゐて悶々としてゐても仕方がないので、行くことにする。

早く帰りたいと思ふが、幹事一同、妙にひとなつっこくなりあってなかなか腰をあげない。六時頃やっと散会。久保田さんや水木さんと一緒に帰る。

今日はタバコで苦しんだが、この幹事会で、水木さんや映画の池田忠雄氏から数本ずつ恵まれて大いに助かった。

帰りの電車の中で、燃料不足の話から水木さんところから練炭を分けてもらふ相談がまとまる。家に帰ると、珍しく●酒の配給があり、さっそく一本飲む。酔はよく回ったにも拘はらず、酔心地わるく、つひにバカな真似までやったが、明方の四時近くまで眠れなかった。

あゝ、無為にして過した一ヶ月…。

### 三月諸事要録

記載なし

### 3月1日（木） 曇

今月からつひに三月だ。

十一月の末頃から私は仕事らしい仕事は何ひとつしないで早くも三ヶ月を無為のうちに過したのである。そのうち一ヶ月近くは登美子が産褥にあったため仕方ないとしても、あとは新聞を読み焚火をただけの生活であった。文筆を業とするに至って以来このやうなことは始めてである。心が傷む。

それに今日は三月といふのに空まで雪でも吹り出しさうな曇り方である。且つ又、新聞は硫黄島の戦局重大化を伝えてゐる。まことに心が傷む。

然し、万一の場合の覚悟は既に出てゐる。近く朝鮮行が実現するとすれば必ずそれをキッカケとして私も立ちあがらう。

戦ふ前の小休止として、神よ、この怠惰をゆるしたまへ。

一補遺欄につゞく。

（以下、補遺欄）

三月一日

午後一時、昨日の約束にもとづき、水木洋子女史を訪ふ。棒炭をもらふためである。お礼といふわけではないが平戸のスルメ三枚おみやげに持参する。北千束駅からすぐのところ、そこら一帯が気持のよいお屋敷町である。水木氏の家もなかなか立派だが、日あたりのよい二階の書斎は特に気持がよい。この頃、自分の住居について色々と考えてゐるので、殊更にさう思ったのかも知れない。

談は劇談文学談に花が咲き、つひ時を忘れて夕刻に及び、帰宅した時は既に六時であった。

洋子が待つてゐたが当直で出かけるといふので、万一の場合の話を家人一同にするつもりの予定を明後日に延ばして、昨日二本配給になつ

たビールの残り一本を飲み、すぐ休む。

◇

文報から企画委員を委嘱する速達が石川達三君の手書を添へて来てゐる。色々と方途に悩んでゐる時だけに、この委嘱には明るい気持ちになる。

◇

今月は登美子の努力やら吉田姉弟の好意で何時もより多くの煙草を入手してゐたにも拘はらず早くも喫ひつくし困りかけてゐたが、更に登美子が津倉さんから一箱もらひうけて来たり。今日水木さんから二十本入りのホーヨクをもらつたりしたので、何とか明後日の配給まで間に合ひさうである。

●戦局超重大化下の色々の窮乏生活中、このタバコ不足の痛手が最も大きい。燃料の方も大変だが、これは●●手製の消炭やら知人の好意やら家人の努力によって今日までは何とか切抜けて来たし、やがて春も来るであらう。

### ○3月2日(金) 雨

昨夜夕食にビールを飲み、すぐ眠つたために十一時には目がさめ、朝方ちょっとウトウトしたまゝで起きる。

つひに雨が降り出す。焚火を止してすぐに新聞を読み、栃木県に疎開した上沢氏の葉書に返事を書き、又、文報に企画委員就任承諾の返事などを書き、ユーゴーの「一七九三年」を読む。石川達三君(文報)より速達。六日の会合の時間変更通知。

◇

その日暮し…<sup>せつな</sup>刹那主義。ともに自戒しなくてはならぬ。今日も亦その捕虜となった。

企画委員就任と朝鮮行とにひそかに<sup>ママ</sup>機待をかける。立ちあがる心の準備だけは既に出てゐるのだから…。

◇

夜、当分飾らないつもりで玄関の押入の天井にしまつておいたひな人形を京子の希望により取出して一部分●を飾らせる。女学生々活といへば京子のサイン帖に級友等が書いてゐるサインの辞はなかなか面白い。そして流石に時局の影響を思はせるものがある。若い人々は戦争下にも決して希望を失つてはゐないのだ。当然のこととはいへ、心づよいことに思ふ。

### 3月3日(土) 晴

早朝には雨が降つてゐたやうだが、起きた頃に止んでゐる。庭に焚火をして例のごとく炭を作り、湯をわかつてヒゲを剃り、机につく。新聞に目を通す。

午後は思ひがけなく暖い天気となる。

夜、京子にとっては女学生々活に於ける最後の雛祭ゆえ、ありあはせの材料でゴモクメシなど炊かせ配給の生ブドウ酒で乾杯する。そのあと夜のお茶の時間に万一の場合の覚悟につき訓へおく。…平時ならば、およそ雛の節句の夜にふさはしくない話である。

◇

文報より速達。一工場班についての集会通知。

### 3月4日(日) 雪

京子既に登校後一八時前後警戒警報発令され、間もなく空襲警報も出づ。B 29の相当の有力編隊らしい。が、一段落ついたところで洋子も出勤する。

自分は待避信号のとき以外は、机について本を読む。

北尾虎男氏より詳しい手紙が来る。一吉田幹夫君の件に関する懇切なる返事である。壕の中で読む。

九時半すぎ空襲警報解除。

午後は再び庭に焚火をし、消炭をこさへた後、コタツで登美子ととりとめもないことを語る。文報の規格委員を委嘱され以来、心いくら明るくなる。今更委員になることを喜ぶわけはないが、こゝに血路を開く緒をつかめさうに思へるからである。

夜、洋子帰らず。この子の心理状態については、近来とみに不安をおぼゆ。

—補遺欄につゞく。

(以下、補遺欄)

三月四日

今年は一体どうしたといふのであらう。数十年ぶりの大雪が既に二度も降ったのに又々今日も午後から雪となる。敵機はこの天候に乗じて来たに違ひないのだ。

### ○3月5日(月) 曇

寝がての酒もこの頃では用ひないのでずっと眠れない。十二時前後まではどうしても眠れない。今夜もそのとほりで十二時すぎ漸く睡気を催しかけてゐると警戒警報だ。おまけにB 29 一機づつが九回乃至十回にわたって波状でやって来る。近くに投弾の音も聞こえる。

二時頃やっと解除になり、登美子は一昼間はガスの出が悪く殆んど用をなさないの、そのまゝ朝の御飯に火をつける。

と、又々警戒警報だ。今度は間もなく解除となったが、とたんに地震…。

地震に雪に空襲…。日本国民も全く大きな試練の中に立たされてゐる。

かくて朝寝。九時半にやっと朝食をとる。

今朝また新聞の配達なく憤慨堪えぬ。

京子を新聞とりにやったが、共販所では既に組の人にわたしたとて空手で帰って来る。一後に

なり、都倉さんの家より配達される。

「陳夫人」を読む。

新聞の報道によれば、硫黄島の戦局もいよいよ重大化し、本土の戦場化ももはや必至と見なくてはならぬ情勢である。

が、覚悟は出来てゐるつもりだ。

平戸の姉さんより見事な干大根が送って来たが、その中に●●十箱のタバコとカキ餅まで入ってゐるのに、つひ涙ぐむ。

洋子、暗くなって帰る。

(以下、1943年3月6日の空欄部分に続き。しかし打ち消されている。判読可能な部分は以下の通り。)

(昭和二十年三月五日)

四人そろってゐるので今夜も万一の場

### 3月6日(火) 雨 後晴

雨の中に一旦、軒下で昨夜洋子がもって来た薪や垣根から引抜いた竹で湯をわかし炭をつくりヒゲを剃る。

弁当持参で文報の企画会議に出かける。今度新に企画委員を委嘱され、その第一回の会合である。動員部長の石川達三君と話をしてゐるところに警戒警報出づ。が、情報によるとB29二機の由で、たいしたこともなさうなので、石川君と昼食を共にし会議に出る。

協議事項は文化動員に関してであるが、文報(石川)の原案は矛盾に充ちて自分はその出発点そのものに異論をもつ。

然し、こゝで話をこはしてはならないので、一応意見を述べた後、賛成する。

散会后、その後の銀座を見るべく一人出かける。被害地の跡は、そのまゝ、手がつけられず、先日来の雪も今朝の雨で解けて水だまりとなつてゐる。わびしい風景である。私が文壇に出た頃の

銀座を追憶すると全く夢のやうだ。

三昧堂にも銀座書店にも寄ってみたが、見るべき本も殆んどない。

すぐ帰りの電車に乗る。

夜、四人揃ってゐるので又々万一の場合の覚悟につき語る。但、今夜は茶話的に…。

### 3月7日(水) 曇

皇国にとって試練の年とでもいふのか、今年は天候まで以上で、今日も亦どんよりと曇った雪もよひの空である。

例のごとく庭に焚火をして湯をわかし炭をつくり、ゆっくり目を洗って机につく。念入りに新聞を読み、時局と作家の在り方につき今日も考へる。

珍しく藤浦忱より葉書来る。彼も淋しく不安なのであらう。

疎開する気はないのかと彼の問に対して、疎開すべき故郷もないし、新しい故郷を選ぶには一そこを墳墓の地としたいからして一準備(金)が足りぬ。東京を守り、東京で死ぬべきならば東京で死ぬ覚悟だと答へてやる。そして地区別の文人による協力工場設立の件につき、まづ同志を得べく菊田一夫に長い手紙を書きかけてみると、やがて昼食の時間となる。この頃とみに繁くなった〇〇談を試みてゐるところに警戒警報発令…。但、敵機はB29一機の由。

登美子が防空壕の手入れをやっているので暫く手伝ふ。当の登美子は隣家(樋口氏)における久しぶりの隣組常会に出席。第五代目の組長に田中さんを推す件についての常会である。

菊田君への手紙は出すべきかどうかにつきもう一度よく考へてみることにするため完成を明日に延ばし「陳夫人」を読む。読んでゐるうちに自分も久しぶりに書きたくなる。

銭湯に行く。ぬるま湯の如き湯で味気ない次第だ。

### 3月8日(木) 晴

久しぶりの快晴で心も幾らか明るい。

庭に焚火。炭をつくり湯をわかしヒゲを剃ること例のごとし。

新聞に目を通す。昨日は「毎日」が久しぶりに必勝の信念に満ちた記事を書いてゐたが、今日は「朝日」の記事に見るべきものがある。この頃の新聞の報道態度には憂慮すべきものがあつたが、多少反省して来たのであらう。

警戒警報発令。B29三機それぞれ単機で来襲。が、大したことなく間もなく解除となる。

久しぶりに縁側で登美子と昼食。

江口裕子君、お酒二合ばかり持って来訪。大いによろこぶ。同人の就職の件につき二三のことを質し、同道で家を出る。五反田で別れて文報に行く。劇文学部の小委員会と文化動員工場鉦山班の準備委員会と両方に顔を出す。

まづ前者は北條、安藤、羽田、水木京太の諸君に挨拶しただけで、後者に出席。

こゝでは委員の多くが既に工場に挺身してゐる人々ばかりで、いまだに書齋にゐる自分は何となく後ろめたさや焦燥を感じる。一金親清、井上友一郎、北林透馬、稲垣足穂その他の諸君がそれである。

夜、江口君のお酒を飲んで眠る。

### 3月9日(金) 晴

焚火、湯わかし、炭づくり、新聞読書…例によって例のごとき一日を送る。変つたことといへば午後しばらく防空壕の手入れ…階段づくりをした位のこと。

但「陳夫人」を読んでゐるうちに自分も将来小説にするつもりでゐる“黒龍江”(原作=戯曲)



のことなど●●●（書ひて）思って、久しぶりに胸のときめくをおぼえる。

銃をとるべき時が来れば勿論勇躍として立つ。徴用が来ればこれも喜んで応ずる。が、その日まで悠々と文学を守る。一さうすることはいけないことであらうか？

今の私はそのことについて信念をもてないでゐる。よし信念がもてたとしても生活の問題を今度は考へなければなるまいが…。

とにかく苦しい。

今どき苦しいといふこと自体が戦争傍観者であることを自ら告白してゐるのかも知れないが…。

### ○3月10日（土） 晴 風あり

0時すぎ明快警報発令。間もなく空襲警報となる。B29 小<sup>マ</sup>数<sup>マ</sup>編隊の波状攻撃だ。しかも未だ嘗てない低空で侵入して来る。帝都の北の方は敵機の焼夷弾によるものか炎々と天を焦すばかりで来る機も来る機もそれ为目标として投弾してゐる模様だ。わが高射砲による邀撃も熾烈を極めてゐる。

登美子と洋子は最初の待避信号とともに壕に入ったまゝだが、自分と京子は空を睨んで看視をつづける。が、時々驚くべき大きな図体を見せて頭上を通過するので、その都度待避しなければならない。

二時四十分やっと空襲警報解除となり、やがて三時二十分頃には猶敵一機を京浜上空に残したまゝ、警戒警報も解除となる。登美子はそのまゝ、朝の御飯に火をつけ、自分は残り

補遺欄につづく

（以下、補遺欄）

三月十日

冷飯を食べて、すぐ寝につく。

七時少し前に起きる。

午前中にも一回警報が出る。

正午の報道で仏印の裏切と B29 来襲についての発表がある。それによると、B29 は百三十機も来たさうで、又もや宮内省（主馬寮）にも投弾したる由。邀撃戦果は正午までに判明せるもののみにては撃墜十五機。損害を与へたるもの約五十機…。

（今日も亦、新聞が来ぬ。困ったものだ。）

夕食中、洋子より電話。それによると、●空襲被害者を学校に収容することになり、そのため帰りも遅れるといふ。実際には、この夜は被害者いまだ到着せずとて八時過ぎには帰ったが、大森に割当てられた被害者だけでも七万人に上るといふ。

北の方の●火焰は夜までつづいて見える。

◇

利那主義、現実主義を理念の上では極力排斥してゐる自分が、ともすればその傾向をたどつてゐる。信念と自制心の不足に基くと見るほかない。もっと魂を高めなくてはならぬ。

### 3月11日（日） 晴 なほ風あり。

午前中、敵 B 29 一機来襲。いつもより低空なので銀色の機体のはっきり大きく見える。あたかも我が家の庭を漫步するがごとき敵機の悠々としたる姿に憎悪の念を燃しつゝ、非常持出し品の荷づくりをする。

昼食は洋子も加へて三人（京子は登校）。暖い縁側でとる。

午後にも警戒警報発令され、やがて空襲警報となったが、敵機は本土に侵入せず、間もなく解除となる。

庭に焚火をし、炭をつくり湯をわかしてやつの茶を飲む。

銭湯に行く。街のおっさん達の戦局談をひそか



に聞きつゝ日本はこれだから負けぬと、しみじみ考へる。

久しぶりに四人そろって夕食をとる。

現在の眼鏡、そして現在の電灯では夜は新聞は読めない。

●鮮明な活字で、ばらッと組んだ本を選んで読むほかはないが、それすら思ふやうでないので、夜は殆んど読書もしないことにしてゐる。

が、今夜から駒井徳三氏の「大満洲国建設録」を読みはじめる。数年前、三十銭か四十銭で古本屋から買って来たこの本も今では一つの歴史的資料となりさうである。

夜、敵機来たらず。

### 3月12日(月) 晴

新聞が来ないので、焚火、ヒゲそりの後、すぐ手紙を書く。江口裕子君の件につき、山田肇君と南江治郎君に、先日の干大根のお礼状として雪浦の叔母へ…。前二者は速達で、後者には十円の小為替を入れて、午後、登美子に出させる。この頃案じてゐた学童疎開先の兄がひよつこり尋ねて来る。が、二十日前後にはもう一度出かける由。久しぶりに陽うらゝ、かなる縁側で昼食を共にする。米が足りないので、メリケン粉でこさへた代用食を併用する。

兄の辞去後、登美子を助手にして庭の一隅にあなぐらを掘る。往年の簡易生活の夢が今や必要に迫られて実現を見ようとするわけである。

土掘りの最中に吉田幹夫君来る。同君は少年農兵の指導者として内原の訓練所に行つてゐたのださうだが、この人の話によって青木憲一君の留守宅一家三人が、十日未明の空襲に家を焼かれ消息不明の事実を知る。昨夕銭湯で深川全域の話聞き心配してゐた矢先だけに少からず胸を傷める。空襲の災禍もいよいよ身近になった

感が深い。

学校から帰つて来た京子にも手つだはせてあなぐら●●●(の仕事)掘りをつづけ、いつもより遅く夕飯をとり、そのあと非常事態の覚悟につき四人で語る。

九時頃、警戒警報。(B29一)

### 3月13日(火) 晴

新聞配達されず。今日は登美子が隣組の分をとりに行く。それを読み、日記をつけた後、午前中からあなぐら作りにかゝる。

この前、家具や書籍の整理をした折に作った棚板や、この家に越して来た当時茶の間に吊らせた戸棚をこわして、あなぐらの天井や壁にする。旗ヶ岡時代の流し台も、幡ヶ谷時代山口茂年君がこさへてくれた下駄箱もつひにあなぐらの資材となる。いよいよ簡易生活の実現だ。

夕刻までに八分どほり完成する。自分で湯をわかし汗を拭いて夕食。

洋子の話によれば、九日夜から十日未明にかけての空襲被害者は百万人に達するとのこと。

今日は一度も警報出でず。

### 3月14日(水) 曇

新聞にざっと目を通した後、直ちに土窖(あなぐら)の完成と庭の整理にかゝる。三日にわたる筋肉労働で、朝のうちはロクマクの時かのやうな体具合だったが、働いてゐるうちにどうやらその気分もおしのけてしまった。

午後三時ひととほり仕事を終り、銭湯に行く。

◇

新聞の発表によれば、いよいよ次回の配給の次よりタバコも一日●三本になる由。これは空襲よりも恐ろしい。日に三本で苦しむよりは、むしろ、禁煙の修●●(行を)行をするがよいか

も知れない。

### 3月15日（木）曇

●●●●●（昨日、●が完成した）

洋子、上野駅に出勤。去る十日の空襲被害者に●●●（のため）湯茶接待のためである。一出かける前に警報発令され、敵機動部隊近海に出勤の情報あり。気になったが幸ひたいしたこともなさうである。

昨日完成したあなぐらに入れるべき荷物の整理にかゝる。

まづ書類—証書、免許状、契約書等の整理。尋常一年生以来の通信簿も、そのかみの綴方集も、更に又、登美子との●●（交換）恋文も悉く焼捨てる。

過去への感傷よりも来るべき将来への再スタートを心に期しつゝ…。

今日は右の仕事に終日を費す。

夜、洋子帰宅して上野駅の雑踏や惨状を伝える。疎開の件につき思ひ悩み、力なく疲れて眠る。

### 3月16日（金）曇

機能にひきつゞきあなぐらに入れるべき書類や日常品の整理にかゝる。

—但、●新聞に強制疎開の件につき発表あり、心いさゝか暗し。

午後、去る十日の空襲に留守宅の三人（母、妻、妹）を失った青木君、その義兄（夫人の兄）とともに来る。思ひがけないことであった。とみには言葉もなかったが、極力慰め励ます。—義兄はラバウルより帰還したばかりの傷痕軍人である。

青木等辞去後、久しぶりに床屋に行き、風呂に行き、さっぱりした気持になる。

### 3月17日（土）晴

午前九時すぎ新橋の袂に行く。程なく吉田幹夫君来り、待つことしばし青木君来る。—青木君の留守宅の被害跡を弔問しようといふのである。日本映画社に挨拶と報告に寄る青木君を待って、築地から都電に乗る。水天宮前までしか行かず、そこから降りて歩く。そこらからもう●●（一望）見わたす限りの焼野原である。私にとっては思ひ出の深い明治座も、つひに角力の見物としては一度も覗かなかった国技館も、形骸だけを残して●中味は焼かれてゐるのである。

焼跡の瓦やトタン板に炭やチョークで生き残った人々が書きしるした伝言の文字…その前に焼残った人形の飾られてゐるのなど痛ましく目●をつく。

深川なる森下町の焼跡に立てば丁度そこに青木君等の●隣組の組長—足立氏がゐて、自分自身も妻子を失って自分だけ生き残って跡始末をしてゐるとて、当時の惨状を説明してくれる。

青木宅の跡に持参の線香を立てて、●●亡き人々の冥福を祈る。

いつまでも去りがたき思ひの青木君を促し励まし、足立氏にヒカル（煙草）二本を呈して焼跡を去る。

築地にて青木、吉田の両君と別れて家に帰れば、家には又思ひがけない事実が待ってゐた。—こゝらの住宅一帯、即ち電車線路に添ふ二十五米内の家は凡て強制疎開に決定したといふのである。

庭に焚火をしつゝ、今後の方途を考へる。自分には、けっきょく三つの道が残されてゐることを知る。

—補遺欄につゞく

（以下、補遺欄）

三月十七日

即ち、

1. 都内に然るべき転居先を求めて、あくまで東京に踏みとまり、文●筆をもって戦ふべきか。
2. 一時近県に疎開して、研究と創作に没頭し、東京に復活する日を期すべきか。

3. 心機を一転せしめて、平戸か熊本に帰り、晴耕雨読の生活に入るか、あるひは地方文化のために働きつゝ、そこで一生を終るべきか。

その三つの道の何れもが今の私には容易ならぬことで、流石に思ひ悩み迷ひつゝけるばかりである。

一往兄に疎開先の実情を聞くべく京子を伴ひ高輪なる兄の隅居を訪ふ。不在。高輪台校に行き、兄に逢ひ同道で隅居に行く。夕食の御馳走になる。而して兄は一も二もなく疎開（第二案）をすゝめる。

家に帰って、家族三人に自分の意見を示し一同にも各々考へおくことを命ずる。

思ひ疲れ戦ひ疲れたかの如く枕につくより眠る。

### 3月18日（日） 晴

兄の疎開先に預ける衣料入りの柳行李を洋子に届けさせるべく、五反田まで持って行く。●帰って荷物の整理をしようと思ふが、去脱せる人のごとく仕事も手につかぬ。

わが半生の努力の跡を語る記録などを燃しては湯をわかつて時間をつぶす。

昨日は四月五日までに立退けばよいといふやうな話であったが、都倉さんが区役所に行って問合せたところによると、沿線二十五メートルではなく沿線五十メートルで、しかも二十五日までに立退かなければならぬとのこと。

いよいよ処置に窮し、とりあへず若干の書物を預くべく、永井君の家に行く。同君夫婦は快く

申出を承諾してはくれたが、同家自体が、あるひは強制疎開を命ぜられるやも知れぬ状態にあるといふ。…

帰途、千北研一君の留守宅を訪ふ。ベルを押せども鳴らず。案内を乞へど応へなく、空しく帰る。また焚火をなす。

◇

永井君訪問の行き帰りに、蜿蜒と国道につゞく手車・馬車、リヤカー、荷車その他、移転の荷物を運ぶ群衆を見て、寝具と食器を携へて―国にも人にもすがらず、みづからの生命力だけをたよりに一大陸を移動する支那の民の姿を思ひ浮べた。

これを末世的現象を見て、嘆息するか。新しい創造生活へのスタートだとなして、そこに光明を感じるか否かは、その人その人の生活力の強弱によって決定する。もとより自分はその後者であることを祈り、且つ努めんとするものである。

### 3月19日（月） 晴

(1944年3月19日の空欄に書かれた以下の記事を冒頭に挿入するよう指示されている)

早朝、青木君来る。流石に悲しみに沈める同君を心から●●慰め励まし、自分の方の強制疎開のことなど語る。

登美子を京子をつれて海軍技術研究所に岡本大佐を訪れる。青木君辞去後、疎開の件につき思ひ悩みつゝ、のろのろと書籍の整理をなす。

数千冊に上る書籍の始末には全く途方にくれる。手放したが最後、当分あるひは永久に手に入れがたいだらうことを思へば、なかなか決心がつき兼ねる。

午後一時、文報劇文学部総会。途中、水木洋子女史と一緒に疎開のこと、書物の整理難につきともども嘆息する。

総会では目下の情勢下に劇壇人は何をなすべきかにつき各人かなり元気のよい意見を述べる。一其にも拘はらず誰の顔にも不安の色が深い。会員中、強制疎開の憂目にあるもの自分の外にも数人。佐々木孝丸氏に書籍を預けることを頼み、水木氏と同道で帰る。

この間に大体塩原（栃木）に疎開する肚を極め、その旨を家族三人に伝える。

吉田幹夫君来る。不用の書物中、希望のものを選ばせて進呈する。同家でも女三人福島県下に疎開することになり、留守宅が空家になるので、行先にお困りのやうだったら自由に使ふやうにとの申出あり。

◇

この日も昨日にひきつゞき敵艦載機の九州四国方面への来襲あり。且つB 29 百三十機名古屋地区に来襲。…戦局いよいよ緊迫せるを感じしめる。

### ○3月20日（火） 晴

昨夜は思ひ疲れて早く眠ったが、夜中の二時に目ざめ底知れぬ哀愁をおぼえる。平戸を去る日にも●佐世保を去る日にも感じなかった深い哀愁である。

が、明方に再び眠って目ざめると漸く新しい生活への希望と光明をとり戻し、書籍の整理などする。かくするうち、町会より役員来り、正式に強制疎開の命を伝える。四月四日までに立退けとのこと。

一行中の小原晃氏に書籍の一部分と本箱を預ってもらふ約束が出来、更に気持が軽くなり、防空部長の服部保君のところにも●●、釘をもらひに行く。街の人々と同じ憂目の戦友愛からか親しげに話しかけたりする。日頃それほど親しくしてもゐない下の渡辺君なども物置の屋根をこ

わしながら話しかける。それでこちらもオヤツのするめ垣根越しに呈したりする。

古本屋に行く。博洋堂は自分自身が疎開のために不買、●（東）深沢書店（東洗足駅前）は今では家中に本が溢れてゐるので、買取りがずっと遅れるといふ。定価の倍でも欲しいなどと言つてゐた古本屋が一旦強制疎開となればこの始末である。旗ヶ岡の古本屋に売る約束をする。

その本屋の帰りに、旗ヶ岡の小間物屋でポマード代用のローションとインクを買ふ約束をする。山に入ってインクの粉をとかしつゝ、ものを書く生活も亦面白いかも知れぬ。戦ひ且つ書かうといふ気持やうやく募り来るをおぼえる。

一この間、二回警戒警報出づ。

夕、久しぶりに銭湯に行く。

夜も洋子に人に預ける分の図書目録をつくらせる。

### 3月21日（水） 晴

強制疎開に絡まる憂鬱は超克した。あとは運送その他の煩はしさだけである。が、それは事務だ。事務は簡潔敏速に処理さればよい。

まづ、洋子京子とともに洋子の友人である田淵さんのところに預ける書籍（維新史、国史辞典、大人名辞書）を運び、田淵氏夫人に挨拶をする。つぎに出入りのボロ屋にリヤカーを挽かせて小原氏の家の本箱を運ぶ。それに入れる本は洋子とその同僚なる神戸、田中両嬢をも加へて娘四人に運ばせる。

折よく千秋実君も弁当持参で加勢に来てくれる。で、昼食を共にした後、まづ荷物を作ってもらふことにし、夕方までに頗る頑丈なる荷箱二個完成。これでまづ荷物整理の目安がついた気がする。辞退する千秋君に夕食をすゝめて帰らせる。

夜まだ地方疎開の件につき、家族四人で話し合

ふ。洋子の富山県疎開が実現しない場合は退職させることに肚を極め、一家栃木県へ疎開する方針に大体肚がきまる。

◇

この日、正午の放送で硫黄島における皇軍の壮烈なる全員総攻撃に関する発表あり。聞くもの齊しく悲憤に声を吞む。

◇

昨日は千葉県へ疎開して

(以下、補遺欄に続く)

三月二十一日

新生活を営むのだと強がってゐた下の渡辺君、今日は妻君とともに物置の取壊しや整理をしながら、ひどくふさぎこんでゐる。そして人なつかしげに私にもしきりに話しかける。

◇

夜、明方近くまで眠れぬまゝ、色々と荷物の整理から来るべき原始生活の設計など考へる。

### 3月22日(木) 晴 強風

今日も京子を休ませ、登美子を安田銀行と縄買ひにやることにし自分は帝国ホテルおける産報の会に弁当持参で出かける。

これは産報が文報会員中、工場で働いてゐる人々●●●(と文報)を招待しての懇談会であるが、この会における毛利常務理事の話●に私は非常に共鳴した。

この戦は、けっきょく日本国民の科学的原始生活力、創造力とアメリカ人の科学的バーバリズムの逞しき力との強弱によって決定するのだ、といふ同氏の意見に私は徹底的に同感である。会は昼食をとりつゝ進められたが、帝国ホテルの食事も今は貧弱なる副食物だけで、パンも飯も出ない。それで握飯を持参したわけであるが、実際には若い人たち一人か二人しか

―補遺欄へつゞく

(以下、補遺欄)

三月二十二日

弁当は持参してゐないやうなので、自分も出された料理だけで我慢し、立って毛利氏の意見に賛成する自分の意見を述べる。

この会合を機縁として組織的な会が作られることになり、これを当分東京における最後の会のつもりで出席した自分も世話人に上げられる。その世話人の打合せ会の後、志賀産報情報部長とともに帝国ホテルを出る。そして私は去る日(十八日)に感じたこと、即ち、国道につゞく疎開者の荷物運搬の情景に支那民衆の姿を見るという話をした。

すると、志賀氏は、むしろ、明るさを持って、日本国民はいよいよこれから支那の民のごとく逞しくなるのだと答へた。私は心ひそかに反省し肯き、明るさを覚えた。

そしてほがらかに有楽座の前に落ちてゐる二寸位の釘を一本拾ってポケットに入れた。…荷造り用の資材の中でも今は釘が最も入手難だ。

志賀氏と別れ、北林透馬君とも別れて中野に行くべく、有楽町駅から電車に乗る。吉田さんのところで留守の家を自分等に貸すつもりでアテにしてゐると困るから、それをことはらうと思ふのである。中野駅を降りると風邪はいよいよ激しく、あたかも蒙古風のこと黄塵百丈で唯さへ悪い目が痛くて堪へられない程である。一度は来たこともある家なのに、さんざん探した末にやっと辿りつく。運がよくても、幹夫君ひとりだらうと思つてゐたところが、一家揃つてゐて、しかも今晚いよいよ福島県下の疎開地へ立たうとしてゐるところであつた。挨拶をしてすぐ辞去する。

帰途の電車は●どれもこれもなかなかやって来







を報告にやる。

〔昭和十八年三月二十六日の欄に補遺〕と挿入句あり。〕

(以下、1943年3月26日の空欄に続く。)

〈昭和二十年三月二十四日の補遺〉

夜、千秋実君来る。劇団活動についての佐々木孝丸氏の申出を伝達に来たのである。その趣旨において賛成する。

この日、久しぶりに磯崎淳君からも便りあり。

夜、敵機来襲一名古屋地区に百三十機…。

### ○3月25日(日) 晴

今日も山本氏を訪ふ。覚悟して来た電車は旗ヶ岡から秋葉原まで意外にも混まず、腰かけて行けた位であったが、昨日の苦い経験により錦糸町から乗るつもりのはなかなか発車せず、二時間近くも待たされる。やっと乗った車は、これも空襲にやられた破損車で窓ガラスがなく、冬外套の襟をつまみあはせ、防空頭巾をまぶかにかぶっても寒風が身にしみる。漸く山本氏にたどりつけば、偶然にも同じバスに乗合せてゐたらしい菊地氏—橋詰氏の後を借りる人と一緒に落合ひ、甚だ間のわるいハメになる。仕方なく昨日と同じ口約束のみをし、持参の子供への土産(少年文学傑作選と椰子の葉かげ)をおいて帰途につく。

帰りのバスは折よくすぐに乗れたが、途中で燃料が尽き、三十分ばかりのところを錦糸町駅まで歩く。—この間ずっと被害地で痛む両眼をこすりこすり、釘を拾ひつゝ歩く。今日も駅といふ駅を目ざして疎開荷物を積んだ牛車や馬車が蜿蜒とつゞいてゐる。

餓え疲れて家にたどりつき、小原氏への報告には登美子をやる。

甚だしく疲労をおぼえ、のろのろと荷物の整理

をつづける。

なるやうにしかならぬ。悠々と構へるほかはない。

支那の民、支那の民!

その原始的生活力—創造力の逞ましさに對しては、われわれ日本人もこれを摂取しなくてはならぬ。

久しぶりに銭湯に行く。

八百屋の娘に再び人形や玩具をあたへる。—そのお礼のつもりか、配給の冷凍里芋をもって来る。夜はそれを煮て疲れ安めのお茶うけとする。

### 3月26日(月) 晴

(冒頭四行を塗りつぶしてある。翌27日の冒頭部分を間違えて書いているらしい。その後、冒頭に1944年3月26日の空欄に書いた記事を挿入するよう指示がある。以下、該当の記事。) 朝のうち登美子は芝高輪北町の兄の家に行く。早急に新しい住居が見つからぬ場合、兄たちの留守中その家を使はしてもらふについての相談である。

京子は学校を休んで荷づくりを手つだふことにする。

千秋実君、弁当持参で手伝ひに来てくれる。荷箱二個を拵へてもらふ。—そのうちの一個は代々木時代に横田氏に譲ってもらった古い茶箆筥であるが、今度これを大きい荷箱にし将来の原始生活には、これをチャブ台にも書き物机にも活用するつもり。

千秋君には洋子の柳行李の荷づくりもしてもらふ。途中、警報が出たが、大したことなく解除となり、幸ひだった。

おやつは大豆…。

夕食の代りにメリケン粉による代用食でお茶をすゝめ、佐々木氏に萩焼の杯、千秋君に昭和十四年の大陸旅行の記念たる水煙袋とソースを

おみやげに贈る。

夜は久しぶりにビールあり、ぐっすりと眠る。

### 3月27日（火） 晴

漸く春めいて来た。

場合によっては当分すべての預金や貯金が簡単にはとれなくなるかも知れないとの予想のもとに登美子、安田（五反田）に行く。これでこゝへの預金も残り五千円となる。心細い気持である。が、身を棄ててこそ浮ぶ瀬もあれ。再び裸になって起ちあがるまでのことだ。

今日は一人で書籍の始末をする。即ち、川島（八百屋）に八個、宮本（洗濯屋）に四箱、物語日本史十六巻、物語東洋史十五巻、ブルターク英雄伝六巻を預ける。川島には子供等への贈物の外に金十円を包む。

旗ヶ岡の円野氏のところに四月一日にリヤカーを借りる相談に行く。リヤカー一台借りることもなかなか大変らしいが、やっと約束させて帰る。夜、小原一晃氏に阿部君より貸与されてゐる火鉢、三上文子嬢の扁額その他を進呈する。

今日もビールあり。夜のお茶の時にそれを呑んで、ぐっすりと眠る。

### 3月28日（水） 晴

今日は京子の卒業式である。

今日も登美子を相手に一人で荷物の整理をする。どんなに簡易生活をしようと思っても、さて二十余年の結婚生活につもり積った世帯道具の山はなかなか崩すに骨が折れる。中には楫取素彦の言種ではないが、粒々辛苦の日の思ひ出絶ちがたい品もある。

が、断然整理しなくてはならぬ。まづ昨日の約束に基き宮本（洗濯屋）母子が来たので、好きな本を選ばせ、そこに代々木時代の本箱を預け

ることにする。

山田・天野両青年にも手伝ってもらふことにし、速達を書く。同時に千秋君にリヤカーの都合で四月一日に決定したき旨の速達。ついで幹夫君にも手紙を出すことにし、以上三通、自分で本局に出しに行くことにする。

洗濯屋の息子に手つだはせて代々木時代の本箱を同家に運ぶ。今日は産報の会合の日であるが、欠席して荷づくりをつづける。即ち、千秋君に作ってもらった大きな外箱に荷を積み、自分でも荷箱をつくる。これらの荷物は他日わが原始生活における机となりチャブ台となり物入れの箱となるであらう。

途中疲れ甚だしく睡気を催す程であったが、がんばりつづけて、夕食前銭湯に行く。銭湯も強制疎開の刺激からざわめき立ってゐる。

夕食後、小原氏に行き、借家二軒の候補のうち、比較的らくな方に一旦着きたき旨の相談をし、その帰途、大工服部君の家に行き、風呂の御馳走になる。

服部君、ついで小原氏来宅。

ビールを飲んで一気に眠る。

### ○3月29日（木） 晴

昨夜は疲労と麦酒の力で一気に快く眠れたが、起きると骨の節々が痛い。

が、昨日速達で東京新聞から依頼されてゐる強制疎開に関する原稿を書くべく久しぶりに机につき、原稿紙をひろげる。

ところが、小原老来り、例の市橋の持家を岩田表具店が●横から策動して借りようとしてゐるから、自分の家内とともに家主市橋氏に直接交渉に行けといふ。その通りにしたが不在。で、中に立ってくれてゐる渡辺六郎氏に再交渉の世話を小原夫人より頼み、更に家内と自分が渡辺

君に依頼に行く。やれやれ、煩はしいことではある！

ために原稿もオジャン…。

一旦床についたが眠れず、今夜は我慢するつもりだった五本目—最後の麦酒を飲んで眠る。

### 3月30日(金) 晴

庭に焚火をし湯をわかしヒゲを剃って原稿紙をひろげる。出来次第、東京新聞に届けるつもりでかゝる。

渡辺氏には登美子を様子を聞きにやる。程なく渡辺氏自身で報告に來り、あとより小原氏より何分の●指示ある筈だといふ。

先日速達で移転の応援を頼んでゐた天野青年來る。道案内旁々自分も永井君のところに一階だけ本を運び、あと小原君の指示に従ひ、戸口氏を訪ひ、同氏に同道してもらって家主氏を訪ふ。借家の話まとめり●契約の証として敷金百円を手交して帰る。その足で小原、戸口、渡辺三氏に報告し謝辞を述ぶ。これでやっと落ち着くべき場所だけはきまったわけだ。あとは幾人の手伝ひが得られるか、亦リヤカー二台が果して入手できるか否かの問題だけである。

病弱な天野青年と代って永井氏自身、坊やを連れて手伝ひに来てくれる。然し、近くに住居が決定したからには永井君に本を預ける必要もないので、四月一日の手伝ひを改めて頼み、記念の本など進呈して●帰す。

### 3月31日(土) 晴

満八年のあひだ住み—そして悲喜ともに多かった此の家もいよいよ明日は引越しである。

京子に手つだはして親近の人々にだけとりあへず移転の通知を出す。一葉書も今日までは三銭でよいのである。

午後、千秋君より明日、福島君をつれて手伝ひに來る旨の電報來り、大いに喜ぶ。これで手をまづ十分だ。あとはリヤカーと天気と空襲の心配のみ…。が、それはなりゆきに委せる外はない。配給の日本酒一合を飲んで眠る。

### 四月諸事要録

「街の映画館で」『興行日本』 50円 (内税金六円也)

### 4月1日(日) 晴

いよいよ引越しの日である。朝食をとりかけると辺りは既にさうごうしく騒ぎはじめて來た。リヤカーのことが気になり食事の中途に円野保治氏を訪ふ。三楽荘アパートの私宅には妻君のみみて、リヤカーは前日借りたる人よりまだ返して來ぬといふ。その人一岡崎なる人の家を訪ひ、早く返すやう要求すると、田中といふ人に又借しをしてゐるといふ。嚴重に抗議し、すぐに返すやう求めて一旦家に帰る。—この間、警戒警報あり。

南郷運送屋(円野氏)のところには登美子、洋子、京子を交替でひっきりなしにリヤカーの催促をさせつゝ、町会から借りてゐるリヤカーでボツボツ荷を運び出す。

やがて永井君來り、十時近くには待ち兼ねた千秋、福島の両君も來り、仕事はどんどんとかたづき五時近くには殆んど運搬を終る。

友情にあふれた三人の協力ぶりが真から嬉しく運搬終了後ガランと広がった古い住居で一荷●箱をチャブ台にして夕食を共にする。

かくて●●●疎開第一夜は思出深い旧住居で親子四人最後の夜を送る。

然るに夜中に警戒警報発令され今はラヂオなく完全なる待避壕がなく不安を感じたが、幸ひ大

したこともなく終る。

#### 4月2日（月） 晴

強制疎開で取壊されるこの家で最後の一夜を明かし、いよいよ最後のあとかたづけをした後、隣組の人々に挨拶して新居に引揚げる。

●●●●

内の整理は登美子と洋子にまかせ、自分は外まはりの掃除にかゝる。何しろ前の家に比べて家も庭も狭いので骨が折れる。

思ひがけなく永井君、小野忠孝君を伴ひ、ドブロク二升をぶらさげて来る。ドンブリを盃にして二升のドブロクを殆んど傾けつくして怪気炎を上げて帰る。

一小野君は決戦下にも我々は書くのだと大変な意気込であったが、その心底の悩みは、かくすすべなく、同じ思ひの自分には手にとるやうにそれを感じることが出来た。

両君辞去後、家人に遅れて夕食をとり、中庭に焼き棄てた灰の整理などして、すぐ眠る。

どぶろくの酔で一気に眠ったが、夜半前に目がさめ、言ひやうのない感傷に胸をかきむしられ、小野君等が残して行ったドブロクをコップ一杯あふって、また眠る。

#### 4月3日（火） 晴

朝のうち、●隣組長宅と小原氏宅に挨拶に行き、旧住所にも立寄り、田中、樋口、高田の隣組の人々に声をかけ、服部君にも転居先のことを知らす。

帰って、薔薇を植え、昨日とり残した便所の汲取を了し、家人三人とともに家の内外の整理をする。—自分は中庭に物置をこさへる。

夕方よしなきことより心みだれ妻子三人を泣かせる。作家とその深刻なる悩みの果のひがみで

ある。自分も悲しく昨日の残りのドブロク、コップ二杯をあふって眠る。—その酸っぱい味がいとわびしく思はれる。

◇

自分は作家としても一世間人としてもこのまゝ没落するのであらうか？

否！と反発的に確答する自信も情熱も今夜の自分にはない。

自分はもう四十五歳である。

娘をも泣かしはしたが、娘と妻だけは自分は死んでも是非なんとかして生き延びさせたいものと今夜しみじみと心から祈りはじめた。

#### 4月4日（水） 雨

午前一時、警戒警報、程なく空襲警報となる。未だ嘗てない激しい爆撃で自分等四人は未だ待避壕も出来ざるまゝ、に前住者が残して行った不完全さはまる壕に張板や竹の担架を載せそれにフトンをかぶせて、その下で抱きあふやうにして、五時間近くも待避した。途中、洋子と数度ドンドン橋と称させる陸橋の上に立って様子を見たが、自分等が立つところを中心にして大東京の円圏は到るところに火炎を發しその大きな焰だけでも十数カ所を数へることが出来た。

長い空襲警報も四時半頃には漸く解除されたが、途中、電気も途絶え電灯もつかなければ唯一の心頼りであるラヂオの情報も聞けず、そのまゝ一睡する。

出勤第二日目の京子は、自分等が眠ってゐる間に—いつからか降り出した雨の中を●亜 M ル既に海軍技術所へ出勤してをり、洋子も

〈昭和十八年四月五日の欄につゞく〉

〈昭和二十年四月四日のつゞき〉

やがて出勤し、薄暗い茶の間で登美子とともに

朝食をとる。

食料難で今朝もカツオ節と即製大根漬だけのおかずである。わびしいことではあるが、かうして兎も角も食べるものがあるだけでも有難いことだと思はなければならないかも知れぬ。

昨夜の事を思へば洋子も京子もさぞかしうら悲しい思ひで出かけたことであらう。殊に未だ強く叱られたことのない京子の心中など如何ならんなどと思へば自身が泣きたくなる。

わびしさ雨の中に又しても警戒警報発令…。●、ラヂオ●通ぜず、様子もわからず不安のうちに幸ひ程なく解除となる。

この警報下に前住所時代から馴染の郵便屋さんが美知子や浅野歳郎氏等の郵便とともに大日本興行協会からの書留を届けてくれる。

その郵便屋さんも家人を郷里岡山に疎開させて昨日やっと帰京したのださうで、乗物の言語に絶する混雑ぶりを語って行く。

書留は「興行日本」第四号に寄せた随筆「街の映画館で」の稿料五十円(税六円)で、昨日以来すっかり沈滞しきつてゐる矢先だけに新居における初の郵便物に原稿料とは多少明るい気持ちにさせられる。

登美子にも稿料の半分を与へることにし、新聞配給所への交渉がてら登美子とりに行く。

夕刻、もとの家に最後の荷物(古本屋に売払ふべき本をリュック

〈昭和十八年四月六日の欄につゞく〉

〈昭和二十年四月四日のつゞき〉

サツクを負って自分でとりに行く。

その二度目の折、畳屋をつれて家の始末に来てゐる家主直井氏夫人に逢ふ。

夜●この月の中旬、学童疎開に伴ひ富山県下に疎開する洋子の荷の整理をし、久しぶりに配給

された砂糖でこさへたゼリで一家お茶を飲む。

一この砂糖は国民政府主席代理陳公博氏より東京都民に贈●られたるもので、無料の配給である。但、その砂糖は輸送の関係でまだ日本に来ず、東京都(あるひは政府が)代りに配給したるものの由。

4月5日(木) 天候記載なし

ことごとく一夜を眠ることが出来た。

目が覚めてみると、まぶしく陽が照つてゐる。何かなしホツとする。

何事もなく夜を明かすことが出来た朝は、あゝ、●●無事に生きてゐられて、よかった!と思ふと、今は去る三月十日の空襲で世を去った青木君母堂の言葉であつたが、今朝などまだ若い私などでもそんな気がする。

久しぶりに和服に着更へて机に向ふ。とすぐ警戒警報となり防空服に改む。

●強制疎開による建物の取壊しを隣組●単位で勤労奉仕することになってゐて、今日が出動日であるが、自分等は越して来たばかりで今日は防空壕をこさへなければならぬので許してもらひ、警報が出たのをキツカケに原稿執筆を中止し、登美子を助手に終日防空壕をこさへる。この間、取壊し家屋の畳を貰ひ受けることにし四枚を運んだり防火用水が手に入ったので(四十円)それを運んだり、更に又、服部大工より

〈昭和十八年四月七日の欄につゞく〉

〈昭和二十年四月五日のつゞき〉

買受けることになってゐるケヤキの広い厚い板(五十円)を運んだり、今日は全く我ながら驚く程の重●筋肉労働によくがんばりつづけた。この間に小原、服部、岩田の町の人々が来て我



が防空壕に助言をして行く。

防空壕が八分どほり目鼻がついたことと、頑丈な防火用水が手に入ったことで、ひどく気が明るくなってゐるところに小磯内閣総辞職の報道を聞き、又すっかり暗い気持になる。

八時頃、服部大工の家に行き湯に入らせてもらって帰る。

筋肉労働は気持はよいが、腹が減るのは閉口だ。今日など日に五食とっても猶ほ満足せず、食料難の当節、台所は大恐慌である。

だが、食ふことの喜びだけでも人は生きられるものだ。

#### 4月6日（金）曇

昨日以来寒さが又ぶり返し、朝など火鉢にしがみつきたい程である。

が、夕を鼓して身支度をとゝのへる。昨日にひきつゞき防空壕づくりである。数年前、魚釣を始めようとして手に入れたはだしたびが今日となって大いに役に立つ。

但、昨日いそいそと始めた防空壕づくりも、さて仕上げとなるとやはり我々の手に終へることなく、途中幾度か泣き出しくなり投出したくなる。それを田中さんところから手に入れたみその汁のおやつや中間の食事等で力づけ夕刻ともにかくにも何とか防空壕を完成する。

この間、田中さんの奥さんや永井君の訪問を受ける。永井君は先日預けた本の一部分をもって来てくれ、東京の最後をみとゞけるために、あくまで帝都に踏みとゞまるつもりだなどと話す。組閣の大命鈴木貫太郎海軍大将に降下。

#### 4月7日（土）晴

天気はよいが、今日も寒い。

いよいよ机につかうとするとところに警戒警報出

づ。大編隊らしいといふので京子も出勤をしぱらく見合せさせて様子を見させる。（洋子は二晩つゞきの当直で昼間は不在）やがて空襲警報発令。昨日完成したばかりの待避壕の中に非常持出しの品々を入れて待機するうち敵P 51を加へたB 29の大編隊現はる。

が、みるみるうち、その一機は撃墜されて錐もみに落ちてゆく。

十一時前に警報解除。京子出勤。隣組の挨拶回りから登美子が帰るのを待って、自分も昼食後出かける。中央興生会の放送劇脚本に関する打合せ会である。

巷は強制疎開の建物とりこわして濛々たる黄塵に充たされてゐるが、そのあちこちに漸くはころび初めた桜の花が強い印象で我が眼をつく。

白金国民学校内にある中央興生会理事長室で打合せ会。理事長近藤駿介氏は平戸の小学校時代に教を受けたことのある人で、そのことを打明けてしばし平戸の回旧談にふける。

散会后、二本榎木の停留場で、妻君が胸を病んで入院中といふ徳田次郎君に逢ふ。阿部君の留守宅に寄り、転居のことを知らせる。

夜、平戸の姉から昨夏送ってもらった乾燥おからを煮させてお茶うけとする。

#### 4月8日（日）晴

今日は幾らか暖い。それに久しぶりに四人とも家に顔が揃ってゐるので●内外●の整理をやる。昼食時を利用して、町会のリヤカーを借り、八百屋や洗濯屋さんに預けておいた本や本棚●を運ぶことにする。かういふ仕事にもすっかり慣れて来たのはよいが、無暗と腹が減るのには参ってしまふ。

八百屋さんより蒸かした芋を一個、洗濯屋さんよりアサヒ（タバコ）三本をもらひ、どちらも



有頂天になって喜ぶ。

あゝあ。

夕食後、登美子ともの銭湯に行く時、既に倒された元の住居の跡を見るべく回り道をして行く。一この留守の間に、永井君、本を運んで来てくれた由。

夜、八百屋さんより得たる大豆を煎ってお茶うけとする。

#### 4月9日(月) 雨

煙草の配給なく終日痴呆の如くして過す。

夜、やむを得ず茶を煙管に詰めて喫ふ。

◇

この日、家永氏の家を借りる借りないで登美子と意見の相違を見る。

◇

洋子、当直にて帰らず。

◇

この夕、久しぶりに満腹感を得て、宵より眠る。一精神の世界に生きると誇る自分が今日この頃は豚に近い生活をしてゐる。

#### 4月10日(火) 雨

順調に行つてゐれば昨日か一昨日あたり配給になつてゐるべきタバコ―それも一日わづかに三本だが、それさへ今日もなく午前中は夢うつゝに過し、午後、文報の企画委員会に出席。石川達三君が人からもらつて喫つてゐるたった一本のタバコの残りをもらつて喫ひ、文化動員につき意見を述べる。

更に之又、他からやつと一箱もらつたといふ岡田三郎氏より一本恵んでもらひ、それを少し喫つて残りは持つて帰る。

企画委員会は中村局長、石川部長ほか二人の事務局側以外は戸川貞雄氏と高見順氏と自分の三

人だけしか出席者がなかったが、その割には自分にとって●●よい刺激となる会合であつた。一即ち、自分は、やはりよい作を書かうといふ気持を今日しみじみと深めることが出来た。書く、書かう、書くんだ。真の文学的作品を！夜は例によって何か食べたくなり、洋子に大豆を煎らせたり、カンテンでゼリーをこさへさせたりして、夜のおやつをとる。

#### 4月11日(水) 晴

去年の南瓜の実が実る頃も自分は毎日空腹感をおぼえて困つたが、今日この頃一食生活が不自由になるのに反比例して無暗と物が食べたく、餓鬼のごとく欠食児童のごとく我ながら浅ましい次第ではある。

産報、吉田千里氏等の手紙とともに河竹繁敏(河竹繁俊と思われる)氏より葉書あり。自分の作「黒龍江」を空襲に焼かれぬやう気をつけよとのお言葉あり。感動をおぼえる。

●●洋子に手つだはせて本箱の整理をし、内庭に物置をつくる。

洋子、午後から出勤。

宮下君来訪、いよいよ佐世保転勤にきまり、本月中に帰佐するといふ。

いよいよ我々だけ東京に残つて頑張ることになりさうだ。

夕食後、京子と以前の銭湯に行く。

こゝも十五日までで廃業するさうである。

洋子の疎開の出発その他の日取り定まる。

この日、登美子病臥。

#### 4月12日(木) 晴

数日ぶりに本式に晴天だ。

今日も終日家の内外の整理に当るつもりで新聞を読みかけてゐると警戒警報発令。編隊らしく、

— 48 —

登美子と京子をまづ防空壕に待避させ、洋子と交代で見張りをする。すぐ近くのドンドン橋と呼ばれる陸橋に立つと、実によく四方の眺望がきく。素人目には新宿の方向ではないかと思はれるあたり●●二ヶ所に大きな火焰が上ってゐる。先月十日の夜間爆撃同様、敵は単機または小<sup>マ</sup>数機で波状攻撃を期してゐるやうだ。

一十四日につゞける。

#### 4月14日(土) 晴

一十三日の記につゞく。

これに対する我が方の邀撃戦も物凄く、みるみるうちに敵の数機が火だるまとなって落ちてゆく。が、何しろ、前後四時間に及ぶ大空襲の上に自分は●●移転に伴ふ連日の疲れと、左足の痛みとに堪へ兼ね、幾度か待避壕の中で眠らうと試みたが、それもひどく苦しいので、つひに床に入つて眠つてしまひ、解除になったのも知らぬ始末となった。

京子の出勤があるので、一同いつもと同じに起きる。

自分も午前中は平戸の姉への返事を書くことだけで仕事をきりあげ、産報の会に出席すべく十時頃、家を出る。

途中、家主に入れる契約書の保証人になつてもらふために町会事務所に小原氏を訪ふ。妻君にそのことを依頼し、ついでに十八●●日に洋子の荷を運搬するリ●●ヤカーのことを相談し、旗ヶ岡から電車に乗る。覚悟はしてゐたが、イヤになるほど待たされた末に、五反田で都電に乗らうとすると、古川橋までしか行かぬといふ。省線山手線に乗る。と、品川と田町の間立往生したまゝ、一時間近くも鐘詰にされる。仕方なく車体の後尾から飛び降りて線路づたひに田町駅までたどりつき、三田から都電に乗る。こゝ

から日本橋と日比谷までの二本が運転されてゐるが、それからさきは一さい乗物がないといふ。かくして帝国ホテルに着いた時には既に十二時を過ぐるこゝと四十分…。

しかも、帝国ホテルで聞けば、産報の会合は今朝になつて取消されたとのこと。

一補遺欄につゞく。

四月十四日

この前の会(第一回、世話人会)にも自分は出席してゐないので、産報本部まで様子を聞きに行かうかとも思ったが、乗物はなし歩いて行くには左足の痛みが激しいので、銀座を回つて帰ることにする。

前の空襲で無残にやられた泰明国民学校に炊出しの人々が集まつて握飯の世話をしてゐるの●●●●を見ながら銀座へ出る。と、人●●往来も常より少く、開いてゐる店も数へる程しかなく、まるで廃●●かのごとひつゞりしてゐる。一東京生活二十年、かつては夜さへ静まる時のなかつた銀座が春暖の真昼かくも静寂を極めてゐるのを私は見たことがない。

さうした感慨から、僅かに店を開けてゐる数軒の中の一軒である銀座書店をまづ覗いてみる。売残つてゐる本には欲しいと思ふもの一冊もないが、わづか十二円の掛軸—宮沢賢治の詩を高村光太郎氏が書いた●●●拓本(印刷)が目につき買はうかと思つたが、簡易生活の実現に努めかけたばかりの、この際…と思ひ直し、こんどは西側のタバコ屋に移つて、生にんにく、早煮の素、アミノ洗粉など買ふ。

新橋駅には省線の切符を買ふ人が二列に行列をつゞけてゐる。そこで、ええい、大陸的に悠々と肚を据えろと思ひ、待合室のベンチに腰を下して弁当をとり出す。一帝国ホテルの料理を食べるつもりでもつて来た弁当である。

食べ終ってこんどは「きんし」一本の四分の一をキセルにつめて喫ひ、さて自分も切符を買ふ行列の群の中に入る。

ハルピンの市内電車を思ひ出す。わが春オーバーのポケットには銀座の歩道で拾った釘がいっぱい入ってゐる。

大井町でバスに乗り、荏原駅前下車。こゝでも釘を拾ひ拾ひ痛む足をひきずって帰る。

予想のごとく田中夫人と正彦ちゃんが来てゐる。去る十日頃から感じだした左足の痛み、いよいよ激しく、つひに付近の医者家に行く。不在。暫く午睡。夕食後、はじめて長原の湯に行く。田舎の銭湯より、もっとお粗末…。

◇

夕五時の報道で大本営発表を聞く。

昨夜の十一時頃から今朝方にかけて来襲したB29は百七十機で、畏くもこれにより明治神宮の本殿、拝殿は焼失したとのこと。愕然とする。

## ○4月15日（日） 晴

午前中、十三日から十四日にかけての記録と手紙を書くことに費す。

手紙は、平戸の姉への定例の便りと「黒龍江を焼かぬやう保護しろ」といふ河竹繁俊博士への御礼状…。

足は相変わらず痛い、午後は縁側においてゐる本箱の整理と便所の汲取をやる。そして南瓜の苗床●●三ヶ所をつくる。…この狭いマツチ箱のやうな家を南瓜の葉や花や果でおほひかくしてやらうといふ寸法。

洋子は当直。京子も学校に泊りに行くといふので、●夫婦二人きりで夕食。洋子のためにモンペをつくる登美子のつきあひをして九時の報道まで起きてをり、さて床につかうとすると警戒警報。情報によると相当有力な編隊らしいので、

手早く防空体制をとゝのへる。

十時近く空襲警報となる。やがて敵の一番機の姿が照空灯によって照らし出される。いつもと方向を異にして頭上近くを通る。しかも、二千から五千程度の高度である。

これは容易ならぬとの予感で急ぎ待避する。と、つぎからつぎと正に寄せくる波のごとく敵機は頭上を通過し、応接に暇なきほど待避信号も連続乱打される。

高射砲の炸裂音、敵機より投下する焼夷弾の爆破音…。これまでは度々の帝都空襲も距離の関係で●●対岸の火事祝することが出来たが、今度といふ今度、四方が既に火に包まれてゐるのである。

「老人子供は非難の準備をせよ」の指令も出る。「山梨地区より侵入する敵少数機あり」との零時十四分の情報を最後にラヂオも途絶する。つひに意を決し、隣組の渋谷氏、本沢氏等と協議の末、隣組内の夫人と子供達を避難させることにし●●●、登美子もその群の中に加へさせる。自分はひとり家に残り、両親のお位牌と露子の骨壺を身につけ、鍋と釜とを防火用水の桶に侵し、前記の渋谷氏、本沢氏、吉野夫人等と火の子を防ぎ非常事態に備へる。風がないのが何よりである。自分は敵機の来襲さへ絶えれば延焼はまづ大丈夫と見て、家の前の路傍に腰を下し、渋谷氏からたった一本のタバコをもらって、ふかぶかとそれを喫ふ。早く夜明けよと思ひ、解除のサイレン早く鳴れと祈る。

—補遺欄につゞく—

四面の火の手も幸ひ幾らか静止の状態に見えて来たので、本沢氏を促して避難先の夫人達を呼び戻させる。やがてその一同と登美子も帰って来、程なく空襲警報も解除となる。今度は洋子京子のことが気になって来たが、足の痛みいよ

いよ激しくそれに学校には完全な防空壕があり、軍隊もあるといふからそれを心だのみとして、様子を見に行くことを思ひ止る。

●●●●●● (電気が切れて、もやしを)

#### 4月16日(月) 晴

不安の一夜は明けた。否、戦ひの一夜である。姉の当直先から家に安否を気づかふて●●馳せ帰って来た京子の声によって目をさます。まづ一家四人の無事を喜び、自ら庭に茶をわかし平戸の姉より送り来れるスルメを茶うけに熱い茶を飲み、京子にも飲ませて、洋子の側に帰らせる。朝飯が出来る間に田中氏と永井君の家を見舞ふべく、痛い足をひきずって家を出る。空はまだ煙と灰に曇ってゐるが、春の朝七時の陽は—その煙や灰のためか火の如く赤く一既に空に高●い。田中氏の家は無事●●●●で、まだ眠ってゐるらしいので一声だけ声をかけて、そのまゝ立ち去る。昭南にある研一君の留守宅は、留守宅らしく荒れて見えるが、玄関前の紅白の桃の花が盛りで、いたくそれが疲れた私の目につく。永井君の家も無事。左近坊やにとスルメ一片を残して帰る。

登美子と二人きりで朝食。

大戦下の帝都を守り、その記録を残す…それが私が今日なほ東京に踏みとゞまる所以であることを思ひ、痛い足●に更に鞭打って、今度は荏原町駅方面の探訪に出かける。

若い男女の一産業戦士や学徒隊が、電車の線路づたひに徒歩で勤先に急いでゐる若々しい姿が頼もしく見える。

夫を戦地に送ってゐる八百屋の主婦に激励と慰問の言葉をかけて、荏原駅に到る。こゝも焼けたと聞いたが、その形跡は幸ひなさうだ。

八幡宮に詣で、小原君の家へ回って帰る。

小樽市へ疎開したといふ齋藤澄子(令女界時代の読者)から葉書が来てゐる。札幌の寺田桂さんに手紙を出さうと思ってゐたところだけに奇異な感じがする。

午前中は、日記と新聞と寺田さんへの手紙とで潰れる。

寺田さんに昨年来のお礼のつもりで金三十円を送る。

午後は早く帰って来た洋子を助手に内庭に穴掘りをやる。非常持出品を埋めておくためである。ついで昨日にひきつゞき南瓜の苗床をつくる。

●京子、疲れ果てて帰る。技研もつ●ひにやられたさうで、その後かたづけだった由。

一同、夜来の疲れで早々に眠る。

この夜、幸ひ敵機来らず。

#### 4月17日(火) 晴 風あり

午前中、記録と手紙に費す。

●●●●●●但、その間に東洗足医院—金沢医に左足の痛みにつき診てもらひに行く。骨の故障でなくおそらく腱の炎症だらうとのこと、やゝ安心する。診察料三円を払ってすぐ帰る。

午後は学童とともに近く富山県下に疎開する洋子の荷作りをやる。荷箱の改造からかゝるとなると相当に大変な仕事である。永井君に手伝いを頼んでおいてよかったと思ふ。

夕食にかゝらうとするところに永井君来る。完全に夜の十二時までかゝって、荷物六個—荷箱四個、柳行李一個、フトン一包、やっと完了。永井君の骨折は並々ならぬものであったが、それをねぎらふ酒も飯もなく不本意ながらスルメを焼いてお茶をすゝめたのみ。

自分等も疲れ果てて休む。

◇

夜、同じ隣組の吉野さん、自分のタバコ二日分、



わざわざ恵みに来てくれる。実に嬉しい。さっそくホンの少量をそのまゝで喫ひ、大部分をはぐして茶の葉を混じ持久策を計る。

可しろ一日三本のタバコではかうする外はないのだ。

◇

この日（昭和二十年四月十七日）大本営発表二件あり。

A. 沖縄本島の戦況発表

〈新たに敵千七百名殺傷

空母等二十二隻を屠る〉

B. B 29 来襲に関する戦果発表

昭和二十年四月十六日十六時…昨日四月十五日二十二時三十分頃より約二時間三十分に亘り

B 29 約二百機主として京浜西南部に來襲…。

撃墜五十五機—後に七十機

損害を与へたるもの五〇以上

〈以上十七日付の新聞による〉

4月18日（水）晴 風あり

六時起床。直ちに小原氏のところにリヤカーの交渉に出かけ、自身で三光荘アパートよりリヤカーを●挽いて来る。富山県下に疎開する洋子の今日が荷物運搬の日である。

家の品々も共に疎開させることにしてゐるので荷は大小六個、リヤカーに満載して、洋子に後押しをさせ自ら挽いて行く。馬込第三国民学校まで歩いて十五分足らず、道がよいので心配してゐた足の痛みも大したことなく、無事に運搬を終る。

リヤカーのついでにと思ひ、帰途、田渕さんところに寄り維新史、国史辞典、大人名辞書等、預けてゐた本を持帰る。主人田渕氏にも挨拶し、美事な八重桜二枝を頂戴する。

リヤカーに書物と桜の花を積み洋子に後押しをさ

せつ、悠々と国道を挽いて帰る。風流なるかな。午前中は記録と書籍の整理で終る。書籍もあと田中さんに預けてゐる分だけを残して大体整理終了のかたち…。

登美子は連日の疲労のためか熱を出し午後は臥床。自分も午後は大した仕事もせず、●夕食の支度をし銭湯に行き、京子の帰りを待って夕食をすますと早々に寝につく。

今日は昨日より風さらに強く敵機来襲を気にしながら寝たが、幸ひ夜中の警報は呆気なく解除…。

○4月19日（木）晴 夕刻より雨

隣組勤労奉仕出動。強制疎開建物の取壊しである。第四十一群の分担は偶然ながら元の第十八群中の酒井邸である。

自分も最初は頑張つてゐたが、左足の痛み次第につのり、つひに渋谷さんとこの秀子ちゃんのまゝごとの相手をつとめながら休息する。

そこへ警戒警報発令されすぐ空襲警報となる。一同さっそく引上げる。

情報によるとB 29 三機とP 51 数十機の由。待避する。

解除後、昼食。午後は登美子が代って勤労奉仕に出動。

夜、京子は洋子の当直先に泊りに行く。

4月20日（金）雨 時々晴

隣組の勤労奉仕（強制疎開建物の取こわし後始末）は天候の都合で延期。

雨の中を床屋探しに出かける。長原に九時半から開始するといふ店が一軒まだ客がないだけで、あとは旗ヶ岡から荏原までみんな満員…。今日は中止といふことにして帰る。代って登美子が種物買に出かける。

その留守中、茶の間の半間の押入に棚を吊って



整理をし●●たり、京子の靴入をこさへたりする。

登美子、ネギの苗（三円）とフヂマメ、ドゼウインゲン（二円四十銭）の種を買って来る。

夕刻、庭●で湯をわかつて足を暖める。あと大変気持ちがよい。

夕食。一こゝのところずっと食糧不足。いよいよ自分で少し調達に行かうと思ふ。

夜に入り風また強くなり空襲を気にしながら早目に寝につく。

然し、沖縄の戦況活発化し神機つひに到るの報…。一兩日の新聞に現れゐるに気をよくする。

◇

第二回目、南瓜の苗床をつくる。

#### 4月21日（土） 晴

早く起きて洋子の炊事を手つだってやる。

登美子と応接室前の塀の外にドゼウインゲンの種を蒔く。

左足の痛み未だ去らず。隣組の勤労奉仕には登美子が出勤し、自分は足の痛みを気にしつゝ家の内外を整理する。空襲下の簡易生活を目ざしつゝも●●家が狭いので、なかなかうまく整理がつかない。

座敷の押入に棚二段を、つくり、書物の整理をする。これでかなりかたづく。

夜、●●小原氏の家に行き、取こわし家屋の材木を防空用の資材として申受けたき旨を申出る。床に入ったところに園池氏より急用あり電話たのむの電報あり。洋子に代って電話せしめ明日明治神宮参拝の帰りに寄ることにする。

#### 4月22日（日） 快晴

洋子の富山県下への疎開出発の日も近付いたので、洋子をつれて明治神宮参拝に出かける。

洗足駅から目黒に出て省線原宿駅で降りる。電

車は日曜日のせゐか案外こんでゐない。

神宮の御門の外から拝するに御門の格子の奥には森が見えるのみで拝殿も神殿もない。一去る十五日の空襲に全焼したのである。悲憤やる方なし。

歩いて新宿に出る。洋子にとっても思ひ出深かるべき甲州街道を眺めて新宿街頭に出る。こゝもすっかり面目を改めてゐるが、昔ながらの花屋で一但、昔と変り愛想のわるい店員からチューリップ二本（一円）を買ひ、駅前で洋子と別れ、都電で園池氏を訪る。新宿二丁目から四谷塩町まで片側はすっかり焼野原となつてゐる。

園池氏の話は、航空工業教育協会に自分とともに入らないかとの相談。承諾し、オートミルでこさへた代用食を御馳走になり、キセルをもらつて銀座に出る。ホンの数へるしかない店の一つ一銀座書房から宮沢賢治の詩（高山光太郎書）の掛軸と玖村敏雄氏の「吉田松陰の精神」を買つて帰る。

午後は登美子を代つて隣組の勤労奉仕に出、旧酒井氏宅の取こわし材を運ぶ。これで燃料も当分は大丈夫だし、防空資材もかなり出来る。

夜、宮沢賢治の詩を茶の間に掛けて、洋子の壮行会と京子の就職祝をやる。お茶の時、洋子への訓戒の言葉を述べる。

#### 4月23日（月） 晴

朝、洋子の学校に行き、校長に挨拶を述べる。

帰つて終日燃料―取こわし材の整理。

洋子も京子も帰りが遅いので登美子と夕食。

入浴。

京子は省線の故障で遅れて帰り、洋子も疲れて帰る。

洋子も当分は我が家で眠る最後の晩であるが、この頃一家誰もが忙しく疲れはてて眠る。

気にしてゐた敵機の来襲、幸ひに夜はなし。

#### 4月24日（火） 晴

快晴。正に春である。

町会の勤勞奉仕でクズにより第二日目が自分なので、出かけるつもりであると、警戒警報発令。つゞいて空襲警報となる。

敵機はB 29の編隊で後になっての情報によると百二十機…。幸ひ城南地区には来らず。編隊を離れた一機が通過したのみ。

解除後、作業場―旧竹田邸（もとは南雲氏の家）に出かける。取こわ●●●●し家屋のかたづけである。かういふ仕事となると、気だけは焦っても女の人ほども働けない。慣れない仕事とは言ひながら我ながら情けない話だ。

が、それにしても、この家は成金南雲清作が金にあかして数奇をこらし、子孫のためにも思ひ建てた町内きっての豪莊建築だったが、建物強制疎開によって呆気なくこわされてしまったのである。流石にかたづけも外の家とは比較にならぬほど骨は折れるものの、けっきょくは、かたづけられ、あるものは灰と化されて●●●●ゆく。物の世界の拠るにたよりなきを思はされる。

午後は、―いよいよ洋子が富山へ出発する日なので班長の須田氏の諒解を得て三時半に切上げて帰る。

湯殿で行水して洋子とともに早目に夕食をすまし、五時、洋子を送り出す。小使として十円与ふ。

五時半、登美子とともに洋子を学校に送る。京子も駆けつけて来たので、自分と京子は大森駅から洋子とともに電車に乗り大井町で別る。

…疎開学童の中には唯一人ながら尋常一年生もある由。感あり。

夜、小原一晃氏来り、タバコ数本と今こゝに来

がてにもらったといふ一匹一円五十銭のアジの干物を一匹わけてくれる。小原老人の少年時代の思出話なかなか面白し。

十二時近く疲れて眠る。

#### 4月25日（水） 晴

朝食後、直ちに小原氏の家に行き、疎開騒ぎ以来の色々な好意に対するお礼の寸志として金三十円を呈する。

勤勞奉仕によって得た取こわし家屋の古材を防空資材と燃料とに分けて燃料の報の整理をする。今日一日で終らせるつもりであったが、途中、昨日の分の運搬があったり勤勞奉仕当番の代役があったり、更に夕刻には隣組全体の運搬に出たりして、今日も完成せず。

それにしても今日この頃の忙しいことは全く戦時下らしく殆んど自分等の生活も筋肉労働者に等しい。従って食糧不足の折からにもかゝらず食欲すこぶる盛で、夜分はまた頭を枕につけるが早いか、すぐ眠ってしまう。考へる暇も書く暇もないが、今はそれでよいのかも知れない。今日から洋子は不在である。当直の連続と思へばいゝやうなもののやはり淋しい。

寝ようとするところに電報。園池氏から明朝松永君に逢ってくれといふものである。

この日、朝、札幌の寺田桂さんや栃木の程島武夫君、それから近頃めっきり衰へたらしい佐世保の岳父から便りあり。寺田さんからは切手を貼った私製葉書十枚送り来る。

おやつには谷口さんを加へて茶をのみ、同家の娘さんが配給されて来たダンゴを食ふ。

◇

夜は三人で茶を飲みながら、富山県で第一夜を迎へたであらう洋子の噂などする。



#### 4月29日（日） 晴

決戦下にことほぐ天長の佳節だ。

気にしてゐた敵機来襲も京浜地区にはなかった。興生会の放送劇の主題を考へてゐると、経字屋の岩田君が、市橋氏で購入する取こわし家屋の古材を防空資材に分けてもらって上げるからとりに来いと誘ふ。出かける。初めは登美子に、後は天長節で早く帰って来た京子に手つだはせて正午までに運びへろへろ。

市橋さんの分も運んだ上に、岩田君が借りて来てくれたりヤカーがひどいボロ車なので、ずいぶん骨は折れたが、これで防空資材はまづ十分用意が出来た。あとは千秋君に穴を掘ってもらひ、岩田君の手で完成してもらへばよい。

馬込第三国民学校の小使いさん来り、疎開先からの洋子の手紙を土産（こちらから持たせてやった大豆の煎ったもの、カキモチ、アラレ等）をもって来てくれる。それをお茶うけにして茶を飲み、午後は押入の整理。応接室を京子の部屋にすべくその方の整理などし、夕食前京子に手つだはせて防空資材の材木を家の横に一括整理する。

銭湯に行く時間も気力もなくよごれた体のまゝで夕食。

早々に就寝。

京子は今夜から自分の部屋に寝る。

ここのところ連日の労働で夜は苦もなく眠れたが今夜は容易に寝つかれず。明日からは是非とも筆を下ろさなければならぬ放送劇のことなど考へる。

が、戦のことを考へ、又、近く勤める仕事場のことなど思ふと、流石に心は暗い…。

#### ○4月30日（月） 晴

昨夜は久しぶりに寝つきわるく考へることは、

おほむね暗いことばかりであつたが、ともかくも無事に一夜は明けた。やはり朝はよい。朝は希望とともに来る。

内庭に焚火をして火をつくり机に向ふ。そして自分に残された五十歳までの歳月を数へてみる。この間によい仕事を積んでおかなくてはならぬとしみじみ思ふ。

あと五年後の自分…。あゝ、その頃われわれはどのやうな生き方をしてゐることであらう。その頃には末ッ子の京子も既に二十三になつてゐる筈だ…。

机につく。興生会の委嘱脚本は自作「昔の仲間」の筋を使つてみようと思ひ、まづ金素雲氏編の「朝鮮民話選」や「同童話選」をとり出してひらげる。

と、警戒警報発令。編隊らしく、間もなく空襲警報となる。仕事を中止して●防空活動の準備にかゝる。一度空襲警報は解除となつたが間もなく再び発令、執筆を中止して防空態勢をとゝのへた上で、資材（取こわし家屋の古材）の整理をする。

来襲敵機はB 29 と P 51 の各百機。幸ひ、京浜地区には来らず。

三人で昼食をとる。

午後はすっきりと晴れ、風もすがすがしく、もうすっかり初夏の気分である。

表庭の白樺の若葉を眺めながら「朝鮮民話選」や「童話選」を読む。

夕食前しばらく茶の間の押入に棚など作る。

京子は昨日（天長節）出番だったため今日は休み。それで明日の誕生祝を今日にくり上げて、京子の部屋にあててゐる応接間で夕食をとる。

（この日、疎開先の洋子に第一信を書く。）

## 五月諸事要録

記載なし。

### 5月1日(火) 晴れ 夕方より小雨

新聞は沖縄の輝かしい戦果とともにドイツの無条件降伏説を報じ、●●●●ムツソリニの逮捕を伝えてゐる。

かくて世界の歴史は目まぐるしく変転してゆくのだ。

さうしたことを思ひながらも、ちっと机についで、放送劇の原稿を書く。が、執筆第一日は残念にも平時同様ホンの数行で投出してしまふ。

午後は押入に棚を作ったり、内庭の掃除をしたりする。…こゝのところ去年の紙箱づくり同様それに倣する形で自分も気がさすが、これも或るところまで気がすむやうに行かなくては止められない。さうした自分の性格である。

母の命日なので戦時食の供物をし京子の帰り●を待つ。余りにおそいので登美子と二人で夕食。金本さんところからの牛肉やっと手に入る。但、約束よりは三十円も高く一貫二百二十円である。量も少さうだが、品も上等ではない。

世話になった人々に分つつもりで、小原氏のところでは自分が持参。お返しにタケノコメシをもらって帰ると永井君が来てゐる。同君発案の詩歌展の話などする。

登美子は渡辺さんのところと戸口さんのところに牛肉を配りに行く。

永井君にも帰りに肉とネギを分けて上げる。初の残業でおそく帰った京子、特配になったとて珍しやチョコレートを持って帰る。

チョコレートも勿論おいしかったが、こゝのところ無暗と酒がほしい。

わびしく眠る。

### 5月2日(水) 雨

今日も書けぬ。

いや、何が何でも書きあげようといふ意力と感激がないのだ。

つひに投出して昨夜の小原老の話にあった中延五丁目の酒屋に町会の印をもって酒買ひに行く。八合入手。六円也。あと二合は明日わたすといふ。小原老と二等分し、帰ってさっそく一本つける。うまい。もう底の方には白くおりのたまりかけた酒ながら、腹にしみわたるうまさだ。

よい気持で一眠りし、さめて板の箱をつくる。万一の場合には荷箱とし不断は下足箱と腰かけと兼ねる箱だ。…かうしたことに打込めてなぜに創作に専心出来ないのか。何かうしろめたい気持がする。

残業と言ってゐた京子も早く帰って来たので久しぶりにスキヤキで夕食。砂糖なしのスキヤキだがうまい。しかし、うまい筈である。二百二十円のスキヤキだ。

寝がてにまた酒を飲む。酒に倣するのではない。何とかして創作欲をかき立てようと思ふのだ。一時すぎ目がさめる。暗室の準備が出来てゐないので、起きて書くわけにも行かず。●寝そべって残りの酒を飲み、幸ひまた眠る。

◇

この夜、夕食後、田中さんの新居に、京子と預けておいた本をとりに行き、お茶を御馳走になって帰る。

田中さんの住居は狭いながら感じがよい。

### 5月3日(木) 曇

今日もやはり書けない。

航空工業教育協会のこともあるので気は焦るのだけれど、どうしても書く気になれず、午前中から昨日の残りの酒を飲み、京子のモンペつく



りに忙しい登美子に代って昼食の用意をする。御飯が足りないといふので、牛肉を使って雑炊をつくる。

近く北海道に疎開するといふ家永夫人、するめとウキスキー少量をもって挨拶に見ゆ。

又、岩手に疎開する当本夫人も来り、これはヒカリー箱を頂戴する。こゝのところ、少しづつながら酒とタバコの当り年で嬉しい。

午後、二回にわたり中延五丁目の中島酒屋に行き、昨日の残り二合を買って帰る。そして●一補遺欄につづく。

(以下、補遺欄)

五月三日

小原氏には渡さず、自分で失敬することにシ夕食にもちょっと一杯やる。

夜、第五班長の須田氏来訪。自分の後任として班長を引受けてくれといふ交渉である。前の住居にゐた時にもこの交渉があった。それを今日までは町のことに頭を入れたくないためにことはりつづけて来たのであるが、強制疎開をツツカケとする心境の変化から快く引受ける。須田氏、感謝して明夜の組長会を約して帰る。

残る日本酒一合余りと家永夫人よりもらったウキスキーをグラス二杯ばかり飲んで眠る。

私個人の生活は、およそこのやうに愚劣きはまる一日であった。

然し、今日といふ日は私一人にとってでなく、全人類にとっても忘れることの出来ない歴史の日のつづきである。ムッソリニの銃殺の報につづいて今日は凡ての新聞がヒットラーの戦死を報じてゐるのである。

ルーズベルトまづ死に(四月十二日)それから十六日目の四月二十八日にはムッソリニが、十九日目の五月一日、つひに、ヒットラーまた英雄的最後を遂げたのである。

この三つの死を誰が感慨なしに聞くことが出来るよう。

私は酒の中にもそのことのみを思った。

5月4日(金) 晴

五時に起きる。

食事の支度が出来るまで庭を歩いたりゴミを焼いたりして過し朝食の後もドンドン橋あたりまで歩いて、すぐ机につく。すぐに書くつもりであったが、ベルリン陥落やヒットラーの英雄的最後を報じ、また異常の重大事局下に処する国民の覚悟を促した鈴木首相の談話の載ってゐる四つの新聞が、●まづそれを開かずにはゐられない気持ちにする。

明治三十七八年戦後の折は、未だ四歳の幼童でしかなかった私の、四十五年の生涯のうちで、この朝の新聞ばかり私の胸をかきむしつたものはない。

私は一度しづかに目をつむり、熱い番茶をすゝって、しづかにペンをとる。いふに甲斐なき我が貧しき創作のペンなれど…。

さてペンはとった。が、主題も筋もほゞ出来てゐるにも拘はらず、書く気力と感激がなく、つひに投出してしまふ。

文報に電報を打ち、航空工業教育協会入りの件につき園池氏を訪はうと思ひ、警戒警報が出たので情報を聞きつゝ、早い昼食をとって家を出る。まづ四谷の仏具屋によって位牌を受取らうと思ひ、洗足駅から目蒲線に乗ることにし、洗心堂書店で比律賓史下巻を買ふ。

私等にとっては若い日のみづみづしい思ひ出の伴ふ新宿も今はすっかり戦災地である。そのことに感慨をおぼえながら都電で四谷塩町に行く。一その前、新宿駅で文報の大館君に原稿を七日の朝まで待ってもらふやう電報を打つ。



入山仏具店で位牌を受取り、二十四円の代価中、残りの金をわたす。まさかの場合は身を守って待避するために特に小型に改めた位牌である。園池氏は今ごろ事務所だらうとは思ったが…

～～補遺欄へつゞく

(以下、補遺欄)

五月四日

近くまで来たのだから念のためにと思ひ、園池氏の自宅を訪ふと、幸ひにも疲れがひどいからとて珍しくも在宅…。航空工業協会の件につき相談。この結果、園池氏は一先ず現在の人形劇の方に踏みとゞまり、私が専ら中心となって芸能部（協会の）の方をやらうといふことに、二人だけの話はまとまる。

代用食のお茶うけを頂戴し、また先日もらったキセルが首がとれたので別の一本をもらって帰る。湯殿の洗面所に吊る洗面道具棚をつくる。勤勞奉仕によって得た材料（板）が豊富なので、不器用ながら何でもこさへることが出来る。つまらないことのやうだけれども、これも戦時下の創造生活の一端である。かうしてせめて生活を輕快なものにし明るく生きる道を考へなくてはならない。

夕食には先日金本さんより入手の牛肉によりピフテキあり。配給のニシンの煮つけあり、昨夕につゞき今夕も亦、近頃ぜいたくなる御馳走といふべし。

長原の銭湯は今日は休みなので永井君の家の近くの<sup>ママ</sup>に始めて行ってみる。案外近く、氣持も思ったよりはよろしい。これからこゝも時々利用することにしようと思ふ。

七時半、自分が班長としての最初の群長会議。須田前班長に紹介されて●●●就任の挨拶をする。右散会后、須田さんと二人きりになって事務引継をする。

思ったよりも面倒な仕事のやうだ。然し、戦時下の町内生活は国民生活の基礎をなすものだから思ひきって努力しようと思ふ。それに近頃めっきり氣力を失ってしまつてゐる登美子に氣を張らせるためにもよいことだらうと考へる。

十時頃、須田さん帰る。

家永夫人よりもらったウキスキーの残り全部を飲む。特配のニシンの塩焼を一匹ペロリと肴にする。こゝ三日、思ひがけなく酒とウキスキーが手に入り大いに楽しむことが出来たが、これでまた酒とも当分お別れだ。今度は一帯いつ手に入るのか…。

5月5日（土） 晴

男の節句…。

班内十二群の新聞が明日からいよいよ私の家に配達されることになる。それで今朝から早く起きることにする。

今日からガスも出る。

五月を誕生月とする私は、昔からこの月が好きだったが、今年は五月に入つて班長となり、また航空工業教育協会入りをすることになった。希くば、この月を境にして●●戦局われに好転し、私の行手も光明にあふれよ。

暗澹たる欧州の情勢を思ふにつけても心から祈らずにはゐられない。

何といつてもドイツの敗北は我々日本人をして大いに失望せしめた。が、さうした思ひを<sup>ママ</sup>へて机につく。

けっきょく原稿出来ず…。

午後、班長としての関係書類を保管する箱をつくる。

もとの隣人田中夫人、●●端午の節句の今晚お夕飯を共にしたしとて招待に見ゆ。

夕方、一家三人その招きに<sup>ママ</sup>応じて田中さんとこ

ろに行く。生ブドー酒●●に白い御飯…。たっぷり頂戴する。自分だけ一足さきに辞して町会事務所における初の班長会に出席。

そこへ千秋実君が訪ねて来る。…劇団行動について指示をあたへる。

班長会終了後、須田前班長と同道で暗黒の道を帰る。

●●●●●●（警戒警報発令）空襲警報●●発令。ぎょっとしたが幸ひ間もなく解除となる。

### 5月6日（日） 晴

昨夜の疲れで、予定の原稿すっかり台なし。

午後一時より家で群長の集会を求め、班長会の報告を●●●し、国債貯金の割当、米の通帳の配布等を終る。

そのあと疲れ切って昨夜登美子が田中さんのところからもらって来たブドー酒など飲んで、うつらうつらと過す。

### 5月7日（月） 晴

午前十時、翼賛人形劇団事務所に園池氏を訪問。同道で大政翼賛会に佐々木君を訪ふ。…こゝが空襲で焼かれてゐることを迂闊にも今日はじめて知った。

同道で更に芝の旧女子青年会館に松永健哉君を訪ふ。持参の弁当で昼食を共にしながら航空工業教育協会の実体を聞く。

青葉の街を銀座まで歩く。

家に帰ると登美子他出中。

永井君の家に行つて、右協会入りの意向●●の有無を訊す。

夕食は平尾さんより入手の牛肉でスキヤキ。

疲労甚だしく●●●、湯に行く気力もなし。

●●ブタのごとく虫のごとく眠る。

### 5月8日（火） 晴

朝の目ざめも甚だ元気なし。

岩田友三郎君の細君つひに死去の由、さっそくお悔みに行く。

班長としての事務二三を片づけて、ぼつぼつ出かけようかと思つてゐると、警戒警報。戦爆連合の編隊らしく、すぐ空襲警報となる。

が、幸ひ程なく解除となる。

航空工業教育協会も文報企画委員会もともに出る気なくなり今夕、田中さん一家と夕食を共にすることにしてゐるので●●●米に入つてゐる豆粕や去年の南瓜の種を煎つたりして時間をつぶす。約束の六時半、●●●田中さん一家三人来る。久しぶりの豪華版で繰上げ誕生祝をやる。但、酒ぬきである。

九時散会。直ちに町会を代表して岩田君のところにお悔みにいく。

◇

私生活の低調にひきかへ世界は今なんと大きな歴史を描きてあることか。

### 5月9日（水） 晴

終日家で暮す。

夜、国民登録に関する臨時班長会に出席。●—その前、昨日の電報に基き、千秋実君来る。時間がないので明日午後、銀座の事務所で詳しいことは相談することにし、航空工業教育協会のことにつきその知り得るアウトラインのみを語る。班長会の帰りは脱す一夜の街は余りにも暗いので町会の提灯をさげて帰る。

東京の夜に提灯の必要があると嘗て考へたことがあつたであらうか…。

今日も亦、私生活の低調さにひきかへ世界は歴史の大きな歯車を刻みつゝある。即ち（※ここでこの日の記事は終わっている）

### 5月10日(木) 晴

国民登録に関する緊急群長会の回章を回し、会のことは登美子に代行させることにして十時頃家を出る。

田町から都電に乗り、増上寺前で下車。航空工業教育協会に履歴書を差出し、●●再び都電に乗り。青葉の芝区役所界隈は苛烈なる戦時下とも思へぬみづみづしさである。

帝国ホテルの産報三月会に出席。三時散会。待たせてゐた千秋実君と銀座西二ノ三の三木ビル四階(航空工業教育協会)の事務所で協会入りのことにつき昨夜にひきつゞき相談。乗出すことに大体決定。銀座四丁目目で別れて帰る。

夕食に今朝方田中さんが届けてくれたブドウ酒一升(四〇円)のうち小量を飲み、久しぶりに、のうのうと机の前に腹ばふ。

納豆がたくさん手に入ったので、それを肴に寝がてにも飲む。

### 5月11日(金) 晴

興生会の仕事は断念するつもりでゐたところ、文報では十二日まで待つから是非にといふので、きょうはそれにかゝるべく机について、まづ新聞を読んでみると、珍しく豊坂徳衛からの便り…。茨城県に疎開してゐるさうだが、それにより中山利国氏の情報もやっと判明する。感、切なるものあり。

右と同時に札幌の寺田桂さんから便箋一帖送り来る。

警報発令。まもなく解除。

●●●●●さて原稿にかゝらうとすると今度は戦時農園の割当をするといふ。昼までかゝる。昼食をすまして家を出る。三木ビル四階の航空工業教育協会の事務所で園池、千秋、自分の三人に松永君を加へて、いよいよ芸能運動に乗出

す肚をきめる。

帰途、小原氏と明日の勤労奉仕につき打合せる。夜、ブドウ酒あり！

### 5月12日(土) 雨

生憎の雨で勤労奉仕は中止。

引越以来の新聞の切抜を整理してゐるうち早くも正午となる。

札幌の寺田さんから煙草の代用としてトロロこんぶを封書の中に入れて送って来る。

午後から幸ひ雨も止む。

午後一時半、班内の群長と農園利用希望者を町会事務所前に集め、強制疎開跡の割当を行ふ。旧岡本邸跡を三五、三六の両組に当て、交番前の三角地を三十八、四十二、四十四の三組に当てる。第三の旧十八群跡はクヂビキの結果、笠原氏跡四十五、和田氏跡が我々の四十一、坂井氏跡が三十九。なつかしき田郷、樋口の跡は残念ながら四十六に当り、田中、高田の跡は四十群となる。

夜、永井君来る。航空工業教育協会の件につき語る。

今夜もブドウ酒を飲んで寝たが、久しぶりに仕事(協会)のことで幾分の興奮をおぼえ、夜中に更にブドウ酒を飲んで、やっと眠る。

### ○5月13日(日) 晴

今日は町内の勤労奉仕に第五班長の私が指揮者として出る。奉仕員二十余名を点呼し、直ちに強制●●疎開跡のかたづけに着手。みんなよく働いてくれる。

昨日延期の電報を打ちそこなったので千秋君防空壕の穴ほりに来てくれる。しばらく家で遊んでもらってゐて昼食を共にしながら航空工業教育協会入りの件につき語る。

千秋君帰り、午後も勤労奉仕。予定●仕事は幸ひ早くも二時班には終了したので、あと出仕者に○○を分配することにして、めいめいに引取らせる。

千秋君の招電により福島君来る。去月十三日の空襲に罹災せる同君よりその話を聞き、夕食を共にしながら劇団運動の話をする。夕刻おそく同君帰る。日本剃刀と安全剃刀を与へ、ニウム(アルミニウムのことか?)の弁当箱を貸す。

一補遺欄につゞく。

(以下、補遺欄)

五月十三日

夕食後、お湯にも行けないので、昼間の奉仕のとき焚火をした疎開跡を見回り、小原氏の家に行き、学校を休んで奉仕に出た谷中寛青年のために証明書をもらふ手配をする。

帰ってみると、永井君、友人の秀里氏を伴ひ朝鮮ドブクロ一升とアルコール少々をたづさへて来てゐる。さっそくそれを飲みながら秀里氏と労務管理の話などをする。

酔ひよく回って、夜中の警報には起されて身支度はしたものの、ゲートルはきつまゝ朝まで眠ってしまふ。

5月14日(月) 晴

昨夜は思ひがけなく永井君とその友人秀里氏の訪れにより朝鮮ドブクロとアルコールを得、その酔に乗じて深々と眠って、警報さはぎも夢うつゝの間に過した。

午前中は焚火とヒゲ<sup>マ</sup>すり、新聞と日記に費し、午後二時からは新しい芸能運動準備会への出勤だ。残念ながら興生会の原稿は断念のほかはない。全く自分でも残念ではあるが、創作欲まるでなく気力も衰へ何も仕方がない。

銀座西三丁目●●三木ビルは、敵機空襲●●●

の折その隣までやられた焼残りであるが、その四階の一室が我々の、いはゞ組閣本部である。集るもの自分を中心に園池、永井、千秋、福島、清水の諸君。具体的な劇団編成準備よりも、まづその前の気持を確める意味で雑談に過す。

福島君は既に私と行動を共にする肚をきめ、工場の係長にもその旨申出した由。

右散会後、永井君と同道で銀座を歩いて帰ったが、その折永井君も参加の決意を述べる。

もはや私自身の熱意如何によってそのスタートは切れるのだ。

銀座も建物疎開ですっかり荒涼たる風貌に変ったが、柳だけは手入れをせぬためか例年よりも一段と蒼く繁つてゐる。

夜久しぶりに銭湯に行く。

昨夜もらったアルコールで登美子今朝つくった紅茶ウキスキーを飲んで眠る。

仕事(芸能運動)のことで、珍しく興奮し夜中に残りのウキスキーを飲み干して、やっと眠る。

○5月15日(火) 曇 夕より雨

食料難はどここの家庭も事実ではあるが、それにしてもこの頃のこの空腹感は何としたことであらう。精神の世界が空洞になってゐることの証拠だ。反省しなくてはならぬ。

今日から主要食糧の配給量が切替へになり私の家では更に減量されるわけであるが、それにつけても今朝のこの感ひとしは深い。

新聞と日記と定例の姉と洋子への便りで午前中を終る。

各班で隣組へ割当てた共同農園のうち三五、三六群の分に対して旧持主の管理人から横槍が出たといふので登美子を小原氏のところへやったが、話の筋がまるで違つてゐるので自分が言つてラチをあける。

●●● (昼食後)

午後二時、銀座の事務所へ出かける。千秋は劇団員を糾合するために出勤してゐるので出席せず。集るもの…田郷、園池、永井、福島、清水の五人。これに松永君や北村氏も時に顔を出して懇談。

劇団長について各自に投書させたり、福島の使用解除の件につき相談したりして時を過す。

帰途、園池さんの人形事務所に立寄る。

福島を家の近くに住ませ<sup>マ</sup>内食させる●●ことにする。

5月16日(水) 晴

ヒゲ剃り、新聞、日記、町内の仕事……等々で、けっきょく午前中はつぶれてしまふ。

興生会の放送劇は我ながら意気地なく残念千万ではあるが、つひに思ひきることに決心する。翼賛会より同会解散とともに勤労芸能研究会も解散するとて車代二百円送り来る。多少の感なくもない。

午前中から出かけるつもりだったが、警報が発令されB 29、B 24、P 51等<sup>マ</sup>小数機ながら多種らしいので、昼食後家を出る。

一時、園池氏を事務所に訪ひ、同道で三木ビルの事務所に行く。途中、千里軒といふ昔なら見向きもしなかったであらう喫茶店で、珍しやトコロテンとゼリーを見て、それを食べる。

園池氏と二人の立場を明かにすることを協議する。千秋君来り、女優三人を同志に得たことの報告。永井清水の両君も来り、

一補遺欄につゞく

(以下、補遺欄)

五月十六日

自分より自分の本心の一端を述べ今後の方針など断片的に述べる。私が自分がいまだに愚

図々々してゐるのは、自分の決意と熱意の燃えあがるのを待ってゐるのであって、こんど立ちあがるからはこゝを死場所としたいのだと述べるや、千秋、それを喜び興奮の色を見せる。

永井、千秋の両君とドイツの悲劇など語りながら青葉の街を歩いて芝の事務所を見に行く。割当られた二階の一室はせますぎるので、そこには連絡員のみをおき、当分はやはり銀座の三木ビルを使ふことにする。

新しい仕事に対して少しづつ熱情の高まって来るのをおぼえる。そのためか、いさゝか不眠…。

5月17日(木) 晴

新しい仕事(航空工業教育協会)について案を練るため今日は家に閉ぢこもることにする。

但、午前中は登美子が隣組共同農園に出かけてゐる留守に次から次と町内の人が来て、静かに案を練ることも出来ないで、新聞と日記と一二の手紙でつぶれてしまふ。

とかくするうち、警戒警報につゞいて空襲警報…。B 29の外にP 51の編隊らしいので万全を期し、時折待避もする。が、幸ひ長くしないで解除にはなったものの、午後もしきつゞき町内の人の来訪相次ぐ。メ切の迫った国民登録に関する質問やら相談やらである。そのうち清水君を使ひにやって招いておいた山下与志一君が来てくれる。出征以後はじめて逢ふわけで、数年ぶりの対面である。その数年●●の間に山下君がすっかり変つてゐるのを見、しみじみと戦場は人を老ひさせるものだと思う。

例の演劇運動のことを語り協力を求め快諾を得る。五時近く同君帰る。

ものすごい雨が降り出し、登美子は京子を迎へに出たが、行き違ひに京子は帰つて来た。

小原氏より酒一合あまりをもらひ寝がてに飲む。



◇

今日はかういふわけで予定の仕事は何ひとつ出来なかったが、例の運動に対して●漸く熱情の燃えあがって来るのをおぼえる。

とにかく、やろう。そこを死場所として…。

## 5月18日（金） 晴

五月らしい輝きと、みづみづしたにあふれたよい天気…。

今日は洋子の誕生日である。朝のうち祝福の手紙を書く。

午前十一時、帝国ホテルに行く。大政翼賛会の勤労芸能研究会の解散式である。自分としても精動以来そこを拠りどころとして働いて来ただけに感慨なくもない。

帝国ホテルの料理は今日もサツマ芋を煮た汁のやうなスープの外<sup>ゝ</sup>に他<sup>ゝ</sup>に一品のみ。パンも飯も出ない。

散会后、三木ビル四階の事務所に行き、永井君、千秋君と明日の打合せをして少し早目にきりあげる。三人、間引疎開と空襲とですっかり荒涼となった銀座を歩きながら、この先生に立ちあがる演劇運動の将来のことなど希望をもって語りあふ。

問題は沖繩の戦況だ。それがけっきょく三人の頭にこびりついて離れない。

夕食後、新聞でも読まうとしてゐるとき、永井君、秀里氏、同氏同伴の学生、●アルコールを加へた朝鮮どぶろくを下げて来て大いに飲む。やがて酔ひつぶれて眠ってしま●ひ、途中床に移ったのもおぼえなく、朝まで一気に眠ってしまふ。

そのあと三人は更に飲み飲んで、すっかり酔って帰ったといふ。

## 5月19日（土） 曇

午前中、空襲警報。

昼食後をすまして銀座の事務所に行く。●●永井君、清水君出席。

女優三人を引見する。

●病気の園池氏宅に電話をかけて、二十一日の協議会を延期することにし、永井君、千秋君と雨にぬれつゝ新橋まで歩く。

細君の実家に帰ってゐた福島君来り。今夜は泊らせることにする。

小原氏に金参拾円お礼をする。

永井君等が昨夜残して行つたアルコール入りのドブロクを飲んで眠る。

「外食券」（※おそらく小原氏から参拾円で購入したもの）

## 5月20日（日） 雨

気にしてゐた天気あいにくと雨…。

福島君、遊んでゐるのは勿体ないと台所の修繕をやる。さうするうちに雨も小止みになりかけたので、岩田さんに声をかけ、まづ二人で旧防空壕のとりこわしにかゝる。そのうち岩田さんも来、谷さんも手つだってくれ、時々降り出す雨をおして●壕を掘る。やがて千秋君来る。精兵の援軍を得た形で、仕事やうやくはかどり出す。午後になる朝鮮ドブロを探しに行つてゐた永井君、首尾よく二本（六〇円）を掴得し来り。壕掘りを手つだふ。一同大いに張りきり、●六時までに入口だけを残して掘り了る。

家族三人に谷口さんも加へ、総勢八人で夕食を共にする。

二本の朝鮮ドブロクに永井君もメートル頗る上り、九時散会。

福島君だけが泊ることになる。



## 5月21日(月) 晴

(冒頭三行塗りつぶされている)

防空壕構築第二日。

●●今日は幸ひ天気もよいので岩田さんも早くからやって来、泊りこみの福島君に自分、それに永井君も今日は午前から手つだひ、仕事大いにはかどる。

以上の人々、昼食を共にし午後も続行。

おやつ休みをしてゐるところに、千秋君、つばさ隊(仮称)の隊員●候補として二人の女優さん(マ マ)と若い装置家の木村君を伴ひ来る。三人に自分等の方針や抱負を述べる。

六時、仕事を切上げ、丁度さいはひ今日配給になった五合の日本酒を汲みかはして夕食を共にする。

福島君も連絡のため今夜は一旦帰る。

## ○5月22日(火) 曇

防空壕構築第三日。

岩田さんを中心に今日は福島君、京子、自分の四人。京子はこの手つだひのため昨日は早退したが、今日は一日休み。

自分は午後から防空興行教育協会の芝事務所に松永君を訪ひ、芸能活動のことを打合せ、準備費として金八百円也を受取る。

文報の企画会議は欠席することにして四時●ごろ家に帰る。防空壕は八分どほり完成して、あとは入口だけとなつてゐる。

六時、秀里君来訪の折の置土産一朝鮮ドブロクの残りを飲み、夕食を共にする。

福島君、今夜も帰る。

## 5月23日(水) 雨 午後晴

防空壕第四日—完成の日なのに生憎と雨。岩田さんも一度は早く出かけて来たが、この雨では

仕方ないとして帰る。

町内の野口君、農園のことで相談に来、長く話しこんで帰る。そのあと数日分たまってゐる新聞の整理をする。

午後、雨止み、岩田さんの仕事始まる。夕刻ほど完成に近付く。岩田さんと夕食を共にし、食後京子と岩田さんの家●に●湯●●をもらひに行く。強制疎開者に対して配給された日本酒二合を飲んで眠る。

が、間もなく警戒警報に起される。やがて空襲警報となり、つひにわが町内にも、わが班内にも焼夷弾落下す。それまで待避してゐた自分も壕を飛出して、下の若い朝鮮人とともに懸命に消化につとめる。

敵は一機または二機づつの波状攻撃で機数はおそらく二百機から三百機の間と思はれる。

町内の日を幸ひ悉く消し止めることが出来たが、四方すでに火に包まれ風も出て来たので渋谷群長と計って女、子供を避難させ、自分は休息しながら盗難の警戒をする。

一補遺欄につゞく

五月二十三日—二十四日

田実夫人、水と豆粕を油でいためたお茶うけを出してくれ、有馬夫人は一本の煙草と●今どき珍しいアメ玉ひとつ口に入れてくれる。

この時、東中延で罹災したといふ母と息子が通りかゝる。慰め励ます。

(※二行塗りつぶされている)

東の空やがて白みかける頃、田中佐兎志呂君、見舞に来てくれる。

四方は猶ほ炎々と炎上しつゞけてゐるが、この町内はまづ危険なさうなので、渋谷群長と計って今度は自分が避難してゐる女達を迎へに行く。国道は罹災者あるひは避難者の列がえんえとつゞいてゐる。

わが四十一群隣組は洗足池に近い林の中に●●避難してゐた。

帰宅して一休みする間もなく疲れはてた体で家の前の道路の整理をする。一防空壕を掘った時の土のために道がぬかって消火活動にも避難者の通行にも大きな障害となったからである。本間義雄氏の子息が手つだってくれたので、オムスビを御馳走する。

永井君も見舞に来てくれる。

今日は私を首脳者とする芸能団の発協議会が明日なので●●重立つ人々とその下打合せを協会の銀座事務所で開く予定であったが、この道路整理があるし、交通機関もおほむね

一本欄へつゞくー

(以下は、5月24日の欄に続きが書かれている)

## 5月24日(木) 晴

ー補遺欄よりつゞくー

途絶してゐるさうに思へるので、出かけることを中止する。彼等にして熱意にあらば私の家へ訊ねて来るであらう。

果して午後、千秋と福島、品川から歩いて来たと言って訊ねて来る。しばらく土運びの手つだひをし、打合せをして帰る。福島は予め話してゐたとほり、私の近くに住み、食事は私の家でさせることにきめて帰らせる。

夜、田中夫妻来る。九歩どほり出来た防空壕を見せる。

●●珍しく兄夫婦そろって見舞に来る。ずっと歩いて来たのだといふ。五反田は全滅し、芝も大分やられたさうだ。戦局の前途を思ふ。不安なくもない。

## 5月25日(金) 晴

四十四回目の誕生日である。京子の時も洋子の

時もさうであつたが、今日も五月らしく●●みづみづしく晴れわたってゐることが何より嬉しい。それに今日は私が残る半生をかけるつもりでの演劇運動がスタートをきる日だ。

この時ひょっこり田中夫人が来り。田中君に急にお召があり、今晚大阪に帰るので、登美子に弁当をつくってくれないかとて、不用になった酒をとゞけてくれたので、さっそくそれで神にもおみきを捧げ、それを家族等と飲み交す。

場合によっては銀座まで歩かなければならないので、八時には家を出るつもりのところ、又もや警報が出る。永井君の家に行き、情報次第では直ちに出かけようと誘つて家で彼を待つ。

彼の来ること遅く

ー昭和十八年八月二十二日の欄につゞく。

◇昭和二十年五月二十五日の補遺①

九時近く家を出る。

国道は明方のそれにもまして罹災者の列えんえんとつゞく。そして、右も左も前方も見わたすかぎり生々しい焼野原である。よくもやられたものかなと憤り且つ嘆息する。

が、幸ひにも道ゆく人々の顔は決して陰惨ではない。そして我々の演劇はこの焦土の上に立ちあがるのだ。そのことを永井君と語りあひながら五反田を経て芝の三田まで歩く。そこから都電に乗って銀座の事務所に行く。

一足さきに行く千秋実、佐々木踏絵夫妻の姿に気がつく。

空襲と交通事故のため●●出席予定者の半数が欠席

…園池氏もつひに罹災したる由。

田郷、永井、山下、福島、千秋、佐々木踏絵のこちら側に、協会側から北村、松永、両幹部ほか二三の人が出席し、初顔合せを兼ねて発協議会を開き、持参した弁当で食事を共にする。

三時すぎ解散。永井君と有楽町から大井町下車。そこから線路づたひに歩いて帰る。

岩田さん昨日自分で見つけて来たホンモノの階段を防空壕にとりつけ、蓋にブリキをとりつけて六日間を要した防空壕こゝに完成。岩田さんに七十五円お礼をする。

一次頁につゞくー

(以下、1943年8月24日の欄)

◇昭和二十年五月二十五日の補遺②

防空壕完成のため遅くなったので、夜はローソクの灯で誕生祝ひの膳につく。金●本氏より手に入った肉あり。田中さん●●にもらった酒の上に班長に対する特配の酒あり。食料欠乏の戦時下には思ひもかけなかった豪華版である。快く酔って眠る。

が、やっと一眠りしたところを警報によって起される。一昨夜のことがあるので、すぐに起きて身支度をとゝのへ、防空準備にかゝる。

間もなく空襲警報出て早くも敵機見ゆ。例により一機又は二機三機づつの波状攻撃でしかも二方面よりの来襲だ。そして、つひにわが隣組ー渋谷さんの家に焼夷弾落ち、その●●破片はわが家の●●屋根にも落つ。まづ我が家の火を火叩きで消しつぶし、渋谷さん家の消火にはせ参ずる。

5月26日(土) 午前一雨 午後一晴

大空襲一大敢闘の一夜は明けた。

水の補給路となった我が家の茶の間は惨憺たるでいたらく…。しかも陰鬱な雨である。早く一服つけたくマッチを探●●●●すが、なかなか見つからぬ。業を煮やして壕の中に横たはり、田中さんからもらった清酒を冷で飲む。肴は二三日前に掘り出したニンニクにみそをつけて食べる。壕のゴミくさい匂ひとニンニクの味覚

が、おのづと満洲奥地の旅を思はせて愉しく、なつかしくなる。

昭和病院に渋谷夫人を見舞ってゐた登美子の帰りを待って朝食(夕食?)。――●本つけて、しばらく休む。

5月27日(日) 晴

午前中、馬込第三国民学校に見舞に行く。校長はゐなかったが、居合せた二三の先生に見舞を述べて帰る。

帰途、あまりにも空襲被害の大きいのに茫然となる。

午後、京子を手つだはせて壕掘りによって汚した道路の整理をし堀の外に盛土しをして畠をつくる。

今夜も電灯なし、ローソクの灯で夕食をとる。平尾会長が慰問にもって来てくれたバナナ製ウキスキーを飲む。うまい。

夜、前の田実夫妻、話に来、暗の中に茶をすゝり、田実夫人持参のコンブや家のゴボウの煮メを茶うけとする。

前の焼跡には耿々と月が照ってゐる。原始生活もなかなか味がある。

○5月28日(月) 晴

六月から新聞の購読は各家庭一種限りとなり、隣組一括で新規に申込むことになる。

登美子が橋本さん(洋子の知合)を見舞ってゐる間に、その手配をしてゐるうちに時を過し、十時すぎ家を出る。大井町駅まで歩く。途中外食券食堂で昼食をとる。券は福島君より得たもので昼食代五十銭。とても一人分では満腹でさうに●ない。

電車は罹災者の群で言語に絶する混み方である。新橋で降りて銀座の事務所まで歩く。松坂屋も

三越もつひに爆撃を受けてゐる。

三木ビルも隣の中島ビルよりの類焼により二階三階は焼けてゐたが、幸ひ我々の部屋のある四階は…

以下昭和十八年八月二十八日の欄に

昭和二十年五月二十八日の補遺

無事であった。但、芸能部の部屋に当てられてゐる小部屋は灰と塵とで今日は使へさうにもないので、広い方の室で女の事務員から被害の状況など聞く。

折柄、空襲警報が発令されたが、室の一隅に兵隊さんが数人詰めてゐるので何となく心強い。部員は福島君が置手紙を残してゐるだけで誰も顔を見せない。

丁度そこへ来合せた松永健哉君からタバコやカンザウ（漢方薬用）のお茶やブドウ酒の御馳走になり、部員に対する明日の手配を書き残して二時頃事務所を出る。

宮城前に到り謡（遙）拝。あるひはと思った二重橋は幸ひ御異常なさうであった。

夕食後、永井君の様子を見に行く。永井君の家のすぐ前の家に焼夷弾が落ちて大奮闘をした話を聞く。お銚子一本ごちさうになり、洗足池付近の罹災跡を見て、中原善徳氏を、その焼跡の壕に訪ひ、お茶の御馳走になる。こゝにも原始的創造生活が始まらうとしてゐるのである。

## 5月29日（火） 曇

警戒警報で起されたまゝ眠れず、平尾さんから得たバナナウキスキーをローソクの灯で飲む。が、安眠できず、三時には起きて汲取りをする。ついでに塀の外の畠に穴を掘って南瓜の苗床をつくる。

家の側面の塀の外を京子に手つだはせて整理

し、そこにも畠を作らうとしてゐると警戒警報、やがて空襲警報となる。情報がわかるまでの間、南瓜の支柱などを立てる。

やがて敵機の爆音聞え、P51を加へたB29の大編隊といふので三人で待機する。

壕の中にゐるので情勢がよくわからないが、ザアザアザアザア…といふ敵機の頭上を通過するらしい音は

昭和十八年八月三十日の欄につゞく

昭和二十年五月二十九日の補遺

この上もなく不気味である。正直のところ、不安と恐怖を感じず。

が、自分たちはP51の襲撃とのみ思つてゐたので、ひたすら待避してゐたのであるが、隣家の谷口さんの知らせで外に出てみると、B29の編隊はつぎつぎと横浜方面と思はれるあたりに来襲してゐる。

朝のうち晴れてゐた空は爆煙のために濛々と煙り●●文字どほり天日ために暗い。

幸ひ午前中に解除となる。

午後、福島知樹君来る。そのもたらせる情報によれば来襲せる敵機はB29 五百機、P51 百機の戦爆連合六百機の空前の大編隊で、ために横浜市はおそらく殆んど全滅したのであらうといふ。言ひやうもなき●●●●●●●●（今夜も敵機の来襲ありさうだとの噂に）憤りをおぼえる。

福島君、今夜は泊ることになり、町会より得た酒を二人で飲み、ローソクの灯で四人、夕食をすまし、今夜も空襲があるだらうとの噂に万端の用意をとゝのへて寝につく。

堅固な壕が出来て、何と言っても心強い。

## 5月30日（水） 晴

今日も早く起きて一群に四枚づつの新聞を回読

させる手配をする。

福島君は立川と千秋の家を見舞ふとて●今日から歩いて出勤する京子とともに家を出る。

自分は六月一日から変る新聞購読の隣組一括申込のてつづきをし、事務所に出勤すべく大井町駅近くまで歩く。途中、外食券食堂に寄らうとして気がつけば、財布を忘れて来てゐる。自分に腹を立てながら引返し、そのまゝ家にゐて防空資材の残りの整理をする。

二十五日に敵の直撃弾により家を焼かれた千秋実君来り。演劇運動につき語る。幸ひ金本さんの手を経て米一斗入手したので飯を出して帰らせる。

岩田さんの家で入浴後、今夜はローソクさへなく薄暗の中で夕食。町会から得た酒の最後の一杯を飲み、ぐっすりと眠る。

## 5月31日(木) 晴

今日の新聞は一群に五枚づつ、それを回覧させる手配をした後、朝食。金本さんの手を経て入手した米はやはり豆粕入りであるが、配給のよりは少しおいしい。

永井君の家に行き、午後二時に銀座の事務所に集るやう知らせ、その足で仲原善徳さんの壕に訪ひ、お茶と琉球の黒砂糖の御馳走になって帰る。

●協会首脳部に提出して交渉すべく芸能班員の人名表その他を作り、千秋君との約束もあるので、今日は是非事務所に顔を出すべく十一時前に家を出る。が、途中で警報が出たので引返し、昼食を家ですまして午後改めて出かける。と、又も警報発令。しかし、今度は思ひきって出かける。大井町線今日も不通。大井町駅まで歩く。すっかり初夏の陽気で歩くのがかなり苦しい。午後二時、銀座事務所に集合。

田郷、永井、千秋、福島顔ぶれで今後のこと

を改めて協議し、それぞれ仕事の分担を決め、一同の肚を極める。

五時近く散会。福島君今日から同居することになるので、永井君を加へて三人、大井町駅から歩き、途中「いろは食堂」といふ外食券食堂でちょっと腹ごしらへをして帰る。

外食券三枚四枚を一度に使ひそれを全部食べてゐる人や、弁当に詰めて帰る人などがある。戦時下食生活の問題につきしみじみと考へさせられる。

今夜も電灯つかず、福島君がもって来た懐中電灯の灯で万一の支度をし早々に●床につく。数日つづいた酒も今夜はないが、よくしたもので案外らくに眠れる。

## 六月諸事要録

つばさ隊給料 400円

## 6月1日(金) 晴

同じ隣組内の泉栄次郎君の出征につき隣組で祈願式と見送りをやる。自分は班長として挨拶を述べる。

今日は出勤のつもりであったが、福島君と京子が共同農園の開墾をやるといふので、自分もその気になり、午後から京子と畠いちりをやり、●●時なし大根、カブラ、昔大根、小松菜の種子を蒔く。

午後三時から町内にある稲荷神社の祭礼に班長として参列。湯呑三杯のおみきに顔を赧らめ帰り、道路傍に土を盛りひまを植えるところを作る。夕刻、●●●●●永井君来る。●事務所に行つてゐたとて、松永君の伝言をもたらず。

夜、家三人で夕食。●●●立川にフトンをとりに行つてゐた福島君は夜に入って帰り、今日から間借りしてゐる中山さんの家に泊る。



今夜も電灯つかざる。

## 6月2日（土） 雨

午前九時。やうやく開通の運びとなった池上電車で出かける。省線五反田の札売場は白木屋。行列をしてやっと手に入れる。

銀座の事務所に行けど、松永君あらず。翼賛人形劇に園池氏を訪へど、これも不在。雨の中を新橋まで歩いて、大文字という外食食堂で昼食をとる。二枚の白券で二人分を食って何とか満腹を感じる。

事務所に帰り、松永君や千秋君を待つ。一その間、空襲に破られた窓から下の戦災地を眺めると、雨の壕の中で退屈してゐるらしい罹災者の姿が見える。

寒さをおさへながら暫く居眠りをしてゐるうちに、やがて二時も回ったので、永井、千秋、松永その他の諸君に伝言を書残して帰途につく。途中、永井君と逢ふ。

連絡のため居残りを頼み、先に帰る。

京浜（現在の京浜東北線か？）で帰り、大井町駅に近い「いろは外食々堂」でハラをこさへて帰るつもりであったが、なかなか電車が来ないので山手線により池上線で帰る。

福島君は既に帰つてゐた。

少しでも米の足しにしたいと、また家を出て荏原警察署近くにあるといふ外食々堂を探したが見つからず、空しく帰る。

夜に入り福島君の妹来る。

今日も電気なくガスなくラヂオも聞けず、ローソクの灯で茶をのみ早々に眠る。

## 6月3日（日） 晴

（冒頭、一行が塗りつぶされている）

福島兄妹をも加へて朝食。

福島君の妹と京子まづ家を出、ついで福島君も細君の実家を訪ふべく家を出る。

午前中は班長の用に追はれる。

午後、防空壕の手入れをする。

岩田君にこさへてもらった壕は壁が一重なので、それを二重にし、筆筒の台をこさへる。

十一日ぶりに電気来る！

夜が明けたやうな気がする。

やがて京子帰る。一朝、美知子を訪問した折の話をする。

美知子は明日また栃木へ帰任する由。

●久しぶりに電灯の下で夕食をとり、岩田さんのところに入浴に行く。

夜、警戒警報発令さる。が、幸ひ事なく解除。

◇

夕食前、永井君来り。明日の打合せをする。

## 6月4日（月） 晴

午前十時、家を出る。まつすぐ芝の本部事務所に行く。松永君、永井君と三人で相談。

協会厚生部の手になる代用昼食の御馳走になる。

午後、企画会に出席。

この日、平野教育部長、岩村企画課長、並に航空本部の柿谷氏等と会合す。

銀座の事務所に行き、園池氏をも加へて自分等だけで今後の打合せをなす。

本日の出勤者

田郷、永井、千秋、園池

猶、この日、大船の野上、赤間、鈴木の上三君に会ふ。

## 6月5日（火） 晴

午前十時、千秋、永井の両君来る。三人、肚を割って今後のこと一即ち協会の新態勢のもとで、あくまで突進するか否かを協議する。



断行を決定し、三人、午後は銀座の事務所で協議をつづける。その結果、とにかく協会の意向を確かめることにし、明日の午前、平野氏なり岩村氏なりに逢ひたき旨を千秋をして申込みしめ、自分と永井君は打連れて東劇三階に日本移動演劇連盟を訪ひ、今後の協力を求める。

#### 6月6日(水) 晴

四時に起きる。

家のまはりの南瓜を見てまはる。

芸能団の人員名簿をこさへる。

八時すぎ家を出る。●

情報局に管原情報官を訪ひ、今度の運動につき説明をして諒解と協力を求める。歩いて芝の事務所向ふ。●●●舗道にタバコの吸ガラを拾ひながら歩く。

岩村企画課長と懇談、劇団を専属とすることにつき言質を得る。

この協会で経営してゐる食堂の食券を●求め、昼食のおかずを得る。こゝで食事。永井、千秋、福島 of 同志四人とともに銀座の事務所向ひ、今度はこゝで我々だけの相談をやる。

新しい同志、野上、鈴木、大峯の三君を迎へ、更に岩村企画課長、松永君、園池氏の三人を加へて懇談。こゝにいいよ北海道行のこと決定。

中心人物四人で大日本興行協会に挨拶に行き、家に集まって予算や演目について相談する。

#### 6月7日(木) 雨

三時すぎ目をさまし四時に起きる。

予算、演目その他を作成し午前九時、家を出る。

長原駅で永井君と一緒にいる。

予算、殊に団員等の俸給の券につき岩村氏と懇談。昼食後、園池氏の幻灯。

午後は永井君は文報に、千秋、福島両君は移動

演劇連盟に、新加入の野上君等三人は、清水、船木両君のところへ使ひに、それぞれ奔走をはじめる。

自分は久しぶりに早く帰る。

が、タバコがないので何事も手につかない。

#### 6月8日(金) 晴 夜一雨

今日も早く起きる。仕事の前の運動のつもりで道路の整理—防空壕の土盛りなどするうち、時間をつぶしてしまふ。

永井君と福島君は朝鮮部落にドブロクを求めに行き、正午前に三本を掴得て帰る。そこで明日のつもりであった松永君を今日招待することにして昼食後家を出づ。

銀座の事務所に行く前に日比谷書房の飯店で備忘録二冊(七円)を買ひに回る。

昨日野上君を使にやったので船木敦子、清水妙子の両君来り、その進退を決定する。

出席者…田郷、千秋、野上、清水。

千秋君とともに松永君を案内して帰る。ドブロク三本で夜まで歓をつくす。

夜に入り松永君、永井君に送られて長原から帰る。千秋君は岩田さんところの湯に入ってから帰る。

#### 6月9日(土) 晴

永井君と福島君は今日も朝鮮部落にドブロクを探しに行く。今日は山田君招待の予定である。

自分は午前十一時、芝の協会本部に行き岩村企画課長と逢ひ隊員待遇問題につき先日話し残したことを相談する。

協会更生課の食堂から代用食三人分(三円)をとり、二人分は家の土産に持ち帰ることにする。銀座事務所に行き、鈴木清一君より汽車の乗者賃金その他に関する報告を聞く。

福島君を日本移動演劇連盟に使にやり、大河内君、山田君の様子を聞かせる。大河内君は多用のため今日は来れず、山田君は一昨日船木君を使にやったが一不在の由。それで山田君の招待を中止して、北村弥栄氏を招くことにし、福島君を先に帰らせ、千秋君●と二人で北村さんを案内して帰る。

朝鮮ドブロクと牛肉で北村さんを接待し、同氏辞去後、永井、千秋、福島の同志と語る。

### 6月10日（日） 晴

早朝に起き、自分で茶などわかつて演目を決定するため岡田禎子の「勇士愛」その他を読む。警戒警報発令。つゞいて空襲警報。一B29にP51を加へた大編隊らしいので、仕事も出来ず空しく解除を待つ。

昼食後は仕事を止めて京子を助手に防空壕●補強工事をやる。一先日やり残した四壁●を二重張りにする。

五時半、福島君に案内されて洗足池畔の野天国民酒場に酒飲みに行く。永井君は既に先に行って番を待ってゐる。私には最初の経験なので、頗る興趣を感じる。

二人とも幸ひ飲酒券が手に入り、番が来るとともに、それぞれ一本づつを立飲みし、陶然となつて帰る。途中、永井君家に寄り夫人からてづくりの大根三本をもらひ、三人同道で家に帰り、昨日の残りの朝鮮ドブロクを飲む。

### 6月11日（月） 晴

朝、樋口忠雄君、内海さんの伝言をもって訪ね来る。

午前十時半、銀座事務所に部員を集め、協会側との関係その他の経過報告をなし、空襲警報下<sup>マ</sup>に昼食を共にしなから夕刻近くまで演目のこと

を中心に協議をつゞける。

この間、日本移動演劇連盟の大河内君が訪ねて来たので、将来の協力を頼み心づけとして金五十円を贈る。

（以下、二行塗りつぶされている）

### 6月12日（火） 晴

今日は家にゐて演目その他につき考へることにする。

まづ昨日千秋・大峯を使にやってみたので、山下君来る。持参のその作品を読んでもらふ。

銀座の事務所には福島君と赤間君を連絡員として出席させる。

午後、永井君来り、演目の件につき相談。夕食前ちょっと息抜きに永井君の家に行きお酒を御馳走になる。

京子が千秋君と大峯君とが来たと言って呼びに来たので、彼等にも夕食を共にさせながら永井君を加へて九時すぎまで演目の相談をし、やうやく大体決定する。

みんな愉しげに張りきってゐる。

創業の歓喜である。

### ○6月13日（水） 雨

三時半起床。家人を起すのも面倒なので、少しく明るくなるのを待って自分で薪を割り御飯を<sup>マ</sup>焚く。

例のごとく班内の新聞を群別に区分したる後、家人とともに朝食。福島は今日も遅刻。

食後、直ちに協会岩村課長に提出する演目表を作る。

午前九時、家を出る。五反田で先に出かけた筈の永井君福島君と一緒にいる。

午前十時隊員とともに岩村氏に逢ひ、演目表その他を提出。台本印刷につき相談する。

隊員とともに協会の日本間で昼食をとってゐるところに山崎理事より面会を求められ、北海道派遣延期を申渡され、且つ劇団解散をすゝめらる。延期はとにかくとして解散は筋違ひのこと故、銀座事務所に松永君を訪ひ、協議したる後、芝事務所に航空本部の柿谷氏を訪ひ、その責任を問ふ。が、けっきょくかゝる小者を相手にしても、果し<sup>マ</sup>がないので、明朝理事長を訪ふことにして、松永氏とともに神田隆明館に北村氏を訪<sup>マ</sup>●●●●●ひ、懇談の後、真暗な神田街を歩いて秋葉原から省線で帰る。

一方、この間、隊員たちは、手分けして紙を集め、原紙を切り台本作製に夕刻まで働く。

#### 6月14日(木) 晴

みんなは午前中から台本の印刷をやっている筈だが、自分は十一時頃家を出る。

一最初は、航空本部に航空工業教育協会の理事長を訪ふつもりであったが、昨夜北村氏との話合ひにより松永君だけに行ってもらふことにしたのである。

銀座事務所でひとり弁当を使っているところに、千秋君来る。やがて鈴木君を来て、理事長よりの電話のことをつたえる。

(この間の記事は劇団つばさ隊の備忘録にゆづる)

※編者はこの「備忘録」について未見。

#### 6月15日(金) 晴 夕刻より雨

午前六時、家を出て立川に向ふ。

松永君と同道。立川飛行機に香川労務主任を訪ひ、福島<sup>マ</sup>の件につき相談し、帰途、国立に下車し松永君の家に昼食の御馳走になる。

(公生活の記録は、劇団つばさ隊の備忘録にゆづる)

町会より勤労奉仕に対する区からの慰労金が出たので自分で各群長に配りに行く。私達も十九円五十銭を得。隣組共同農園に行き、未着手の分を岩田君に作らせることにする。

夜、警報出で、大いに緊張したが、幸ひ大事に到らず。

◇

久しぶりに在長崎の久田の兄より便りあり。中里の祖父の死を知る。

#### 6月16日(土) 晴

今日から二日、家にゐることにする。

午前中は新聞の整理、日記、定例の平戸への便り(本来ならば十五日)などで費す。

午後、野上、永井の両隊員、我が家に来て上演台本(太平洋の風)の印刷。大宮に帰ってゐた福島も銀座事務所へ回って早く帰って来、●印刷に協力。

右の仕事午後四時終了。永井君に招かれ、同道で同君宅に行く。既に仲原善徳氏来りをりて朝鮮ドブロクの御馳走になる。肴は今どき珍しい小鯖(コアザ)の干物と配給物らしい貝のおすましの外は全部永井夫人手づくりの野菜料理で、醤油の配給がないから、みそで味をつけたといふが、それにしては量も豊富なら味も大変よい。

よい気持ちに酔って帰り、早々に休む。

#### ○6月17日(日) 晴

四時半に起きる。

隣組農園に行き、開墾を始める。

朝食後、再び農園の仕事をつづける。兄夫婦来訪のため中止して帰る。嫂は明後日栃木へ疎開、兄のみ残るといふ。

朝食後、立川に出かけてゐた福島君帰って来、

登美子と三人で昼食。

昼食後、三度び畠の仕事。午後三時、前の田実さんからお茶に招かれ、登美子と行く。新茶に珍しいアメ、いづこも同じ煎大豆…。

夕食後、京子を伴ひ四度び畠に行き、南瓜を移植。自分でコヤンを担で行く。

岩田さんところに入浴に行き、谷口さんとお茶の御馳走になる。

広一君に和英辞典を貸す。

## 6月18日（月） 晴

四時半に起き、薪を割り、●●●●湯をわかし頭を洗って畠を見に行く。

朝食後、吉野氏夫妻に来てもらひ組長就任のことを依頼する。

福島君は家族を東京に招く件につき神奈川の知人を訪ふ。午前中、机につき事務的仕事をかたづけ。—この間、渋谷さん跡をとりこわしてゐる岩田さんに時々手伝ってやる。

昼食は雑炊。

一眠りして銀座の事務所にしかける。長原駅で永井君と一緒に。事務所では園池氏を訪ひ人形劇講習の打合せをなし、放送局に行つてゐる千秋に連絡をとり、早目に帰る。

共同農園に行き、今日も開墾をやる。

岩田さんの家入浴。

◇

福島君は近く阿佐ヶ谷に越す由。

## 6月19日（火） 晴

●●早朝、畠に出て鋤を振ふ。

午前中、永井君と福島君に久我原なる朝鮮部落に出動してもらふ。—佐々木孝丸氏招待の準備である。

午後二時、銀座の事務所に集合。佐々木孝丸氏

を迎へて、今日より「太平洋の風」の稽古にかゝる。右終了後、佐々木孝丸氏と●●●●を家に招じ夕食を共にしたる後、永井君と福島君が再び朝鮮部落に出かけ、ドブロク一升五合を得て、それを汲みかはしながら劇団の今後につき種々懇談する。

## 6月20日（水） 晴

早朝今日も戦時農園に出る。

午前十時、銀座の事務所に集合し、今日から人形劇の講習を始める。奨励のため自分も人形の首を作る。

午後一時から佐々木氏による「太平洋の風」の稽古。自分は読合せを五回だけ聞いて先に帰る。今朝、出かけに福島君に言葉激しく説教をして出かけたが、彼は登美子に色々身の上を打明けて、退団の意向を漏らしたる由…。彼の弱い性格を思へば、この上激励しても所詮は駄目なると思ひ、自分も手放すことに決意する。

五時半、洗足池畔に出かける。そこの国民酒場が今日から再開するからである。行列し順を待って●焼酒一合を得、その半分を立飲みし、半分は瓶に詰めて持ち帰る。持ち帰った焼酒を福島君とともに飲み、将来のことを戒める。

夜は町会事務所における班長会議に出席する。十時、月下の路を帰り、金国（？）君より四十円で入手した朝鮮ドブロクを飲んで眠る。

## 6月21日（木） 晴

早朝、畠に出て昨夕、永井君の手を経て仲原さんからもらったサツマイモの苗を植える。

午前十時、銀座事務所に集合。人形劇講習第三日。自分はこの間に日本移動演劇連盟を訪ひ、伊藤氏や木下君に逢つて、将来の提携方につき懇談する。—この連盟も空襲で焼かれ、数度目

の新事務<sup>マ</sup>に移って来てゐるわけであるが、事務局の陣容も空気もすっかり変って、かつて自分も幹部の一人としてゐたところであるとは夢にも思へない感慨無量である。

●●戦災を蒙った銀座の三越が今日から開店し大勢の人がつめかけてゐる。自分も一寸のぞいて見たが、売ってゐるものは紙芝居の絵ばかり…。午後は佐々木氏を指導者として「太平洋の風」の稽古なので、自分は早く帰る。

帰って、久しぶりに●量に寝そべり、新聞を読む。五時、家を出て洗足池畔の行列に加はる。●野天の国民酒場で一合の焼酒にありつくためである。むしろ、愉快である。「興亜先覚詩史」を読みながら待つこと一時間。首尾良く一合の焼酒にありつく。湯のみ一ぱい飲んで、あとは持帰る。

夜、八時から九時まで第五班内の組長会。

十時過ぎ朝鮮ドブロクを飲んで眠る。

十一時すぎ、警戒警報に起される。幸ひ空襲に至らず解除となる。

## 6月22日(金) 晴

劇団の方は自分だけ休むことにする。

七時、班内の組長総代四人と壕舎の候補地を見聞して回る。帰って「帝都防衛●●功績者表彰申請書」を書く。一劇団の趣意書を書くために休んだのだが、かういふことで午前中はつぶれてしまった。

午後、防空壕の物入の壁を二重にする。

午後五時、家を出て洗足池畔の行列に加はる。野天の国民酒場は今日はクズビキで、自分と永井君とその岳父の三人のうち、自分だけがクズにはづれる。一が、永井君の家に寄り、その焼酒を御馳走になって帰る。

## 6月23日(土) 曇

午前十時、銀座事務所に集る。みんなが人形劇の講習を受けてゐる間に、自分は会計の吉田君と芸能班員の俸給のことにつき懇談する。

午後は早く帰る。

例により洗足池畔の国民酒場に行く。幸ひ今日はクズに当り、店の者に咎められつゝ、焼酒を瓶に詰めて持ち帰り、永井君の家で二人で分けて飲む。

## ○6月24日(日) 雨

午前中に防空壕の補強を終り午後は畠に出るつもりのところ雨のため予定変更。

昼食後、雨の絶間を縫って京子と畠に出る。開墾大体終了。

## 6月25日(月) 晴

出勤前に防空壕の補強工事をやる。

午後、銀座事務所。

本朝、福島君わが家を去る。

## 6月26日(火) 晴

記載なし。

以降、6月27日～30日は一切の記載なし。

## 七月諸事要録

つばさ隊俸給 400円

7月1日～19日は一切の記載なし。

## 7月20日(金) 晴

朝、ひょっこりと富山より洋子帰り来る。三ヶ月ぶりの帰省なり。

午前六時、家を出て永井君と同道、国府台の航

空工業分室における教本完納記念式に出かける。  
市川駅にて千秋君と落合ひ協会の●●自動車に  
迎へられて会場に行く。

式後、園遊会。酒あり肉ありうどんあり…満腹、  
メイテイし編集室にころがりて暫く眠る。

三時、記念撮影後、帰途につく。

7月21日～23日は一切の記載なし。

7月24日（火）曇

午後、駿河台の協会本部に行き、北村氏と会見。

○7月25日（水）晴

午後二時、銀座事務所に行き、劇団員に俸給を  
わたし、すぐ帰る。

幸ひ、洋子、京子まだ出発せずにゐる。注意を  
あたへ小使をあたへて立たせる。

夜、空襲警報出づ。川崎市の由。

7月26日（木）晴

午後一時、銀座事務所に行き、駿河台の協会本  
部に行く。北村氏不在。

銀座に帰り、劇団員のみを残して今後のことに  
つき打合せをなす。

◇

山川幸世君、今日より出勤。

7月27日（金）晴

変朝の夏も漸く軌道に復したらしく今日で三日  
晴天がつづく。この分なら南瓜もサツマイモも  
何とか立直ることであらう。

近くの朝鮮人の家からドブロク入手。五十円。

夏目歯科医に行く。

7月28日～31日は一切の記載なし。

八月諸事要録

つばさ隊俸給 400円

8月1日～10日は一切の記載なし。

8月11日（土）晴 暑し

数日前から思ひ立ってゐた山下君訪問を実現す  
べく朝、家を出る。一鹿児島に疎開させてゐた  
山下君の長男亮一君（四才）が疎開先で急死し  
たので、●その弔問のためである。

山下君の新居は永井君に描いてもらった地図に  
より、すぐにわかった。幼い人の霊前に香を焼  
き、香典をそなへ山下君父妻と語る。

この折、山下君より容易ならぬ話を聞く。日本  
がポツダム宣言受諾の申入れをしてゐるといふ  
のである。デマであれかしと折る。

一旦家に帰って、つばさ隊事務所には今日は出る  
つもりであったが、山下君に誘はれるまゝ、近く  
の朝鮮部落に行つて、ドブロクを飲み、二本を  
さげて、そのまゝ家に帰る。

8月12日（日）晴 暑し

午後四時、山下君と永井君を訪ひ三人で洗足池  
畔の国民酒場に行き、それから家で昨日のドブ  
ロクを飲む予定であったが、山下君、待てど暮  
せど現れないので、六時すぎ、ひとりでドブロ  
クを飲みはじめる。そして食事にかゝった頃、  
やっと山下君やって来る。また飲みはじめる。

山下君、昨日の話—ポツダム宣言受諾の件—の  
真らしい旨を語る。憂愁痛恨おさへがたく悲し  
みのまゝ、ひとり眠つてしまふ。

この間、山下君は登美子や京子を相手にひとり  
で飲み、九時すぎ帰る。



### 8月13日(月) 晴 暑し

満蒙におけるソ連軍の侵出や、活発化●が報ぜられてゐる、わが曾遊の地を思ひつゝ、皇国の前途の容易ならぬを憂ふ。

### 8月14日(火) 晴 暑し

十一日に山下君から聞いたこと、どうやら真実らしく、いよいよ憂ひは深くなって来る。

夜、九時のラヂオ報道で明日正午、重大放送ある旨の予告あり。

警戒警報発令。つゞいて空襲警報となり明方近くに及ぶ。警戒のために外に出てゐる田実さん、小笠原さんと流布されてゐる「噂」について語る。岩田君も来り、ムキになってその噂を打消す。夜明方近く疲れて眠る。

### ○8月15日(火) 晴

ラヂオは朝から正午の重大放送を予告し、新聞の配達午後一時以後となるべきを伝へ巷には何かなし容易ならぬ気はひ満つ。

心配ゆゑ小原君を訪ひ町会として万一に備へおくべきを申入れる。

岩田君、●●重大放送の何なるか●につき意見を求めに来る。折しもラヂオは今日の正午。

●●●●

天皇陛下おんみづからマイクの前に立たせられ詔書を渙発せられる由を伝へる。

岩田君はそれを陛下の御声がかりにて、いよいよ最後まで戦ふことに国民決意すべき旨を諭させ給ふのだと解して興奮して帰る。

小原君来り、同じくこのころにつき●●●わが意見を求む。

そこに、つばさ隊長千秋実も馳せ来たつて、劇団としての向ふ

一補遺欄につゞく

(以下、補遺欄)

八月十五日

べき道につき指示を求む。依つて、午後二時半、事務所に行き、協議すべき旨を答へて先に行かしむ。

一場のデマであれかしとのみ祈つて来たこと今は動かすべからざる事実のごとし。小原老にも覚悟を促し、輿論の指導に関する町会の任務を会長に説くやうすゝむ。

早目に昼食をとり一家三人心身をきめて時刻を待つ。

十二時十分前、田実氏夫妻来り、つゞいて吉野氏夫妻、ともども我が家のラヂオの前に正座す。九分どほり予期しつゝも猶ほデマの反対であれかしと祈る。

が、

昭和二十年八月十五日正午。

あゝ、●●いとも尊き玉音を臣民われらこゝにうつしみの耳をもつて拝しぬ。つゞいて鈴木首相の放送…。

涙せきあへず傍らなる京子の手をひしと握りて辛うじて堪ゆ。

午後二時半、銀座事務所に到り、現在の責任者たる佐々木孝丸氏とともに団員の意見を聞き、今後の指示をあたへて宮城御前に到り、一同奉拝したる後、つばさ隊をこゝに解散する。

### 8月16日(木) 晴

日本国民として、果していつの日、敗戦国の悲憤を覚悟したであらうか…。

新聞は阿南陸相の自刃をつたへ鈴木内閣の総辞職を報じてゐる。

この朝、京子と岩田さんところの定子さんとを伴ひ、再び宮城を奉拝し、そこから歩いて靖国神社にお参りし、都電で新聞(新宿か?)に出

る。さまざまの感慨をおさへて新宿三越をのぞく。 一昭和二十年

### 8月17日（金） 晴

朝、兄を訪ふ。登美子と京子をしばらく熊本にやるべくその切符入手の件についての相談である。午後一時半より町会長宅における組長常会に出席。散会后、平尾会長と輿論指導のことにつき語り、帰途、小原老と同道、町会事務所に依り、小原夫妻、伊東老人とともに感慨にふける。夜、家で隣組常会。一本年度になって最初の常会である。今後の国民の覚悟や団結につき自分から一自分の私見をも加へて一町会の精神をつたへる。

### 8月18日（土） 晴 暑し

御詔勅を拝して三度目の朝である。深い覚悟は既に出来てあるものの、日とともに現実の切実なる苦悩も亦深くなって来る。

そのため今日は終日うつゝとともなく気持で過す。わづかに暑い照る陽の中に焚火をし湯をわかつて行水をしたのみ。

●技研に入ったことを喜びとし誇としてゐた京子も今日●を最後と夕おそく帰り来る。

この数日、日も夜も近隣の日とが一事局の急変に伴ふ不安や寂しさからであらうよく話に集まって来たが、今夜は家のものばかり三人で夜の茶など飲む。

そこへ思ひがけなく岩田さんとこの広一君が帰京したとて挨拶に来た。海軍の通信学校に行つてゐたのだが、半月にして解散になり逸早く帰つて来たのである。

### 8月19日（日） 晴 暑し

敗戦国の悲哀…。それが日を追うて胸に迫って

来る。が、今日は漸くそれより立ちあがる心境にはなつたものの、体の調子は反対にめっきり疲れをおぼえ、すっかり気力と張りを失ふ。食物の関係でもあらうか。

こゝのところ夕食だけは連日代用食。おかずは自作のインゲンに岩田君の胡瓜…。それも塩が少く漬物に出来ないので、生でばかり食べてゐるのである。

◇

岩田君一家、今日岐阜に疎開のため出発。岩田君と広一君は何れ帰る筈ではあるが、何だか一人とり残されたやうで、いさゝかわびしくもあり、あわて気味にもなる。

然し、もっと情勢を凝視する必要もあるし…。

◇

久保田万太郎の随筆集「八重一重」を読む。

やはり書くのだ。私は作家である。最後まで頑張らう。

### 8月20日（月） 晴

昨朝来やっと平静なる気持で目をさますことが出来るようになった。

昨日から床屋回りをしてゐるが、どこも満員なので、つひ今月も登美子に刈らせ、庭に湯をわかつて洗髪し行水する。

京子を芝の兄の家にやる。登美子と京子の九州行切符について、その後の状況を聞かせるためである。

昼食、久しぶりに豆腐一配給の大豆を豆腐屋にやつてつくってもらつたもの。

午睡。

非常用として一人八個づつの罐詰の配給あり。——人十一円三銭。

岩田君とこより薪割の斧を借りて薪をこさへる。

千秋実、明日の集会（北村氏との懇談）の知ら

せに来る。

夕食後、兄夫婦来る。

---

陛下の思召により本日より燈火管制解除となる。

## 8月21日(火) 晴 甚だ暑し

気持やうやく平靜。

例のごとく新聞の区分けから一日の生活をはじめ。

朝食後、三つの新聞を念入りに読む。

陛下の思召により娯楽機関の復活を急ぐべく各新聞に権威者の意見が出てゐる。われわれの責務もいよいよ重大となる。

日記を記して後、昼食まで薪割をする。

その後の銀座を見るべく早目に昼食をとって家を出たが、山手線の故障のため銀座の事務所に着いたのは定刻の二時を過ぎること三十分。

佐々木、永井、千秋の諸君とともに北村氏に逢ひ、今日までの経過を報告し、解散のことに決定。北村、永井の両氏とともに帰途につく。

夕食後、田実夫妻を招き夫人達の九州行を中心に雑談をつづける。

この日、思ひがけなくもビールの配給あり。

夕食時と寝がてとにそれぞれ一本づつ飲む。

## 8月22日(木) 午後以降雨風 夜台風

つひに敵軍のわが本土進駐のことラヂオをもつて発表さる。

三千年の、汚れなき我が歴史、かくして汚点をつく。この汚点を如何にして拭ひ去り浄化すべきか、七千万国民の今後の生命は、そのためにのみ捧げられなければならぬ。

新聞を読みたる後、今日も昼食まで薪割をする。昼食は配給の、ソウメンのようなうどん…。

午睡。

夕食にビールを飲む。一本二円也の配給のビールなり。谷口さんの留守宅の分を三本回してもらってあったので、寝がてにも又一本を飲む。夕方より荒れ出した天気、夜に入るに及び次第に激しく、物凄い音とともにわが家の塀つひに倒壊…。

本日より天気予報の報道再開。

## 8月23日(木) 晴 夜再び風雨

夜来の台風にも塀も畠も目茶々々となつてゐる。まだ早い、仕方ないので南瓜もとつてしまふ。天気のせゐか今日は何をする気力もなく終日ゴロゴロと過す。

が、午後、畠に出て倒されたトウモロコシを起し、帰途、服部君に逢つたので、ふと思ひついて、塀の修理を依頼する。

◇

今日は珍しく砂糖の配給があつたので、夕食はうどんと砂糖を用ひた代用食ですます。

◇

夜、電灯つかず。ローソクの灯で茶など飲みながら三人で思ひ出話などする。一戦ひ敗れし故か、往時のことがしきりに思ひ出される。

◇

数日ぶりに郵便一洋子の手紙あり。

## 8月24日(金) 雨

豆台風なほ愚図つく。

朝、三つの新聞を念入りに読む。

連合軍進駐の日も迫つた。もう理性としては国民の覚悟も出来あがつてゐるに違ひない。

問題は唯この屈辱感を将来の大成への原動力にどうしておきかへるかの、気持の問題である。その気持の整理が出来てゐない証拠に一わづかにタバコのことから登美子と諍ふ。

その気持ちを紛らすべく洗足駅付近に一本屋を覗くつもり散歩に出かける。と、驚いたことにそこら一面が焼野原と化してゐるのだ。あゝ、こゝもやられたのか！

◇

今日も色んなものが配給される。

◇

夜やっと電灯がつく。

## 8月25日（土） 雨

念入りに新聞を読む。

油の自由販売があつてゐるとて班内の人々さへぐ。事実とすれば今日といふ日に自由販売をやるもの並にやらせるものが悪いのだ。登美子を町会にやって交渉させる。念をおすために自分もあとから出かける。

小原氏、警察と連絡をとり、落着。

いよいよ敵連合軍本土進駐も明日より始まることとなり、愚図つく雨の絶間に敵機が縦横に帝都の空を飛びまはる。監視のためである。万感胸に迫る。

夜、何をする気力もなく、古い写真など眺めてゐるうち、気持ちいよいよ鬱ぎ、早々に床に入る。蚊帳の中で「アンナ、カレニナ」を少し読んですぐ眠る。

## 8月26日（日） 雨 時々晴

いよいよ今日は連合軍進駐の第一日であつたが、台風のため四十八時間づつ順次延期となつた旨の発表あり。但、連合艦隊の相模湾入港は予定のとほりの由。

午後、薪割をする。やっと油の配給にありつき夕食は久しぶりのテンプラ。

夜「アンナ、カレニナ」の上巻を読み了る。

◇

夜、眠れず、色々のことを考へる。

◇

こゝのところずっと山田博士にかゝつてゐる京子の容態、少し気になる。

## ○8月27日（月） 晴

登美子とよしなきことで諍ふ。

終日、孤独を感じる。

小原氏よりウイスキーを少しく分けてもらひ、大いによろこぶ。

●●●●父親（岩田君）とともに岐阜に行つてゐた広一君、ひとり先に帰京して、おみやげの西瓜を分配してくれる。今年最初の、そして、あるひは今年最後の西瓜であるかも知れない。

## 8月28日（火） 晴

敵機、帝都の空を縦横に飛ぶ。

思ふことは多けれど、それをおさへて終日薪割をする。

夕食はうどんと粉食（米の粉、トウモロクシの粉）の代用食。

食後登美子と畠に出て大根の種を蒔く。

夜、広一君、代用食（自宅で蒸かしたパン）をもって遊びに来る。

薪割の疲れ甚だしく「アンナ、カレニナ」をひろげたまゝ、うたゝねをしてしまふ。

◇

冷凍蜜柑の配給。自分で町会にとりに行き、組長たちに分配する。一箱二十九円五十銭、一個十三、四銭に当る。

## 8月29日（水） 晴 甚だ暑し

台風はどうやら収まったやうだが、そのおみやげが猛烈に暑い。真夏以上の暑さだ。

大工の服部君、約束に基いて塀の修繕に来てく

れる。台風でこわされた塀である。自分もその助手をつとめ、午前中に大体終了。辞退さる同君に昼食を共に●●させる。

午後は戸や障子のガラスをはめさせる。―そのガラス代をも含めて金三十円を渡す。

幾らか広くなった裏庭で焚火をし湯をわかして行水をし、服部君と大崎広小路の国民酒場に行く。●●●自分としては始めての酒場である。三時半から並んで五時半にやっと「なほし」コップ一杯にありつく。

夜、岩田君とこの広一君遊びに来る。

### 8月30日(金) 晴 暑さ酷し

敵連合軍総司令官マツカサーの本土進駐の日である。

四発大型をはじめ各種の米機わが帝都上空を縦横無尽に飛びまはる。まことに感無量である。

が、考へまいとして終日なんといふことなしに日を送る。即ち、昨日大工の服部君に塀の修理をしてもらったのにひきつゞき、家の外まはりの整理をする。徒らなる感慨から立って、わが一生の仕事、創作にかゝるべく、まづ住居の整齋を期さうと思つてのことではあるが、それも集中的には働く気にならず、薪を割り、古材をかたづけ、炎天下に焚火をし、幾度となく行水をしたりして時を●過す。

夕食近くに永井君遊びに来る。

◇

豚肉入手―百匁三十円也

### 8月31日(金) 雨

マツカサー進駐の新聞報道を読む。

空には四発大型の編隊をはじめ敵機の乱舞するあり。

終日、●(新聞のほかは)読むことも書くこと

もせず、便所の汲取をしたり焚火をしたりして過す。

但、洋子への手紙を書く。―かうした虚脱●状態の奥の心を語りたいからである。

今日午後からは永井君と銀座探訪に出、帰りは大崎広小路の国民酒場にでる…といふつもりであったが、雨。

が、永井君が来たので、やはり雨をして家を出る。但、時間が遅いので銀座は止して、中目黒駅前の国民酒場に行く。そこは二人とも始めてのところで、ガード下によしず張りをして店を開くとのことであつたが、あゝにく今日は店のもの待てど待てど来らず。

集まった数百人のもの、みな深刻に失望して帰る。

◇

この日、午前、福島知樹君、五つになる息子をつれて立寄る。

空襲の所の負傷●●●●●のことなど語って帰る。